

強壯なる兒女を生むことになる。

二、美の觀念が配偶の基準となることは、人類界に至りて最も著しい現象であるが、該觀念の對象は、人種によりて大差がある。即ち

- (イ) 濠州土人は、歐米人の常とする高い鼻を笑うて、彼等獨特の饅頭鼻を美とする。
 - (ロ) 交趾支那人は、歐米人の白色齒と紅色の頬とを可笑しいと思つてゐる。
 - (ハ) 支那人は、小さい纏足と頬骨の突起せる婦人を美人とする。
 - (ニ) 日本人は、歐米人の賞する赤髮あかひげ(Braid hair)を感服せず、黒髮と白色なる皮膚とを賞讃する。
 - (ホ) 歐米人は、婦人の胸を雪に譬へて賞美するが、馬來人はその金色を理想とする。
- 三、男子は、一般に若かい健康で且つ能く發育せる女子を好む。そこに古代ギリシヤの藝術が起り、愛と美との女神はその理想の象徴となつたのであらう。

四、男女選擇に關する一般の傾向は、

- (一) 各人種特有の理想的タイプ(前述の如き)、健康なるもの、
- (二) 肉感美と優雅美とを共有する女子、

(四) 強壯で、沈着の中に敏捷であり、容貌もよき男子。

(五) 特に文明人にありては、性格人物道德宗教遺傳血統及び才能の外に、富や地位名譽も主要なる選擇要素となつてゐる。

然らば以上の基準に據りて淘汰發達し來りた現社會は、之を昔時に比較して、男女共に美貌や健康の所有者又人格才能信仰の優秀者、富と名譽の持主のみなりやといふに、事實は全くそれ等を裏切つてゐる點も少くないと思ふ。例へば他の方面は暫く措いて、人口に對する美貌男女數の比例は如何。若し統計にとりて之を比較し得るならば、隨分興味あることであると思はれるが、恐らくは昔も今も大體その百分比例に變化はあるまい。美貌者が人爲的に集散すればとにかく、自然の狀態に於ては都會も田舎も同一率を以て配賦せられてゐるように見える。而して何れに於ても絶えて斯うした美貌者の増加率を見ないといふは何故であらうか其の理由たる隨分複雑でもあらうが興味ある問題である。

五、結婚の起原並に進化

結婚は如何なる起原を有して、如何に進化せしものなるか。結婚とは人類社會の專用語であるか。

人類と動物とに普遍的なる結婚の内容はなきか。一體結婚とは何を意味するか。若し之等の疑問に對する合理的解答ありとすれば、それは確に生物學上は勿論、社會學倫理上に將た吾人の實生活に、指導の方向を示すことにもなると思ふ。故に先づ結婚の定義より述べることにする。

- (一) 小説家は結婚を定義して、『人類求愛の最極』(The climax of human courtships)であるといふ。
- (二) ラスキン (Ruskin) は、『Marriage is only the seal which marks the vowed transition of temporary into untiring service, and of fitful into eternal love.』即ち『結婚とは、一時的奉仕が不斷の奉仕に、且つ發作的の愛が永久の愛に變せしことを表はす契約の調印に外ならない』と定義づけた。
- (三) 法律の方面から、『結婚とは、法律上夫と妻との關係に於て結合せる一人の男子と、一人の女子との身分である。』(Marriage is the civil status of a man and a woman lawfully united in the relation husband and wife) とは英國の見方で、文明國の各自に於て解義上の差違がある。我が日本では、法律上何の規定もないやうである。
- (四) 基督教を信する諸國では結婚を、『A mutual and voluntary, compact, properly based on mutual regard and affection and suitably ratified, to love together as husband and wife until separated by

death. Its main design is to constitute the family, for the preservation of moral and social purity, the continuance of the race, the training of the young for the duties of life, etc.』『結婚とは相互の尊敬と情愛との上に正當に基礎づけられ、且つ適當に是認され、死に至るまで夫婦として同棲する相互の任意の約束である。結婚の主要なる目的は家庭を作りて、道徳上並に社會的の純潔を維持し、種族を繼續し人生の義務等に對して子供を訓練するにある』と解してをる。

- (五) 尙一般には、結婚を簡單に『結婚式による一人の男子と一人の女子との結合』(The union of a man and a woman in matrimony) と見ることもあるが、斯の簡單なる定義に由りて觀るも、今日我が國に廣く行はるゝ所謂『内縁の妻』なるものは、如何に新らしき法學者が、その結婚と認むべきことを高調しても、それは決して結婚でないことになる。然らば果して何であらうか。それは合意の姦淫即ち和姦と見ることが恐らく合理であらう。

- (六) 兩性問題の權威者ウェスターマルク (Westermarck) は、生物學上より次の如く定義した。之は生物をも包容するゆるぎ別に人為的の結婚式を必要としない。そこに内縁の妻なる當事者も參加することが出来る。即ち『結婚とは、男女間に於ける、變り得べき持續期間の性的結合である。その結合は、性交の後少くとも産兒まで繼續せらるべきものである。』(“Marriage is a sexual

union of variable duration between men and women, a union which is continued after copulation, at least till the birth of the child.") とも定義してゐる。

扱て以上(一)より(六)に至る定義を通觀するに、(一)(二)(三)(四)(五)は、全く人類に限る定義で、(六)に至りては人類は勿論であるが、他の動物をも包容する廣汎なる結婚の定義である。かうなると結婚といふものは、主として人類間の出來事であるとはいへ、動物も亦その名稱の下に参加し得ることになるのである。然らば動物に於ける結婚とは如何なるものであつて、人類殊に文化人の結婚に比較して果して如何なる異同があるか。それは極めて重要な問題である。従つて吾人は、是非ともそれを解決して置かねばならぬ。その解決のためには、先づ以上に舉げた人類の結婚に於ける定義の、完全性を有すのや否やを順次吟味し、その最も妥當なりと思ふ定義を考察する要がある。然し茲には先づ(六)の定義を肯定して高等動物の結婚なるものより、遂次人類結婚の起原といはるゝ點に及び、簡單に之を述べて見ることにする。(次項は(Formaによる))

鳥類の於ける結婚は、概して永久的一夫一婦主義で、夫婦道德は頗る優越である。之に反つて、哺乳類の結婚期は、甚だ短期間にしてその期間の長短は、動物種類の出産期の長短によりて差がある。一般に性交の後、雄は雌に對して僅に注意を拂ふのみである。然るに哺乳類の、最高等に屬す

る類人猿類即ち猩々、黒猩々、大猩々及び手長猿類になると、永久的一夫一婦制度なるのみならず、家族生活の開始を見るのである。即ち雄は雌及びその子供を保護する。而してその子供には年齢を異にするものがある。換言すれば、兄弟か姉妹か一人以上の子供等がその両親と同居する。それ等の子供等と母親とが樹上に居る時には、父親なる雄猿は、樹下にありて彼等妻子を安全に、保護してゐるのである。又原始時代の人類を考察するに、彼等の社會には一夫一婦を常とせしも、一夫多妻の家族生活もあつた。そのいづれの場合にても、妻は子供を注意し、夫は妻子を保護して、家屋を作り食物を得るに努めた。尙その外には、勿論性慾とかれの誇りの満足を得た。最多數の傳説によれば、人類の原始時代に男女混交又は亂婚生活の存在せしことを語り、又之を主張する學者もあれど、斯道の權威者ウエスターマークは確證を擧げてそれを否定してゐる。

夫が妻子のために食物を供給することは、野蠻人間の通則である。此の通則の確かなことは、一夫多妻の人類社會に能く見らるゝのある。斯うした社會の男子は、彼の家族を養ひ得る保證がなければならぬ。その離婚後もその義務を繼續し、剩へその後嗣者にまでその義務を繼續させる。例へば彼が死後に、彼の寡婦をして彼の兄弟に結婚せしむるが如きはそれである。元來夫の家族に對する義務は、彼等が高等猿類に類似せし時代より遺傳されたものである。鳥類や高等猿類に於け

る夫婦の情愛 (Conjugal fidelity) は、性慾生活より永いのである。故に斯うした結婚生活は、系統發生的遠因を有して、人類の結婚に進化せるものといはるゝのである。此の意味に於て、(六)の定義を肯定すれば、寧ろ鳥類及び高等猿類の結婚の方が、一般人類の結婚よりも眞に近いものとなるのである。

扱て以上の如き起原を有して、進化の徑路をとれる結婚が、即ち人類社會の結婚であるとするれば、現代文化人の結婚なるものが、果して如何に定義づけらるべきものであらうか。それに就ては、先づ前述の定義を一々批判して然る後に最も妥當と思はるゝ定義を試みようと思ふのである。

(一)に擧げた小説家の定義即ち結婚を全く『人類求愛の最極』と見ることは、結婚の内容全體を性交できめつけた、即ち人間を豚犬視した感がある。此の定義に従へば結婚を以て全く感情的のものと見るが故に、性交の後には、やがて結婚生活に龜裂を生じ、そこに三角愛も或はそれ以上の多角性をも具體化して、結婚の眞意義は勿論兩性の存在さへ、その意味を失ふやうになるのである。

(二)はラスキンの定義である。彼は優越なる文學者にして、敬虔なる基督者である。それだけ結婚のいひあらはしかたに於て美化し純化せられたる觀がある。然し人間の高等動物であるといふことが、彼の定義に見出されないのである。人間は飽まで動物である故に、人間ばなれした彼の定義

はその妥當性を缺くやうに思はれるのである。

(三)は法律上より下した定義である。之は法律なるもの、本質上、その定義も全然形式的のもので、決して結婚の内容を包容するものではない。

(四)は基督教を基準とするが故に、精神的並に社會的方面は能く定義づけられてゐる。けれども是亦動物離れしてゐる感がある。

(五)は、最も普遍的ではあらうが、餘りに簡單過ぎると思ふ。即ち結婚とは『結婚式による一人の男子と一人の女子との結合』といふのである。簡單だけに缺陷がある。例へば肝心な配偶當事者の愛などを含まぬ定義である。

(六)は、斯道の一大權威者なるウエスターマークの定義である。然し、それは哺乳類動物の状態に妥當であらうが。人間殊に現代の文化人に適用するとしては餘りに動物的である。強ひて之を適用すれば、現代文化の弊に陥りつゝある低級社會の結婚がそれである。結婚は性的結合といふまではよいとして、結婚生活の持續期間を長短自由にし、その最短期を第一産兒までとする點などは、全く猿猴以下に人間を置くことになる。

然らば、現代文化人の結婚に、妥當なる定義は如何にといへば、自分は次の如き一案を提供する。

即ち

結婚とは、一人の男子と一人の女子とが、相愛し、又互に諒解し、公平なる結婚式によりて、生涯の協同生活を契約し、一新家庭の基礎を成立すべき、性的結合をいふ。

人類は、生物進化の最高位にあると共に、人類特に近代文化に於ける眞の結婚も、結婚としては進化の頂點に達したるものと見るべきであらう。

六、結婚制度の種類

結婚の制度に數種あり、人種社會に於ては文野の如何によりて差がある。又動物はその種類によりて異なるを見る。今その主要なるものを左に擧げて見る。

(一) 一夫一婦又は單婚制 (Monogamy) 此の制度に屬するものは、最多數の鳥類、多數の哺乳類、高等の猿類及び多くの人種である。而してその結婚生活に、一時的又は永久的のものがある。前述の如く鳥類及び高等猿類は、後者に屬す。人類の多くの種族もそれである。

例へば、現代の文化人は、一夫一婦である。野蠻人の中でも、印度洋のアンダマン島人 (Andamanese 第二十四圖)、印度セイロロン島のウヘッダ人 (Veddhas 第二十五圖)、アメリカ印度人のイロ

圖 四十二百 第



(Andamanese) 人 島 ンマダンア

す用採を度制婦一夫一に制婚結てしに人置るす住に島ンマダンア洋度印

クワナイ族 (Iroquoians 第二十六圖)、及びワイアンドット人 (Wyandottes) など、濠州土人の或部落は、一夫一婦制である。彼等は野蠻中の野蠻人種である。尙その外、臺灣の生蕃人や北海道のアイヌ人もさうである。又印度に於ける回々教人の九十五パーセントは一夫一婦で、波斯では九十八パーセントがそれである。

(二) 一夫多妻制 (Polygamy) 哺乳類の反芻類即ち、牛、羊、鹿の類及び鶏類は之に屬す。人類にては回々教人 (Islamites)、黒人種、アメリカ印度人種及びモルモン宗の人々 (Mormons) の外に、文明社會の或王公貴族と富豪と或未開人種間に行はるゝ制度である。

例へば、西部アフリカのコンゴ河と南緯四度

圖五十二百第



印度セロイン島のヴェッタ人 (Vettas)

斯の人種は最も野蠻なる一人種にして弓矢は彼等唯一の武器なり結婚制度は嚴格なる一夫一婦制なり

圖六十二百第



イロクワオイ族の酋長 (Iroquois Chief)

此の種族はアメリカ印度人の一種にして一夫一婦の結婚制を採用す

の間にあるロアンゴの (Loango) 黑人種の王は、七千人の妻を持ち、又南洋フィジー島 (Fiji)

Islander 第二百二十七圖) の酋長は、

二十乃至百人の妻を有して満足なかつたといふ。或野蠻人種中には酋長のみ一夫多妻の例がある。

メキシコや南米のペルー、並に日本及び支那に於ては、一人の法律上の正妻と數人の妾を有し、後者の子供は凡て前者の子として法律上認めらるゝのである。又猶太人は、中世紀まで法律上一夫多妻を認めてゐた。昔ソロマン王は、七百人の正妻と三百人の妾を有した。回々教の

圖七十二百第



南洋フィジー島の酋長は一夫多妻にして二十乃至百人の妻を有せり

猶太人は、今日に於ても一夫多妻である。その聖書コランには一人の男子が四人の正妻と外に己れ

の好むだけの妾を持つことを許してゐる。而して妻妾共に同權を附與されてゐるといふのである。又印度人と波斯人も多妻主義が行はれてゐる。

昔羅馬人は、一夫一婦を嚴守したといはるゝけれども、實際は妾を持てゐた。又基督教國である歐羅巴諸國にても、多妻が許されてゐたことがあつた。聖オーガスティン (St. Augustine) は、別に多妻を有するものを責めなう。宗教改革者ルーテル (Luther) も、ヘッセのフィリップに二人の妻を有することを許した。又ウエストファリア條約の後に、獨逸は人口増加の目的を以て、二人の妻を持つことを許可したことがある。

要するに一夫多妻は、現今いづこに於ても、王公貴族と、酋長と及び富者の特權の如く見える。モルモン宗の一夫多妻主義は、該宗教に於ける五個條より成る教義の一條項である。此の宗教は、米國を中心として、今や全世界の文化國間に傳道されつゝある。日本でも東京に教會を設けて、他の地方に傳道を試みてゐる。

(モルモン宗の起原) 昔アメリカ印度人に、モルモンと名づくる豫言者あり、彼の死後、西部紐育州のキュモラ (Cumorah) にて、文字を刻み込んだ金板を發見した。それが發見者なるジョセフ・スミスによりて譯されたのが、モルモンのブックと稱せられ、之を中心として該宗教が起つたのである。

(モルモン宗の組織者) 千八百三十年ジョセフ・スミス (Joseph Smith) によりて組織された。

(モルモン宗の教義五個條) (一) 基督教の聖書を使用すること、(二) モルモンのアックを使用すること、(三) 洗禮は全身を浸水すること、(四) 僧侶を通じて絶えず、神より啓示あることを信すること、(五) 一夫多妻

(モルモン宗と米國々家) 此の宗敎の一夫多妻主義は、米國の議會にて禁ぜられしにより、表面上、千八百九十年十月六日にその主義を放棄せり。元來斯うした主義は一般の人々より反對されしため、千八百四十七年に同國ユタ州に本山を据ゑ今日に及んだのである。

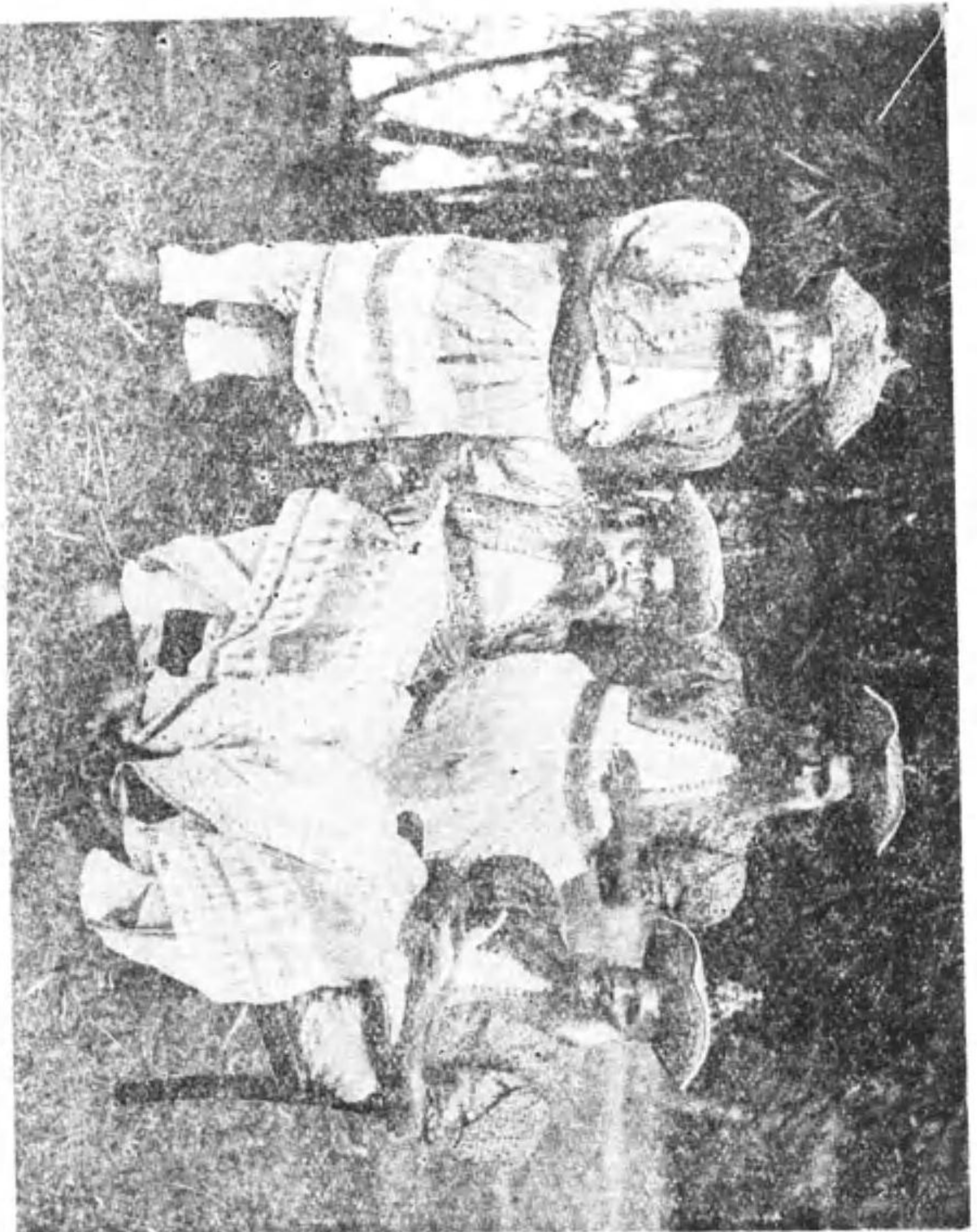
一夫多妻制度は、往古の社會人に正當と認められ、今尙多くの野蠻人間に行はれ、又文明人間にも存在することは前述の通りである。

(三) 一妻多夫制 (Polyandry) 此の制度は、主として蟻の社會に見るので、一雌蟻が數頭の雄蟻と交接するのである。之は人類には稀であるといはれてゐる。印度のセイロロン島のシンガリス人 (Singhalese or Cingalese 第百二十八圖) は、英國に征服されぬ以前は一妻多夫制で、七人の男子が一人の妻を有してゐた。西藏國にては習慣上此の制度を採用してゐる。

該制度に於ける多夫各自の、立脚地に就て見ると面白いのである。彼等は同等ではなくして甲乙の差がある。故に此の點は、正さしく妻妾の場合に等しい。従つてそこに一夫一婦の傾向を見るのである。

(四) 群婚 (Marriage in Groups) 之は奇妙なる結婚制度で、數人の男子が數人の女子と結婚する

圖八十二百第



印度セイロロン島のシンガリス人 (Singhalese)

セイロロン島の英國に征服されぬ以前は一妻多夫の結婚制度であつた

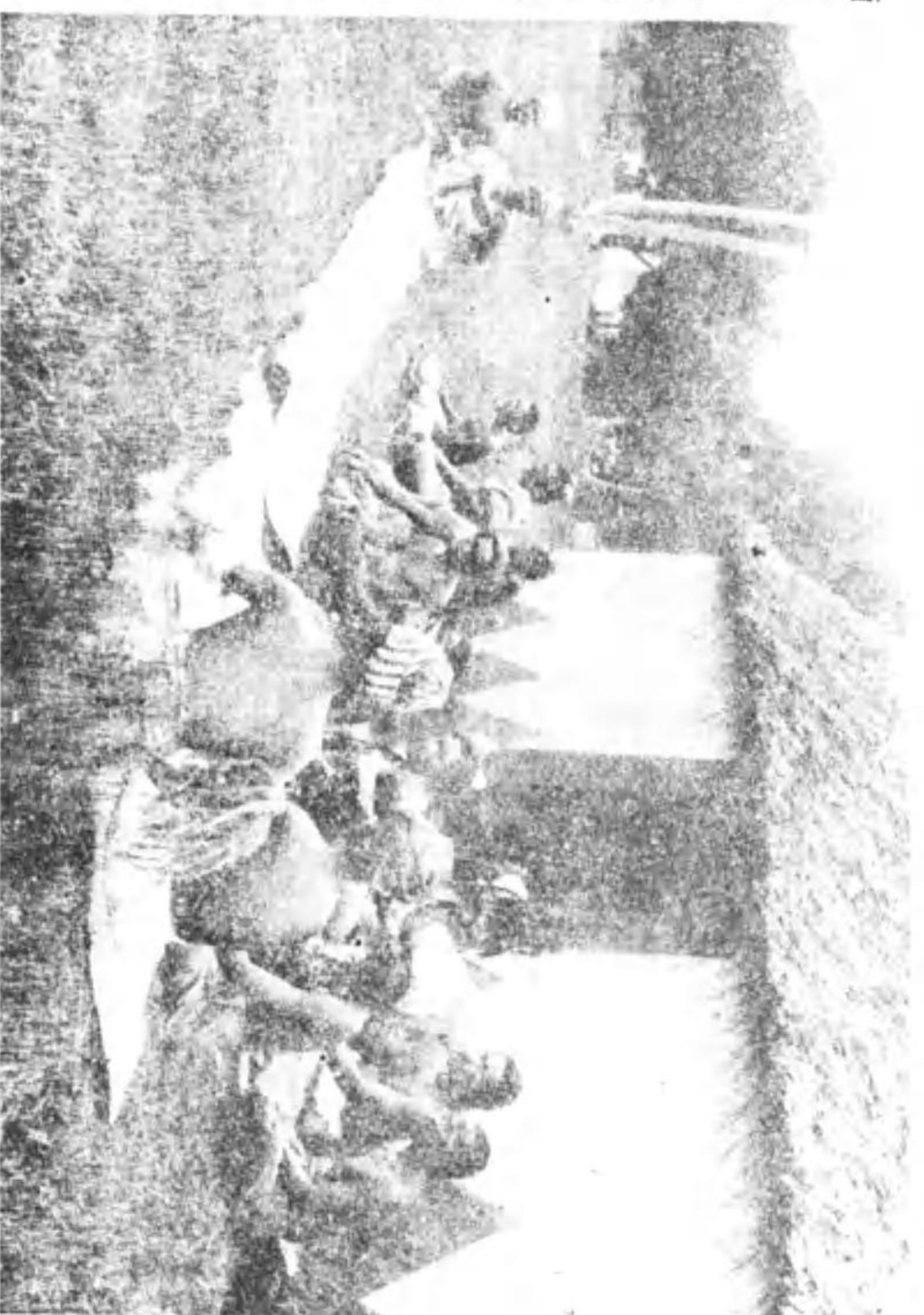
のである。その例は極めて稀ではあるが、南洋ポリネシヤ群島中のトンガ島人(Tongas 第二百二十九圖)にそれを見る。即ち兄弟は悉く長兄の妻の夫であり又此の妻の姉妹は同時に義兄弟の妻である。斯かる制度は、次に述べる男女混交又は亂婚の最も制限された状態のもこと見らるゝのである。

(五) 男女混交又は亂婚 (Promiscuity) 此の結婚制度は、凡ゆる男女と、凡ゆる女子との自由性交即ち結婚でありて、多数の動物殊に下等動物間に行はるゝものである。斯うした動物の場合に於ける雄の性的本能は、雌又はその子供に對して何らの注意を拂はない。例へば、産卵して後その卵に少しも注意せぬ。多数の昆蟲その他の無脊椎動物、並に多くの魚類に於て極めて自然なる現象である。けれども事實に於て最多数の動物にては、一頭の雌は或一頭の雄によりて、産兒又は産卵する故に眞の亂婚ではない。然るに人類の淫賣制度(Prostitution)は、全く完全なる男女混交即ち亂婚の制度である。

七、結婚制度の批判及び結論

一、現今の蠻人並に昔の原人間に「亂婚」ありしこの説に對する、フォーレル(A. Foral)の批判は次の如くである。

圖九十二百第



南洋のトンガ島人(Tongas)

南洋ポリネシヤ群島中のトンガ島に住する蠻人にし
て群婚の奇習を有す

最多数の社會學者は、ラボック (Lubbock)、『バローフン (Bachofen)』、『マクシムン (Mac-Lennan)』、『バステイアン (Bastian)』、『ヂロー・テエロン (Giraud-Toulon)』、『ウキルケンス (Wilkins)』及びその他の人々と共に、原始人間に亂婚の存在せしことを信ずる。けれども、若し吾々がウエスターマーク (Westermarck) と共に、結婚なるものは一夫多妻、一妻多夫、及び限定結婚を含むとすれば、彼等の説は誤謬である。彼等の亂婚と稱するものは、以上の結婚制度の一に含まるゝもので、彼の西印度諸島に於けるハイタイ (Hayti) 土人の如き、最も淫亂なるものをもその中に入るゝのである。斯の問題を最も混亂させた學者は、フィンソン (Fison) である。それは彼が濠洲土人に就て獨斷説を唱へたゝめである。同人種に斯うした結婚制度の存在せぬことを認めねばならぬ場合に於て、彼は以前にその制度の存在せしことを支持するのである。カー (Carr) は、フィンソンよりも濠洲土人を知る人でありて、彼は該土人が一夫一婦を常とすることを證明したのである。

同様なる説が、バステイアンや、ウキルケンスその他の人々により、南米のテラデルフェーゴの土人クスチン (Kuschins) に就て唱へられしも、是れ亦誤説である。アフリカのいづれの部落に於ても婦人の共有などはないのみならず、却て男子の方が著しく嫉妬深いのである。亂婚

は野蠻人や原始人間には見出されない。却て既に文化に浴したる人種に存在するのである。例へばブティア佛教徒 (Buddhist Buntias) の如き、その男子は名譽も嫉妬も知らないのである。それに反して最も下等なる一人種の、蠻人ヴェッダ人は前述の如く一夫一婦制で、彼等の諺の一つに、『離婚し得るものは唯死のみである』というてゐる。

事實に於て、眞の亂婚制度と稱すべきものゝ存在は、既述の如く近世の文化人間に之を見る。彼等は、彼等自身の淫慾を満足させるために、蠻人間に斯うした制度を紹介した。けれども之に反して、多くは蠻人種間に頗る嚴格なる一夫一婦制がありて、姦淫の誘惑者及び私生兒は勿論、その母までも悉く死刑に處するのである。又一方に於て、結婚の前後に極めて自由に性交を許す蠻人種もある。故に斯の種の問題に就て、蠻人間に一定の法則を見出すことの困難を見るも、次の一事は普遍的の事實である。即ち野蠻人種間に於ける性的墮落の最多数の場合は、彼等の間に移住し來る文化人の悪感化に由來するのである。之等の文化人は、組織的に、不道德と放蕩とを彼等蠻人間に輸入するのである。移住の白人は、蠻人の婦人を私用して淫賣の最悪型に仕立て上げるのである。彼等白人は、殖民地に酒類を輸入して、蠻人の最良なる道徳性を破壊させて滅亡に終らしむるのである。

或アラビヤの氏族には、金儲けの目的で娘を歐洲の私窩セックヤセに送りて淫賣の修業をさせ、相應に成功したときに歸國させて郷人に嫁がせるといふが、斯うした習慣は他人種間にも見らるゝ。此の亂婚制に就てウェスターマークの指摘する點は、文化が進む程私生兒の數が多くなり、益々淫賣制が擴充するゝといふのである。亂婚を以て、原始的結婚制の如く認むる愚説の發現は、文化社會の腐敗せる一產物である。殊に半開の文化國に於て著しいのである。原始時代の習慣は一般に純潔であつた。之を墮落させたのは文化人である。歐洲に於ては、淫賣は増加しつつあり、結婚は減少しつつある。

ウェスターマークは、上述の或蠻人部落に行はるゝ、結婚前後に於ける性交の自由なる事實の存在を認容するも、斯うした習慣の中にも、注意深き選擇が比較的永久結婚に動機を與へるのである。彼は印度のタンタ人 (Tanghtas) が、結婚前に性交實習の習慣あることを例にとつてゐるけれども、その實習が事實に於て殆ど結婚と化するものであり、又此の人種は淫賣を破廉耻と思つてゐるのである。

吾々は、ウェスターマークに對して一つの反對意見を有する。それは亂婚は必ずしも淫賣を要しないといふことである。何故ならば、淫賣は肉體のの賣買であるが、亂婚にはその意味はないからである。一體或人々が原始時代に於ける亂婚の存在を肯定せんとするに對し、吾人をして之を否定せしむる根本的理由として次の事實がある。即ち男女の兩性が自由であれば、そこには直に女性の一夫一婦本能と兩性の嫉妬性とが結合して結婚を再立するといふことである。そこで眞の亂婚は、一種の法律上の強制によりてのみ存在し得るのである。例へば、ニューヨーク洲のオネーダ (Onidas) の殖民地に於けるやうに、此の殖民地にては人々は形式上相互に自由性交を認容するのであるが如きそれである。

又ラボックは、ギリシヤ及び印度に於ける奇習なる陰莖崇拜 (Phallic) の例を擧げて、若かき女子が凡ての男子に従ふべき習慣のありしことを説くも、斯うした習慣は決して原始人間にはなかつたのであつて、全く高級なる文化人の色慾より由來せる結果であつた。是に於てラボックの原始人間に亂婚制の存在したといふ議論は、消滅に歸せざるを得ないのである。

或野蠻人種は、客に對して彼等の娘又は下婢、稀に妻を提供する習慣を有するといふも、それは凡ての客人に對してはではなくして、酋長とか、王又は僧侶に限つたことである。之は極めて野蠻なる習慣で、元來强者の專横に對する犠牲である。恰も、歐洲貴族が、彼等の農民又は農奴より要求せる特權に類似せるものであるが、然し斯うした惡習も、ラボックの支持するが

如き亂婚をば形成しないのである。

要之、人類に嘗て絶えたためしのない、男子に於ける嫉妬心の存在は、亂婚存在の不可能を肯定する唯一の確證である。前述の如く野蠻人の嫉妬心は、極めて猛烈なるもので、姦婦は姦夫と共に殺さるゝが常である。斯うした嫉妬心の生み出したものが、貞操 (Chastity) の義務である。故に原始人の社會に男女混交即ち亂婚制度の存在を證すべき影だにも認むることなく、その存在を主張する人々は、全く純粹なる假説を基準とするに過ぎないのである。若し假りに斯うした制度が存在せしならば、淫賣制と同様に人種間に、不妊と墮落とを結果したであらう。

以上は、亂婚制に對するフォーレルの批判並に彼の結論であるが、近代文化を誇る現代人の社會に於て、その程度と内容との差こそあれ呪ふべき斯制度は、東西の文化國に如何なる範圍まで擴充し、且擴充力を有しつゝあるかを論究するの要は充分にあるではなからうか。殊に斯制度を肯定し、亂婚を實現せんとする彼等の色慾的迷信は、その放埒なる野性を發揮することを以て、寧ろ原始の自然に歸る所以であると唱道するに至りては、實に言語道斷であり、又非科學的であり、且生物存在の根本的意義を無視するものである。

二、群婚の結婚制度は、或限られたる蠻人の寧ろ奇習とも稱すべく、制限された亂婚と見るべきものであつて、人類外の生物界には認められない制度である。此の制度が、結婚なるものゝ、生物學上の意義をなさぬことは前項の場合に等しい。

三、一妻多夫の結婚は、男子の數に比して女子の少ない社會に行はるゝ制度にして、既述の西藏、又はシンガリス人の外に、十五世紀頃のキャナリー島人の如きは、一婦三夫であつたが、此の制度は、少數の脆弱なる退化性の人種間に限らるゝものである。彼等の間には、嫉妬心は度外視されてゐる。而して之等の人種は、漸次その數を減じて滅亡に傾きつゝある。

四、一夫多妻の制度は、男尊女卑の古代人種間、並に斯うした習慣を傳承して今尙之を支持する、遲鈍にして嫉妬を知らぬ未開人種と、その他に文化國の貴族や、富豪人の社會に行はるゝ結婚の除外例である (ウェスターマーク)。後者の場合を單純に考察すれば、一夫一婦制を採用したる彼等が、貴族となり富豪となりし故を以て多妻に變化せし點は、寧ろ一夫一婦より一夫多妻に進化せしが如くも考へられるのである。又斯かる點は歴史上古代の印度人が一夫一婦より一夫多妻に變遷せし史實とも一致するものである。けれども、斯かる事實を更に深く考察するときに、換言すれば人類の由來せる生物學上の事實と、人類の發達並に道德上及び人類生存の意義より見るときに決して進化にあらずして、正さしく退化の制度である。即ちフォーレルも

いふやうに、此の制度は、人心の要求と子孫の繁榮とを裏切るもので、斯うした結婚の擴張する所には唯零落あるのみである。

五、一夫一婦の結婚制度に就て、フォーレルは次の如くいうてゐる。スペンサーは、嘗て斯うした制度の將來益々擴充さるべきことをいひ、ウェスターマークは文化の進むにつれて、人間の社會は更に互助的となり、又愛が精練されるに從て、一夫一婦が一層嚴重に行はるべしと論じてをる。

一夫一婦の存在するところには、互助の精神が一段と鮮かであり、婦人に對する尊敬が行はれ、家庭てふ美はしい情緒が表現される。例へば未開人や蠻人の中でも、中央アメリカのニカラグア人(Nicaragua)、南洋ボルネオ島のダイヤク人(Dyaks 第三百十圖) 印度ベンガル灣内のアンダマン(Andamanese)人の如き社會にては、主婦が非常に尊敬されて、政治上にも感化を及ぼしてをる。又印度のサンタル人(Santalese)及びムンダール(Mounda-kols)人の社會にては、主婦は家の持主である。

一夫一婦制は、最も廣く行はるゝ結婚制度にして、文化が進むに從つて凡ゆる事情が、此の制度を支持する傾向になつてをる。それは男女數の等しい故ではなくして、宗教上又は習慣に

よるものである。

元來婦人の先天的欲求は一夫一婦である、文化は絶えず婦人の權利を擴張しつつある。文化國人の同情心の精練されたる情緒は、漸次一夫多妻の精神に反抗してゐる。

八、結婚論

以上は主として結婚制度に對する、フォーレルの批判とその結論とである。自分も彼の説には共鳴する。けれども、現代の文化人に最も妥當なる結婚と、之が成立に關する條件とを茲に附言して見たい。而して結婚と戀愛との交渉に就て簡單に之を論じたい。

生物の結婚とは先づ性交を意味する。原始人

圖 十三百 第



(Dyaks) 人クヤイダムるさ敬尊の主
人敵が子女の族クヤイダ人蠻のクラサ島オネルボ洋産は圖
す示なるあゝつひ歌ち持な首の

や野蠻人の間では、そのみではなくして簡單なる道德を加味し、聊か社會的の制度もその意義の中にいたらうが、概して性的本能の表現が濃厚であつたやうである。而して未開人の社會に至ると、更に社會制度の方面より法律觀念が結婚の要件ともなり、文化國人殊に現代の文化人にありてはその内容として性的即ち生理的の外に道德的、法律的及び社會的の各方面と、心理的並に藝術的方面とを以てするに至つたのである。

故に現代文化人に最も妥當なる結婚の定義として既述の次項を提供し次でその結婚成立の三要件を説示する。

結婚とは、一人の男子と一人の女子とが、相愛し又互に諒解し、公正なる結婚式によりて、生涯の協同生活を誓約し一新家庭の基礎を成立すべき性的結合をいふ。而して此の結婚の成立するためには、第一に配偶當事者の相愛と諒解、第二に之を近親に計ること、第三に結婚の式を必要とすることである。

求婚者は幾人ありとするも、結婚の成立は、一人の男子と一人の女子、即ち一夫一婦である。一夫一婦は、生物學上結婚の眞意義を、最も能く表現してゐるのである。而してその夫婦となるべき男女は必ず相愛であるべきで片愛的であつてはならぬ。愛は精神的、人格的の異性愛が根本でなけ

ればならない。決して財産愛や名譽愛才能愛又は容貌愛が根本となりてはならない。何となれば、それ等の對象は、容易に變化し、その變化と共に結婚の根本義を失ふからである。例へば、財産や名譽或は位置を第一の對象とする結婚は、それ等の財産又は名譽位置の消失と共に、破綻を生ずるは當然の理であり、才能を主とする結婚は、才能のために却て離婚する場合が決して少くない。元來才能なるものは、善悪いづれにも現はるゝが故に、その才能のために家庭の悲哀それに續く破綻、斯うした事實の多きを見るのである。又容貌は多くの場合、異性愛殊に男子側よりして自然に愛の有力なる對象となるべきも、之を第一條件に考察して成立せる結婚は、亦悲境を免れない。何となれば容貌愛を中心とする結婚當事者は、結婚生活の過程に於て、若し他に更に美はしき容貌の所有者に接するの機會あれば、その方に誘惑さるべき素質を有するからである。例へば男子に見れば、斯の種の男子は、容易に所謂「遊び人」の内に入るではないか。

要之、夫婦愛の根本は、不變又は向上性の人格愛を主とし、それに前述の愛の對象となるべき條件が附隨するのは差支はない。若し相互の人格とその行爲が結婚後に於て調和性を缺く場合には、離婚を餘儀なくするか、又はそれまでに至らざるも、生涯の大部分を不愉快に送ることになる。斯うした悲しむべき場合は、決して眞の結婚に於て起るべきわけのものではない。若し之ありとすれ

ばそれは純真なる結婚でなく結婚成立の當初、單に愛殊に次項に述ぶる所謂戀愛に禍されて得た惡果に過ぎない。人は固より、神にあらざれば、短時日間の交際に於て互に萬事を相知り合ふことは難事である。殊に感情に全く支配さるゝ性質の異性愛に於て然りである。故に、吾が所謂諒解とは、相互情緒の一致と共に、理智的判斷による幾分の諒解である。尙又斯かる缺陷の豫防策の一つともなることは、結婚の第一過程を必ず近親又は親友に相談することである。相談された彼等の意見は、必ずしも求婚者のそれと一致しないかも知れない。或は却て反對の場合があるかも知れない。然しそこには必ず幾分か如上に關する缺陷を補ふ何ものかのあることは確實である。又その相愛互知の第一歩より近親に計るといふ第二歩は、社會人として必ずとらねばならぬ少くとも徳義上の義務であらう。別段他者に計らぬ結婚は、生物界に於ては自然である。けれども現代人としては決して眞の結婚法ではなくして、野合の姦淫である。それは生物よりも下等である。又結婚に公正なる舉式を缺くは如何に愛に成り近親に計るといへども、自己の社會人たる權利を放棄し、且つ社會を無視せる自己中心の謬見に外ならぬ。我が國に行はるゝ所謂「内縁の妻」なるものは、その意味に於て一種の姦淫制度である。法律が之を結婚と認めないことは當然の理である。

公正なる結婚式とは、媒介者を立て、神前に誓約する儀式に限らぬ。此の點に於ける興味深き好例が二つある。その一は一友人の結婚である。それは先づ野外に天幕を張り、豫てより尊敬せる教師及び友人の幾人かを招待して、簡單なる式を舉げ、その當夜新郎新婦が、所屬教會の講壇に立ち、結婚に關する一場の演説を、試みたといふことである。又他の一例とは、自分も招待され參加した結婚の披露式であつた。それは某都市第一のホテルに、約三百の人々を招待し、『式場費をつくした裝飾に』、音樂のバンドを置き、最も盛大なる披露の式を舉げ、山海の珍味を以て饗應せし上に、寶石入金銀製の帶止又は時計など、貴重品のプレゼントあり、驚くべしその費用十萬圓といふ噂であつた。之を前者に比すれば實によいコントラストであるが、それはいづれの儀式なりとも構はない。要は社會に向つて公正に舉式するにあるのである。

次に、配偶當事者間の愛の神聖であり、その結果する結婚の神聖であるべきことは勿論であるが、従つて久しく人類の誤解に陥りつゝある夫妻間の性交も亦神聖でなければならぬ。此の意味に於て結婚は性的結合である。その結合が自然に家庭の基礎となるのである。米國や佛蘭西その他の或社會人などには、結婚がありても家庭がないやうな場合もある。それ等は文化の變態現象であつて眞の結婚ではない。斯の種の結婚生活には、結婚に必然する子女の生まるゝことを、人爲的に避けるのがその特徴である。自然なる家庭に子女なきは、家庭成立の一大要因を缺くの不幸である。

結婚の一大意義を失ふのである。然らば斯うした場合は、離婚の理由となるかといへば、必ずしもさうではない。何故なれば、それ等の缺陷は、大抵の場合結婚當事者の方に、生理的の缺陷がその因をなすのである。斯の種の缺陷は全く病理に屬し、今日の醫術はその治療を容易になし得るのである。若しその手術の範圍外なりとすれば、斯うした人々は結婚の一大資格を缺くのである。

要之、現代人の結婚は、一夫一婦制度たるべくして、その成立たるや相愛互知を第一義とし、次に之を近親に計り結婚の式を擧げて、以てそこに始めて結婚生活のスタートが開始さるべきものであるといふのである。而して此の成立の三階段は、決して之を省略又は轉換することは出来ない必然性のものである。若し之を省略或は轉換すれば結婚の意義を失ふことになる。實にそれ等は精神的であり、道德的であり、社會的であり、又生物學的である。

單純なる性的情緒が本能的に戀愛となり、之に理性が加味せられて相愛互知の對象となり、如上の徑路を取り條件を充す點に於て、そこに自由なる眞の結婚を見るのである。換言すれば、結婚に際して當事者兩家の諾否、又は配偶者の意志よりも、盛大なる擧式、或は社會や家庭を無視する野合戀愛等を主要條件とするにあらずして、既述せる第一條件を第一に考察して成立する場合を眞の自由結婚と稱するのである。即ち先づ配偶者たる兩人の感情と意志とを第一に置いて、然る後に兩

親或は近親に相談し次で形式に移るのであつて、所謂本人の意志を尊重して之を本位とするにあるのである。故に若し、兩人の愛の内容が神聖なるものならば、彼等の兩親又は近親は、徒らに揣摩してその諾否の決定權を弄するよりは、寧ろその遂行を輔成すべきものである。

斯うした結婚こそ、眞に苦樂を共にする生涯的協同持續性の一夫一婦制といふべきであらう。斯うした愛は、聽て進化して結婚後の夫婦愛となり、家族愛となり、更に分化して社會愛、人類愛と向上發展するのである。尙之に關する説は、次項の戀愛との交渉の下に述べることにする。

九、戀愛論

戀愛とは、人間の生涯ライフヒストリーに於て、殆ど凡てが必ず當面すべき、一種不可思議に見ゆる異性心理の一大現象である。斯くも普遍的なる一大現象なるにも拘らず、その實質や内容或はその起因は如何なるものであるか。それ等の解釋や定義に關し、極めて多方面より賦彩されてゐる。殊にそれは、哲學者藝術家によりて然るのであつて、科學者の側に於ては至極單純化されてゐるやうである。

英語の Love は通常戀愛をも意味するであらうが、所謂現代人は、戀愛を意味するに單に Love を以てしては満足出来ないであらう。而して自分も亦此の Love なる文字が、そこに極限されること

は甚だ當を得ないと思ふのである。何せなれば此の文字は、『神は愛なり』の愛に常用されてゐることを知るが故である。斯うした意味の愛は、過現未にわたる人類の凡ゆる道徳を包容し、且つそれを聖化してゐるからである。神と共に純にして無限大の内容を有するからである。然らば吾々は更に之に形容詞を附して、Personal love 又は如何か、否それでも現代人は決して之を妥當と考へないであらう。彼等の今日唱へつゝある戀愛の多くは單なるラブではなくして、之に附するに更に強い形容詞を必要するではなからうか。即ち Erotic love 又は、^{エロティック} Erotic love 又は、^{パッション} Passion love とか、兎に角、そのいひあらはしの上に情熱的形容詞が添はなければ、その實質が充された言葉にはならないやうである。勿論戀愛なるものは、假令最初の出方はおとなしくあつても、容易にその加速度の強くなり得る可能性を十二分に有するものである。戀愛が文學者によりて、如何に美はしく賦彩され、神聖視され、且至上視されても、それは異性愛に於ける最大限の第一過程に過ぎないのである。若しその戀愛が夭折しなければ更に第二、第三の過程を辿つて進展すべきものである。今次に、或る哲學者及び藝術家、或は文藝批判者といはるゝ人々の戀愛觀の一斑を述べ、然る後に科學者の立場よりして多少の附言を試みたいと思ふ。

先づ第一に興味のあることは、戀愛なるものゝ存在する理由に就てのプラトーン説である。彼の有名な『對話録』中の『饗宴篇』に於けるソクラテイスの弟子アリストファネスの話に於て、人間の祖先に、男性女性並に男女兼性の三種あり。各種共に、四本づゝの手足と、兩面づゝの顔とを有してゐた。處が之等の祖先が神々に對して惡戯を行つた結果、神々の怒に觸れ、之が處罰の結果として、各自二つに縦斷されたのである。そこで彼等人間は、何卒今一度元の形になりたいたどの熱望の絶えざるため、第一者は男色の形式をとり、第二者は女子の同性愛となり、而して第三者が異性愛即ち男女戀愛の態度を固執して、各自に元の完全なる一體にならんと努力するのである。

この意味にいうてゐるさうで、之は誠に面白い話である。然し科學の立場から之を見れば、勿論一場のお伽噺として笑殺に附するであらう。けれどもその思想に多少生物學から見て採るべきものがあると思ふ。それは人類ではなくして、生物界に於ける雌雄の起原に對照してのことである。此の起原に關しては、既に第五章に詳述したところである。抑々生物の起つた當初は、雌雄兼性といふよりも寧ろ雌雄のいづれとも分化せざる無性の生物といふべきものである。誠に現存の生物からその例をとつて見ると、アメーバやバクテリアの如きがそれである。その無性生物が進化の過程に於て雌雄の兩性に分化したものと見らるゝが故に、今や進化の頂點にある人類の異性が、元の無性祖

先の一體に歸らんとする本能のために、茲に戀愛てふ異性愛が存在する所以なりと考察することは必ずしも不合理でないかも知れない。而して男女の同性愛 (Homosexual love) は、寧ろ此の異性愛の變態と見らるべきものであらう。兎に角二千數百年前に於けるギリシヤ哲學者の智慧は今更改めていふまでもない。深遠實に驚くべきものがある。

近代人の戀愛の解釋又は定義

第二は、戀愛に對する解釋、又は定義に關する諸説である。今それ等の要點を左に列擧する。先づ全體を靜的及び動的解釋の二つに區分する。靜的とは、戀愛そのもの、概念或は局限された解釋を意味し、その中に藝術味の濃厚なるもの、道德を加味するもの、又は生理學や生物學の科學的解釋を包容するものである。動的とは、戀愛進展の全般に亘る進化的解釋であるが、之は進化といふにしても、範圍が近代人であり、戀愛そのものが藝術化せるものと見らるゝ故に、専ら藝術方面よりの解釋である。

(一) 靜的解釋

イ、藝術味の濃厚なるもの

一、戀愛は愛の根源なり。

二、眞の戀愛は深化し内在する。

三、戀愛とは、或異性美によりて開發せられ、賦彩せられたる愛なり。

四、現前せる美が異性美であるとき、そこに感せる愛が即ち戀愛である。

五、凡ての美は、戀愛の要求によりて造られたるものなり。(オット・ワイニンゲル氏)

六、戀愛は、肉的昂潮の刺戟に對する應現なり。美は要するにその刺戟の複成に過ぎず。

(ハヴェロック・エリス氏)

七、美感と戀愛とは本質を異にす。(ワエスターマー)

ロ、道德を加味せるもの

一、戀愛は、自己犠牲の半面に自我の要求あり。

二、性的衝動は、一夫多妻的で、戀愛は一夫一婦である。愛は男子にとりては生活の一部なれど女子にとりては總てあると詩人が云つた。(エルド氏)

三、戀愛の完成は、人格の完成、自己の充實で、その制度として現はれたるものは結婚である。

ハ、生理學又は生物學的の解釋

- 一、戀愛は、友情と性交慾との化合せるものなり。(カイン夫人)
- 二、戀愛は、肉的昂潮の刺戟に對する應現なり。(ハッセルロック・エリス氏)
- 三、戀愛は、如何に空虚に彩られてもその根柢は性的本能にある。……男女の性交慾即ち性慾に外ならぬ。……男女は、各自分の幸福のために戀してゐるけれどもその實は、種族の詐謀に欺かれてゐるのである。種族が自己の生命を永續發展せしむるために、個人の爲我心を利用して忘想を附與したのである。此の忘想とは即ち性慾本能である。戀愛は畢竟するに宇宙の根本たる生きんとする意志の客觀化である。種族が自らの永續性を實現せんとする試みであるに外ならぬ。(シヨペンハッセル)

ニ、宗教味の解釋

- 一、靈が肉を救ひ、肉が靈を救ふのが眞の戀愛である。(メイ・シンクレア夫人)

(二) 動的解釋

現代は、凡ゆる物象事象を、動的に解釋せざんば止まざる傾向が著しい。戀愛の現象もその雰圍氣にとり入れられてゐるやうに見える。中桐氏の現代戀愛觀の分類を見るに先づ次の如くである。

イ、性慾醇化説

- 一、戀愛は、組織せられて働らく性慾に外ならぬ。戀愛は、生殖衝動として性慾の理性化せられたるものに外ならぬ。(田中王堂氏)
- 二、戀愛は、性慾から分化したるもの、……造化が生命に附與したる根本的要求である性慾は、漸次その可能性を分化發展して、肉體的より精神的に進み行くものであつて、その最高のものは天的戀愛である(倉田百三氏)。中桐氏は此の説を稱して、理想化の説となす。
- 三、生きることそれ自身が人銘々の藝術である。そして戀愛は、人間が全我的に全人格的に、最も力強く最も美しく生きることである。戀愛に於て靈は白光に輝き、心は白熱に燃える。それは生命の光であり生命の熱である。……人間が、まだ感覺や理性や、功利思想などで動いてゐる間は、眞劍に本當に生きてゐるのではない。それが感情の激動昂揚といふ所まで來なければ、生命力の全的燃焼には到らないのだと信じてゐる。(厨川辰夫氏)

ロ、靈肉一致説

- 一、戀愛は、結婚に於て自由でなければならぬと同時に、その種族改善のためには責任をもたねばならぬ。即ち自由と責任とがあるによりて、戀愛は人格的となり、人間進化の大原動

力となるのである。(カレン・カイン夫人)

二、肉交慾と生殖慾とは全く別な意識である。それを合せて一つの本能とするは一つの空想的哲學であつて、精神的實在ではない。此の如き空想説の生ずる所以は、畢竟するに一般の感情が、性交を以て卑陋とするに拘らず、なほ戀愛に於ては實際上最も欲望せらるゝものであり、然かも之を承認するの勇氣を缺くが故に、社會的立脚地から之を是認せんと試みたるに過ぎぬのである。

純眞の人格的戀愛の頂點は、非生殖の實際的證明ともいふべき情死(Love-death)に至つて極まる(エミル・ルッカ)……情死之實に自他一體の究竟なる悟悦境である。(厨川氏)

ハ、創造擴張説

一、人生の目的は創造にあり。……愛の衝動は根源的に創造であつた。横に自己を延ばす努力が戀愛で、縦に自己を擴げる努力が母愛だ。……或意味の愛は、母愛に於て純眞にして完全だけれども、他の意味に於ては愛の代表的場合は性愛だ。性愛は愛の第一歩で母愛は第二歩だ、……他の一人を愛することは、自己のハートが自己及びその一人を共通して動悸を打つことだ。自己のハートのそれだけの擴張だ。(杉森孝次郎氏)

二、愛は奪ふ本能、吸引するエネルギーである。……私が小鳥を愛すれば愛するほど、小鳥はより多く私そのものである。私にとつては、小鳥はもう私以外の存在ではない。小鳥は私だ。……愛は掠奪する烈しい力だ。……惜しみなく奪はれても毫も失はれぬ。(有島武郎氏)

戀愛の解釋に對する批判

以上戀愛に對する東西の文學者、文藝批判者並に心理學者、哲學者の解釋を通觀するに、大體に於て、東洋の人々は主觀が強く、西洋の人々は客觀を離れないやうに見える。主觀者は藝術に邁進して科學の客觀を超越するといふよりも、物質的實在を輕視又は無視せんとする傾向がある。それで若しも戀愛が、人生の實生活を離れて或瞬間にのみ實現する重要な現象なりとすれば、恰も羽翼なき吾等が、或短時間跳躍して空中生活を試みるに等しいものであらう。斯うした意味が眞の戀愛の意味だとすれば、掠奪説なり、共通動悸論なり、情死悟悦境の靈肉一致説などの動的戀愛説は、そのまゝ體驗と實感の事實であり、從て戀愛の眞髓であり眞理であらう。けれども、事實(Facts)は必ずしも眞理(Truth)ではない。此の事に就ては後に述べようが、今假に一步を讓つてそれ等の説が眞理といはれるにしても、それは獨藝術界のそれか、或は藝術界一部の眞理でありて、吾々全

部を悉く包容する人生界の眞理ではあるまい。藝術界の眞理は藝術方面よりのみ見ての「美」であらうが、人生界の眞理とは、人生の理想界即ち藝術をも含め、その外哲學、科學、道德及び宗教の各方面より考察して、全く眞善美に見ゆるどころの廣汎普遍的の眞理である。

藝術界の一權威者厨川白村氏は、その著『近代の戀愛觀』中に、

……生命の完全燃焼を體驗し得たるものにして、はじめて死線を突破し得るのだ。さかしらなる俗物は之を目して戀愛は盲目なりと云ふ。どちらが盲目だか。

戀は死よりも強い、それは善いか悪いかは今わたくしの云はんと欲する所ではない。唯それが人生の或嚴肅悲痛な事實であつて、詩的誇張でも何でも無い事を指摘すれば足る。

……わたくしは、單に榮養としてのみの食物は斥ける。……食物は人生に於て榮養の外に享樂、翫味、鑑賞といふ重大意義を有つてゐる。……普通の人間ならば、毫も榮養にならない様な、否有害な不消化物にさへ舌鼓を打つのが當然だ。……愛の生活に就ても亦同じ事が考へられるのを正しと信じてゐる……

と書いてあるが、戀愛の進化に倫理を伴うて、靈肉の一致を高調する厨川氏の説としては、聊か矛盾の感がある。食物の根本義は、いふまでもなく生物界を通じて榮養にあるのだが、人間社會に至

りて更にその賞味てふ重大意義を有するに至つた。けれども有害な不消化物にも、舌鼓を打つといふ利那的氣分と、食物の根本義との矛盾顛倒を見るに至りては、モハヤ食物論から逸するではあるまいか。人類の戀愛は生物界の異性愛でありて、種族の維持を結果すべきものが、戀愛の白熱化と稱して、情死てふ狂進自殺に狂進脱線することゝなれば、是れ亦兩性存在の根本義を破壊することになる。又今日の人間悉く俗物界を超越して、白熱戀愛の眞人界に入るとせば、そこに種族は斷絶して人類は直に滅亡するのみであり、生物學は單に拱手してそれ等瓦斯製の人類界を傍觀するの光榮に餘儀なく接することであらう。換言すれば吾々人間はいかに理想或は天上生活を憧憬しても、生きてゐる間は此の地上生活を離るゝことは出来ない。生物學は、何所までも肉體と精神との二つの並行實在を肯定するのである。

故に戀愛の靜的解釋方面に對しても、生物學は、若し戀愛に美があるとすれば、その形體美と精神美とを認める。靈肉の一致を合理と見るも靈と肉との二元を一元化はしない。戀愛はいかに聖化しても、道德の根柢に矛盾する戀愛は之を否定する。又生物學は、戀愛の全我的犠牲を高調する裏面に、個我的要求の濃厚なる事實あることを能く諒解する。性的衝動は複數であるといふとも、それは單數なる戀愛の對者を求むるための漠然たる複數であることを唱へる。又戀愛の完成と人格の

完成との共存、戀愛は異性美によりて開發され賦彩さるゝこと、及び戀愛は肉體昂潮の刺戟に對する應現であるといふことも、生物學的に肯定が出来る。然るに、オット・ワイニンゲルの、凡ゆる美は戀愛の要求に造られたものとか、又は戀愛は愛（凡ゆる？）の根本であるといふやうなことはどうであらうか。それ等の説としての存在は必ずしも否定出来ないが、事實としての證明は見出しかねるやうに思はれる。例へば純真なる母性愛や、愛國の精神とか、學者の研究對象に於ける眞理愛乃至は生活に餘裕ある人々の骨董愛などは、成る程文字の上では抽象的なる「愛」の傘下に統一さるゝやうに見えるかも知れぬが、之等の愛の實質に果して異性的の内容があるであらうか甚だ疑はしい。之等と所謂戀愛とは、全くその所屬範疇を異にするものではあるまいかと思ふ。

宗教上、神に對する愛でもさうであらう。成る程キリストは、「はなよめ」「はなむこ」の關係を引いて、神人關係のそれを説かれたけれどもそれは一段深い意味があるのではないだらうか。神と人との愛否、人の神に對する愛の濃度が、新郎新婦のその如くあれといふ意味で、決して神又はキリストと信者との關係が、夫婦的異性關係と同一であるとは如何にしても考へ得られない。且つ又過去數十年に於ける自分の體驗中に、斯うした事實は寸毫も認められない。同様に、眞の師弟關係でもさうであると思ふ。中世紀の尼僧がキリストに熾烈な戀愛を拂つたとか、或は師弟の間に戀

愛が成立して夫婦になつたとかいふ史實はあれど、それ等の史實は、何も戀愛と以上二種の愛とが同じ範疇に屬する證明とはなつてゐないと思ふ。何となれば、その神人愛や師弟愛の對象者である尼僧や男女の師弟が、彼等の宗教愛又は道德愛てふ同じ一つの範疇に屬する愛の代りに、それとは全く範疇を異にして、生物本能の性慾を基調とする異性愛の情熱化する戀愛をば、勝手に置き換へ又は混合したのであると思ふ。吾等は心から師を慕ふとき、又は眞劍に神を信仰する際に、毫末も異性愛のエレメンツを内容にした體驗のないことによりても明かであると思ふ。故に戀愛が凡ゆる愛の根本であり、凡ゆる愛が戀愛の要求によりて造られたとは、今のところ如何にしても信することは出来ないのである。又厨川氏の戀愛白熱説と共に、感情の激動昂揚てふことのそれは肯定すべきものであるにしても、それ等が生命の光であり、生命力の完全燃焼であるといふに至ては、何うしても首肯することが出来ないのである。それは前述の對情死に於ける論評と同じことである。何となれば、生命といふ實質内容の凡ては、決して白熱化する光熱ではない。又生命力が感情昂揚の戀愛力のみに限られないことは自明の理で、同氏の意味する生命や生命力は、哲學や科學又は道德宗教を度外視せる藝術萬能の成金語といった方が、俗物にも眞人にも能く解かるやうである。

要するに藝術萬能の戀愛は、果して戀愛そのものゝ本質を捕捉する永遠性の眞理であるか。それ

は大に疑はしいのである。然らば戀愛に對する生理學又は生物學上の解釋は果して如何なるものであらうか。

エレン・カイの、「戀愛は友情と性交慾との化合せるものなり」といへる意味は、確にさうでもあらう。然しそれは單に戀愛の形成される一部の解釋で、勿論戀愛の全部ではない。エリスの「戀愛は肉の昂潮の刺戟に對する應現なり」といへるは、是れ亦戀愛の、生理的より心理的に轉化し發現せる部分のみの説明である。シヨペンハウエルの戀愛觀は、警拔で確に事實の半面を捕捉してゐるが、その深刻に過ぎる點に於て事實に遠かつてゐると思ふ。即ち彼は「戀愛は如何に空虚に彩られてもその根柢は性的本能」である。……性慾に外ならぬ」といふ點は、戀愛を理想化し過ぎる藝術家、又聖化し過ぎる宗教思想に對して、生物學的根柢を明示した點であらう。それは疑ふ餘地はあるまい。然るに彼は、「男女は各自分の幸福のために戀してゐるけれども、その實は種族の詐謀に欺かれてゐるのである。種族が自己の生命を永續發展せしむるために、個我心を利用して妄想を附與したのである。此の妄想とは即ち性慾本能である。……」といつてゐる。男女は彼等各自の幸福のために、戀愛の状態にあるとまでは宜しからう。然し種族の詐謀云々に至ては、嘗て所謂意志なるものを持たない種族が、人間を欺くなどは考へられない。況んや種族が自己の生命持續のために個人

の爲我心を利用するなどは、思ひもよらぬ形容である。それ等を彼の意志哲學の產物とするも、自然界に於ける事實とは認め難い。生物學の見るところは、全く自然科学的である。先づその根柢を成すところの本能は、何者の支配を受くるや否やは今暫く措いて問はず兎に角性慾が本能として現はれ、具體的の異性關係となり、その結果が無意識的に種族の永續を見るのである。而して斯うした系統的習性を繼承せる人類が、漸くそれを意識するやうになつたもの、その最初に於ては全く無意識的の事實であつたことは、凡ゆる生物界に認めらるゝ普遍の現象である。然らば戀愛とは、如何なる意義を有するものであらうかといふのである。

廣義の生物學を背景とする、自分の思想としては、人間の戀愛に先づ第一次及び第二次の二種あることを信ずる。即ち第一次の戀愛とは、未婚の男女間に於て、身體並に精神美なる性的衝動に開始される純潔にして美はしい異性愛である。而してその最初は全く情緒に支配さるゝも、漸次理智も加はり理想も出でて、相愛互知の念を深め、漸次その過程を辿りて結婚に進むべき光明的のものとなるのである。第二次の戀愛とは、全然情緒より始まりて情熱に急變し、性慾的に猛進する癡癡性の異性愛である。それは露骨に表現せらるゝことあらんも、その本質は決して光明的のものではなくして暗影的のものである。而して斯うした種類の戀愛の特徴としてその對象となるべき男女は、未婚

と既婚を問ふの暇なき程、盲目的癡癡性を發揮する。そこには理智の入るべき餘地はなくなる。若しありとするも情熱の方が、壓倒的實力を逞くして以て理智を驅逐し、再びその雰圍氣に入ること厳禁する。否寧ろ理智の入るべからざるを原則とし、若し如何なる理智にても之に加はらんか戀愛は最早戀愛にあらずといはるゝ程の純情熱的のものである。故に斯の種の戀愛は、三角にも四角にもなり得る蓋然性を有し、既存家庭の破壊などは問ふところではない。無論結婚式の如きは眼中に無く、理性はそこに完全に無勢力である。而して斯の種の結婚とは全く性交を意味し、所謂家庭の成立は寧ろ邪魔物として忌避され、専ら享樂を旨とし、遠慮なく本能を發揮し、社會とは彼等二人のみの人事關係の別名であるかの如く思惟し、且つ國家の如きは其の腦中になきが如く、法律制裁は人間勝手の規約と怒罵せられ、道徳は自由を拘束する不文律と無視される。更にその奇々妙々に見ゆる點は、結婚生活持續(Duration)の變轉である。簡言すれば彼等の結婚持續期の長さは、その情熱の持續期の長さに等しいのである。故に斯の種の戀愛と結婚とは、一見創造的進化の面影があるやうであるが、側面から之を觀れば、美はしい情緒と貴い理性との所有者とまで進化發展せる人間その者を辭職せんと欲する、純粹なる利己的性慾主義(Egoistic eroticism)の權化である。斯うした第二次戀愛觀を以て、上述せる第一次戀愛觀を見る時、今は昔、地質時代に化石せる道學先

生の囁語なりとして之を笑殺する程に、彼等は極端なる變態的特化(Specialiation)をしてゐるのである。斯かる意味に於て、彼等は戀愛の絕對自由(?)と至上主義(?)を高調するやうである。然しその實際は斯うした壓倒的美名の概念の裏に、偏狹にして狂態性を有する自己性慾の奴隷となりてゐるのではなからうか。彼等は確に性慾思想の成金とでも、讚仰さるべき對象者であるまいか。

兎も角如上の戀愛は、人類界は更にも言はず、生物界に於ける雌雄存在の意義を無視し、兩性發現の由來と全然没交渉なる實在現象である。故に斯うした戀愛とその宣傳とは、漸次人類を零落せしめて、遂には此の地球上に人類存在の不可能を期待せしむるものと思はるのである。故に自分は斯うした第二次の戀戀を目して、不合理で非科學で、惡徳性であり、無宗教的なるのみならず、眞の藝術に對する反逆として、之を第一次眞正の戀愛と明別し排斥せんとするのである。

戀愛の進化

兩性關係は、單なる性慾より更に進轉し、昇華^{サブライム}して至高の道徳となり、信念となり、藝術となつたと論ずる人(厨川^氏)がある。それは戀愛至上主義、藝術萬能者の唱ふところであらう。蓋し戀愛そのものが、個人に於ても又歴史的にも變轉進化して來たことは事實であらう。即ち戀愛は先

づ性慾を基調として、

第一に生理的異性美の衝動に開始された、

第二に接近を欲求して、戀愛の内容が昂揚されて心理化し、

第三に結婚を要求する性交慾に化し、

第四に夫妻愛に轉化し、互に補足して完全性の人格を表現し、

第五に親子愛即ち種族愛を生じ、

第六の人類愛に擴充して

第七最後に眞の敬神愛に到達するもので、そこに人格の完成が期待され、靈肉の一致、神人の合一が希求されるのであらう。

兩性關係を人類發展の歴史によりて考察するときに、今日の野蠻人にも見る如き、單なる動物的性慾時代より、進んで道德的結婚の時代となり、單純なる結婚時代より多様な形式をとる複成時代となり、更に精神的となり、神聖視さるゝに至つたものでないかと思ふ。

戀愛と結婚及び離婚

有名なる女性作家ジョージ・エリオットの言に、「道德上から考へると、結婚なき戀愛は、戀愛なき結婚と同じく共に冒瀆であり、我儘であり、私曲である」と、自分も既述の如く、眞の戀愛は、必然的に結婚を追求するものであり、此の追求を許容せぬ戀愛は、精神的姦淫罪と見るのである。

戀愛には智的判斷も伴へば、強い意志の作用も働いてゐる。さればこそ全人格的なのである。その戀愛の完成はやがてまた人格の完成であり、自我の充實であらねばならぬ。それが制度として現はされたのが結婚である。それ以外のものは結婚ではない。掠奪だ、賣淫だ、駄洒落だ。と論ずる人(厨川氏)もあるが、至極尤もな説と思ふ。又曰く斯うした意味の性的結合は、人格的結合なるが故に一夫一婦である。戀愛至上主義のみ一夫一婦を唱ふる資格があると。それも然りと思ふ。しかし斯の種の説を唱ふる人々は、戀愛の至上を高調するの餘り戀愛を即ち相愛と見做し、性交を直ちに結婚と見るの誤りがありはすまいか。彼等は一夜の「ちぎり」でも、そこに愛があれば一種の結婚であり(エレン・カイン)、愛のない銀婚は、二十五年間の賣淫なり(厨川氏)と、斷言する傾向がある。特に後者は行きがかり上の理論で實際はないことゝするも、前者は淫賣家にも普遍適用し得る説となるのである。然し既述の如く淫賣や、夫妻以外の關係は、凡て姦淫の罪惡であつて決して戀愛でも結婚でもないのである。

衝動的で肉感的な戀愛は、決して永續するものでないといふ人々がある。それはさうであらう。若し斯の種の戀愛が續行中に結婚が成立すれば、後日彼れ等の夫妻愛は、多角性を有して將來離婚の徑路を辿るものといはるゝのである。又戀愛が、大體首尾よく成功して結婚しても、男子の方が頭が進み、女子の方が鈍ぶるとか、相互の缺點が明白になるとか、過失が許容されないとか、趣味が相違するとか、誤解や正解より来る嫉妬とか、種々雑多なる出來事が因となり、最後に破鏡の悲慘を實現するやうになるのである。それ等の多くは、戀愛當時より結婚の當初までに於ける、相愛互知の本質程度如何が結果するものと思はれる。若かい時代の戀愛は、遊戯氣分のももあらうが、随分眞劍の場合もある。そのいづれにしても情緒が勝ち過ぎて理智が輕視さるゝところに互知の明を缺く。そこに將來の禍因が潜伏してゐると思ふ。然しその當時、如何に互に知らうとしても知り得ざる多くのことがあらう。又相應に御互の短所も見出すであらう。兎に角それ等の總勘定が結婚となれる曉、殆ど如何なる結婚者の相愛生活にも大小の衝突は免れ得られない。確か米國の最も有名な説教者の一人ヘンリー・ペーチャーであると聞いた。彼が大説教の後に、今此所に集まれる聴衆中に、夫婦喧嘩をしたことのない人があるか、あるなら御出なさいといったところが、二人のお婆さんが彼の前に行つた。ところで彼は、改めてその二人を聴衆に紹介して、「皆さん此の人達は世

界一の嘘言者です」といつたさうである。有名なことだけに、能く夫婦道德の短所を普遍的に觀破したのである。それはその筈だと思ふ。吾々は吾々自身でさへも内省するときに、少からぬ自己矛盾に苦惱煩悶することの多い者ではないか。

そこで自己矛盾の調整と夫婦衝突の融和とが、全く同じ範疇に屬することを容易に發見すると思ふ。そこに自ら調整融和の基準を要求すべく考へさせられるのである。然らばその基準とは何であるか。理智か、藝術美が、將た又道德善か。成る程それ等によりて確に或種の調和を得らるゝであらう。けれどもそれは單に理智は理智の追及者に、藝術美は藝術美の讃仰者に、又道德美は道德美に、各局限された満足を與ふるもので、それ等は十全とか無上圓滿などを渴仰して、創造的持續の上に流轉する人間の根本性なる本質に對しては、餘りに分力的(Component)である。そこで完全性を極求する吾人の理想は、それ等の分力的局限性の凡てを包容する合力的(Resultant)なる何かを發見せずしては止まない。その歸結としてそこに眞善美の神を發見したのである。斯の發見されたる神を信することによりて、凡ゆる調整融和又は十全も圓滿も具體化し來り、眞の平和に當面することを得、そこには消滅可能性或は沮喪窒息性の戀愛も生きかへるのである。況んや多角愛や離婚破境などに於てをやである。斯うしたことは、人力可能の範圍外でありて萬能なる神の領域

である。けれどもさうした神は理神性の神である。神は理神性の外に人格的父性を有するのである。それは體驗の事實である。日常に於ける實生活の原動力 (Original impetus) である。生命の支配者である。それは至聖至愛の慈父である。

戀愛と道德

現代に於て、戀愛を中心として論せられる道德は種々ある。戀愛は、至上至高の道德であり、藝術であり、宗教であり、又生命の宗教であるといふ人々がある。然しそれは藝術萬能者又は戀愛至上主義者の唱ふところで、著しく特化した言ひ方である。又戀愛は愛の根本であるといふことに對しては、前述の如く、戀愛に直接關係を見出されぬ愛の存在があると思はるゝ點に於て、それも肯定が出来ぬ。或は戀愛そのものが道德律の根柢であるといふ説も同じくドグマの如く聞ゆる。

戀愛の伴性として性的嫉妬が考へられてゐる。斯の種の嫉妬は、戀愛當事者相互の所有欲の侵害を感ずるときに起るもので、全然感情に支配さるゝが故に、常に事實を超過して誤解の範圍に入り、恐るべき不徳を結果することもある。愛の強さと嫉妬の分量は正比例をなすが常である。

又男子よりも、女子の經濟的獨立は、その人格を擁護し、戀愛を擁護するの武器といはるゝ。そ

こに屈從又は奴隸的道德が排除さるゝことになる。といふまでは宜しいが、一面に於て所謂歐米の職業婦人間に、自由戀愛と稱して我儘なる享樂結婚を、朝令暮改的に實現することの増加する事實を見聞するのである。戀愛の中心道德として貞操が論議さるゝ。即ち貞操は戀愛の神聖なる擁護者なるのみならず、眞の戀愛には必ず貞操が伴はなければならぬといはれ、又貞操は、自己の人格のために守るべき積極的の道德にして、對者のためにする消極的の道德ではないとか。或は貞操は、男女共通的の道德にて、愛の當爲の要求でなければならぬ。而して、貞操は性交に關してのみならず精神的にも然らざるべからずといふ人々もある。

貞操と再婚とに關する道德は、戀愛中心の歐米人間には問題ではあるまい。戀愛主義を高調しつゝある現代の日本人に於ては、封建時代以來の所謂貞操即ち女子側のみの貞操觀念に影響を受けた關係上、無造作に歐米人に眞似ることは何となく耻ぢる氣分を持つてゐるやうである。所謂戀愛を中とし主義とする或社會人の間に、戀愛が成立すれば既述の如く彼等には、その戀愛に直面して、そこに有夫と有婦との社會的關係の如きは彼等の顧慮する主題ではない。故に夫婦の一方を失ひし後に、戀愛を生じ再婚することなどは全く批判さるゝ餘地がないのである。彼等の戀愛に對する態度は、全く性慾に偏重して彩られたる情緒に基調を置くのである。之に反して日本舊來の貞操は、

全然道義心と稱する理性を確執するのである。そこで前者は自然本位であり本能的なるが故に是であり、後者は不自然である人爲的なるが故に非であると、さう批判を單純化してしまふことは出来まいと思ふ。何となれば吾々は、戀愛の内容に情緒と理性とを重要な素因と思惟する關係上、戀愛を情緒のみの概念として簡單に處理するの不合理を見るのである。戀愛を以て性慾の人格化、精神化とする點に於て然りである。

人類の進化に於て、他の動物に比して著しい特徴は理性の發現である。動物は感情に生き、人類は美化された感情即ち情緒の外に動物を超越したる理性に生きてゐるのである。現代の文化人は、野蠻又は未開人に優越して、殊に理性に生きてゐるのである。而してその情緒の中心たる美の基調と理性の基準とは果して何所にあるかといへば、それ等は共に人心の祕奥否な根柢或は神に在るではなからうか。自分は此の實在者に出發して戀愛を説き、再婚を論ずるときに於てのみ正鵠に近き結婚を得、然かもその結論は生物學上のそれとも一致するものなるべきを確信主張するのである。斯うした理想の下に、貞操對再婚問題をも考察するの合理であることを認むるのである。

さて人生は、食慾と性慾との二つであるといふも、事實に於て人間は食慾なくしては生存し得ないが、性慾は生存に必然性のもではない。ニュートンの如き一滴の精液をも損せずして、生存否

な生活を全うせし偉人もある。故に自分の説としては、生物進化の教ふるところによりて、殊に人類進化の一大特徴に従つて、先づ眞の戀愛によりて結婚し、結婚生活の途中に於てその一方を失ひし場合残されし者は、戀愛てふ精神的、人格的、否な神格的結合の自覺に對し、否な神の前に肉體的には獨身の生涯、精神的には依然として戀愛生活を持続せんとするのである。形に於ては貞婦二夫に見えずの舊道徳に等しく見えるが、多様に亘る深き根柢に於て、其の中に絶大の眞理を有してゐるつもりである。斯かる主張は、現代の如き所謂性慾に偏重せる外資輸入的戀愛論者よりしては、壓倒的新道徳の美名の下に、舊來の陋説と笑殺さるゝであらう。「笑ふ人笑はる者果していづれがいづれ知る人ぞ知るであらう」。

以上は、再婚否定に對する自分の理想でありて、之を萬人に強ひることは勿論出来ないが、斯の精神は能く考慮し實現してもらひたい、吾々は二つの神に事へ得ざる如く、全我的愛人は複數である筈はない。その愛人に對する根本的精神は、その愛人の死と生とによりて變るものではない。我等に内在する理性と本能とは、よく之を教へてゐるではなからうか。戀愛の至上を夫婦同音に宣傳してゐる際に不幸にして夫が死に後に残されたる婦人が、夫の死後未だ一年ならざるに夙くも再婚の噂を傳へらるゝが如きは、假令それが事實でないにしても最早世の末である。然らば再婚は不道

徳で貞操の破壊であるかといふに、それは或結婚生活に不道德と不貞操とが見出さるゝ如く、再婚生活にも道德と貞操とが発見さるゝ場合があるのである。斯うした場合は、再婚にして再婚でないと思ふべきであらう。即ち當初の結婚が誤れる結婚にして、結婚後も結婚生活の内容を缺き、已むなく離婚せし後に、他に新たな眞の意義あり、内容を見出した場合に於ける再婚であるが、それは決して有夫又は有婦のまゝなる二重結婚ではない。又家庭生活に於て夫の死よりも妻の死は特別な影響を與へるものである。その理由は妻は、常に家庭の主宰者女王なるが故である。さうした意味に於ける主婦がなければ、家庭は當然破壊されるものであるといふ人もある（ツヨルゲン博士の言行）。それは生活の保證ありて然り。若しその保證を缺く場合に於ては、そのいづれが死することも實際生活に痛感する悲劇である。場合によりては一家生存さへも保證されない。殊に老幼の家族に病者を有するが如きは其の最も困難なる場合である。斯うした場合は、經濟と性慾と及び家族生活の實際の脅威より來るのである。そこには自分の理想説は單に理想として殘され、さうした實生活より全く排除されるのである。自分はさういふ場合の再婚を心から氣の毒である異常の結婚生活であると思ふと同時に、その再婚が、結婚生活の眞義を離れざれと希ふのみである。それに似て非なる意志の薄弱なる御都合主義の再婚は、その人々には己むを得ないと思ふ意味に於て同情はするが、自

の理論としては如何にしても肯定は出来ない。

要するに、戀愛は至上でありても、なくても道德性の根柢でありてもさうでなくとも、戀愛を中心としての嫉妬、經濟生活の人格及び戀愛の擁護並に戀愛の神聖と貞操觀念或は再婚など、凡て戀愛中心の道德なるものは其の歸するところ、自然であり善であり且つ正しく美しく行はるゝ結婚によりて、種族の維持を第一義とするのにある。若し健康上具體的にその維持が果されない場合は、その精神の實現さるゝことを助成するものでなければならぬ。けれども人類が理性生活に進化せる關係上、その理性を犠牲にしてまでも種族を維持せんとする行爲は、之を以て眞の戀愛道德といふことは出来ない場合もあらう。

戀愛が亂調になり、従つて異性道德が頹敗して、性慾放恣の結婚が行はるゝ社會には、その反動として斯道の大家權威者を見るを常とする。埃及に佛に獨り然り。英にも米にも、次には我が日本にも見ることであらう。

第十章 兩性問題と社會問題

- 一 文化の過渡期と性的生活の不自然(四一八)……………(一) 獨身生活(四二〇)……………(二) 産兒制限(四二三)……………新マルサス主義の意義(四二五)……………(三) 産兒制限の反對説(四二七)……………(四) 産兒制限の理由(四三〇)……………經濟學上(四三〇)……………社會學上(四三四)……………優性學上(四三六)……………産兒制限の例(四三六)……………産兒制限の結果(四三七)……………(五) 産兒制限と優生學(四四〇)……………世界の三大厄病(四四一)……………結婚の最大悲劇(四四二)……………優性學上避けらるべき諸病(四四六)……………優性學を實行する手段(四四七)……………産兒制限及び優生學と法律(四五一)……………優性學の極論者(四五五)……………(六) 優性學に對する反對説(四五六)……………二性教育(四五九)……………概説(四五九)……………花柳病の家庭破壊力(四六〇)……………青少年と花柳病(四六二)……………性教育の不振なりし理由(四六三)……………性教育の要點(四六四)……………性の教育者とその場所(四六五)……………思春期の特徴(四六七)……………性教育の要項(四七二)

一、文化の過渡期と性的生活の不自然(獨身生活結婚期の遅延及び産兒制限)

生物學より見れば、人類の文化生活は贅澤生活である。殊に近代就中現代の文化は既にその極を越てゐる。吾々文化人でさへも今日の文化は、その過渡期にあることを認めざるを得ないのである。元來動物と共に食欲と性慾とを以て、生存を全うした我等人類の祖先は、その進化と共に住所と衣服とを必要とし、そこに衣食住と性慾とを生存の必要條件とした。而して更に衣食住の内容を複雑にすると共に、娛樂を求め理想を追究するに至つたのである。そこに生存は生活となり、單なる生活は進んで文化生活と變化したのであるが、生活の中心は依然食欲と性慾とである。けれども文化人の文化なるものが、人間性の凡ゆる慾望を満足せしめんがために、著しく贅を極めて複雑を齎らした。その慾望の重なるものは感覺の慾望である。即ち五官の満足を希ふの念である。斯うした慾望の満足は、勞力を冗費し、經濟的に極めて高價なるに反比例して、人性即ち人格の下落を伴うて來たのである。曩に自然を征服せりと思ひたりし人類は、今や著しく不自然に化したのである。物質的に成功しつゝある現代人は、精神的に全く失敗しつゝあるのである。

現代文化の過渡が、現代人の兩性生活の圈内に生み出した産物は、少くとも三つあると思ふ。その(一)は獨身生活者の増加、(二)は結婚期の遅延、(三)は産兒の制限である。之等の問題は、主として社會學者に取扱はるべきものであつて、自分の如き局外者にしてその智識に乏しいものが深く之に立

入ることは出来ないのである。故に今唯生物學の立場より簡單に之を述べて見たいと思ふのである。

(一) 獨身生活

獨身 (Celibacy) は、近代文化の特産といふべきものであらう。高等の動物に於ては、鳥類の雌に「やもめ」のあることが知られてをる。然しそれさへ稀であるといはるのである。野蠻人は殆ど各人凡てが結婚する。彼等は恐ろしく獨身者を嫌惡し、或種族にては、獨身者を賤むこと盜賊又は魔術家の如く、妻なきものは人間にあらずとさへ言つてをる。それで斯うした思想が極端に現はれて、彼等の間に非常に早い結婚が行はれる。例へば極地グレイランドにては、性交の不可能以前に於て既に結婚し、或印度人中には男子の九歳又は十歳にて結婚するものがある。然し一般としては男子は十四乃至十八歳で、女子は九乃至十二歳である。朝鮮人の小學生中に既婚者のあることも珍らしくないさうである。我が日本にても男子が二十歳前後、女子の十六七歳で結婚せし例は、半世紀前まではあへて珍らしくなかつた。従つて凡ゆる男女結婚せざるはなく、白痴低能者でない限り殆ど獨身者といふものはなかつたのである。又昔ギリシヤでは獨身者は罰せられ、羅馬時代では苛税を課せられたのである。

斯の如く未開野蠻人の社會又は、歴史に遡るに従て獨身者の少なきを見て、獨身者の如何に近世文化の産物たるかを明かにし得るのである。とはいへ、古來東洋及び歐洲諸國に於て、少數ながらも或階級に獨身者が存在してゐたのである。從來多くの野蠻人の間にも奇怪なる思想があつた。それは性交に對してそこに何か一種の不淨が現在せりと思つたことである。斯うした思想が長い歲月の間に種々なる宗教の中に入つたのである。例へば多くの國々では、その意味に於て處女を崇拜した。昔羅馬の貞女 (Vestal virgin) も同じ意味の對象であつた。釋迦の母は神聖で且つ清淨でありて、釋迦をば超自然的に懷妊したと傳説されてゐる。佛僧は妻帯を禁せられた。されば支那でも日本でも同じく、僧侶は一般に獨身者であつた。ヘブライ人の間にも矢張り結婚の不淨が根本思想となり、それが基督教に強い感化を與へたといはれてゐる。第一基督の「處女降誕」(Virgin birth) たる所以は全くその思想のためであらう。使徒パウロは自ら獨身であり、又獨身を以て結婚よりもより高く考へた。舊教の思想中にも、純潔なる人は不滅なりとされてをる。豫言者エレヤミの言にも、「地には婚姻、天には童貞」というてゐる。

以上舉げしところは専ら史實であつて、近世より延いて現代に於ける獨身生活は、恐らく如上思想の連續に相違なからうが、更にそれに加ふるに經濟上の濃厚なる色彩を以てし、且つ歴史の全頁

に於て絶えず壓迫を受けてゐた女性の覺醒より來れる獨立のためであるかの如く見らるゝのである。さうした意味の所産として、

- 一、男子の獨身學者、
- 二、女子の獨身にて教育宗教、又は社會事業に従事する者、
- 三、男子の經濟上結婚し得ざる獨身者、
- 四、職業婦人の獨身者及び
- 五、自由結婚の落伍者がある。

斯うした人々の歐米の、文化國に多いことは素よりいふまでもない。而して今やそれ等の生活状態が、我が國の大都市に波及實現されつゝある。

抑人類の生活が自然界とその調和を保ちつゝある間は、此世に生まれ出でただけの男女は、悉く結婚するのが自然であつて、結婚しても生活に困難を見ることは少なかつたのである。然るに人類が自然を征服すると稱して、そこに文化の過渡を産み出すや、從來に於ける自然の性生活を變調せしめて、既述の如き多くの獨身者を出すに至つたのである。斯うした意味に於ける獨身者の發現は勿論不自然には相違ないが、一般人類に於ける文化の進展上、果して如何なる關係を生ずるであら

うか大にその實質を考察し置く必要があるのである。思ふに獨身生活を産出した社會は、之がためおのづから明暗の二方面又は利害の兩面を有することになつてゐるやうである。比較的少數の獨身者を出したからとて、生物學上人類種族の維持に何ら大した影響はあるまい。却て之がため家庭生活の煩を避け得て全生涯を、カントの如く思索に、ニュートンの如く學究に、又多數米國婦人の如く小學より進んで大學の教育事業に或は内外國傳道の奉仕に捧ぐることは、如何に偉大なる能率を人類の眞文化に寄與するであらうか。然るに斯うした光明を見せてゐる社會の一面に於ては、生活問題と戦ふ男子の中に、又は職業婦人の間に、彼等が少くとも性的に如何に墮落し、更にその蠱毒が眞の文化發展に大なる壓迫を與へ、障害となりつゝあるか計り知られないであらう。これ即ち現代の歐米社會に事實として猛烈に現はれてゐるところのものではなからうか。要は如何にして此の暗黒面を、光明に轉換せしむべきやである。之は識者の頻りに憂慮しつゝある點であらう。

(二) 産兒制限

歐米文化の過渡期に現はれた事態の他の一つは、新マルサス主義(英國の Neo-malthusianism) 即ち産兒の制限 (米國の Birth control) である。是れ亦必ずしも古來全く無かつた問題ではない。

然し此問題が近代ほど文化國人に興味を持たるゝやうになつた時代は嘗てなかつたのである。佛國の人口減少は周知の事實である。その原因は種々あらうとも、産兒の制限はその最も有力なる一大因であるといはれる。翻つて北米カナダに於ける佛國系の人々の間には、一家二十人前後の大家族を有するものが稀でないといふ事實を見るに何故本國で小家族、否な國家としての人口の減少を歎きつゝあるのであらうか。

文化の潤澤でない時代又は社會では、子女は自然に生まるゝまゝに放任して、然も生理的經濟的並に社會的に成育して、彼等の社會を形成し得たのである。然るに現代の如き文化の過渡期に際し、殊に大都市に於ける生活の環境にありては、中産階級以下の社會人の如き、その収入に比して家族の生存費と子女教育費との高價なることが到底彼等をして多くの子女を有せしむることを許さない。換言すれば今も尙自然の環境に親しみ得る地方人にとりては左程でないとしても、都會就中大都市生活、即ち自然界の色彩に乏しき生活者にとりては、著しく生活の困難を感ずるのである。勿論都會人とてもその子女の教育簡單にして、生産的に利用するものによりては、それほど生活難に脅かされないかも知れないが、中産の智識階級者にして相當に子女の教育などを顧慮するものにとりては、到底その苦難を免れない。即ち社會の文化が斯くまでに進んだといふことは、他面に於てそれ

丈け自然を離れて不自然になつたといふことである。故に從來自然的に育て得たる子女の出生を、今や不自然に制限せざれば、所謂「親子共倒れ」となりて、人類生存の根本義である種族の維持をして不可能たらしむる傾向を生ずるのである。故に斯うした場合の産兒制限は、生物學上自然であり、道徳上正しい行爲で、社會生活の上に必要なることになり、從て法律上から見ても、決して犯罪を構成するものでないといふのである。然れども若し右の如き境遇に在る家庭、即ち夫婦間の理性的な正しい生活の場合以外にそれが行はるゝとすれば、さうした産兒の制限は、所謂「安全なる放蕩」にして寧ろ姦淫罪であり、不正不義の行爲であつて、不自然を極め、人類に男女を生じたる眞意義を失ひ、人類を肉體的並に精神的に墮落せしむるに至るのである。斯のことは既に前章結婚制度の下に論述したのである。

さてこの新マルサス主義に就て次の如く意義づけてゐる人々がある。即ち新マルサス主義とは、生理的に又經濟的に差支ない程度に於て成るべく早婚し、避妊法によりて産兒を制限しようとする一種の社會運動でありて、進んで斯うした主義をば新道徳と唱へるのである。而してその産兒を制限するとは、全く生理的の受胎を防ぐに外ならぬのである。即ち精子と卵子との結合を避ける方法の下に性交が行はなければならぬといふやうのである。それ故に此の意義に於ける産兒制限は、一度

受胎したるものに對しては何らの交渉を持たない。從て墮胎又は人工早産ではない。畢竟人爲的避妊の結果、或程度に於て人口の増加を防遏することに歸するのである。

現代は、表面上未だ産兒制限の理論時代で、國家としては部分的に之を實現してゐるに過ぎない。斯くて世界文化諸國が、擧つて之を問題とする程に、社會の状態が變轉し來たのである。今日世界の主要なる國々に支部を有してゐる「新マルサス主義聯盟」は、多くの歳月を費して成立した團體であつて、その定期刊行物を各國語に印刷して之が宣傳に努め、紐育市の如き國家的世界的の意義を有する次の四團體が成立せる外、米國內二十州にも分會がある。かの「産兒制限評論」はマーガレット夫人編輯の有力なる月刊機關雜誌である。

「一千人委員會」イラ・エス・ワイル博士議長

「世界産兒制限聯盟」ウキリアム・ジェー・ロビンソン博士會長

「婦人百人委員會」アモス・ビンコット夫人議長

「有志兩親聯盟」メリイ・ウエーア・デンネット女史總長

之等の團體に屬する人々は、斯の主義を以てその實行によりて、女子の解放、世界人類の幸福の歸結を見るを得る人道上の社會問題と見、之を以て新道德と叫ぶのである。

(三) 産兒制限の反對説

然るに茲に産兒制限に對して、諸種の反對説がある。大別すれば、

第一に自然の法則に反するものとして

第二に不道德行爲として

第三は社會的の方面より

の反對である。以下それ等反對論の唱ふる主なる理由を述べて見よう。

第一、自然の法則に反するといふ説、之は全くその通りであつて、生物界に故意の産兒制限なるものは絶對にない。人類も生物である以上同じ法則に従ふべきであつて從來その法則の下に發展し來たのである。然るに苟も生物界の最高文化を唱ふる文化人の社會にして、自然界に對して違法なる産兒制限などのあるべき筈はあるまいといふのである。ところが此の説を攻撃する人々のいふには、一體自然の法則とは何であるか、我等人類は幸福を獲得せんがために存在してゐるのである。産兒の制限は確に人類の幸福を増進するものなるが故に、之を肯定するのである。又人類の野蠻未開の時代には自然の法則に支配されて然も幸福であつたであらうが、近代文化は自然を征服して不

自然なる生活に入るものなるが故に、嘗て自然なる環境にあり自然法によりて幸福を受けてゐた人類が、今や不自然なる環境に當面して、同じく不自然なる法則に従つて幸福を得んとするは、寧ろ當然のことではあるまいかといふのである。

第二に、産兒制限は不道德であるといふこと。その理由とするところは即ち産まれるべき子供を制限することは之を道徳上より見て許すべからずとするよりも、寧ろ殺人として法律上の罪人といふべく、又産兒を制限するために行はるゝ避妊は、その女子をして生涯の石女うまづめとする外に、若し避妊の方法が行はるゝ場合には、夫妻關係以外に於て、放恣亂淫の無節操不徳義漢を多生し、その結果花柳病者が増加して、爲に國民の興廢に影響するに至るべしといふのである。而して之等の反對説に對する辯解としては、その殺人云々の如き、寧ろ産兒制限と墮胎とを混同するの説にして、産兒制は前述の如く受胎前のことである。次に石女たらしむるは産兒制限方法の不完全より結果すること、方法にして宜しきを得んか、唯或期間を制限して適當なる時期に至れば、妊娠は勿論可能である。最後にいへる無節操者を生ずる患は性教育と相待ちて之を緩和するに敢て難くないといふのである。

第三の社會的方面よりする反對説の主張としては、先づ第一に制限論者の所謂制限なるものは、

産兒を最初の二三人に止めそれより後を省略するといふにあるも、元來最初の子供は、所謂「總領の甚六」とて、概して優秀ならざるものである。之に反して優良者は末子に之を見るを常とする。故を以て産兒制限が果して常則とならんか、舉世平凡者なる甚六を多出し、爲に人類文化の基準を低下せしむる憂なきか。換言すれば、天才偉人なき低級なる國家社會を現出する恐はなからうか。次に産兒制限は、當然全人口の減少を結果して、國內の壯丁數を減じ、ために軍事上並に産業上に少からざる影響を來すべしといふのである。然るに之等の説を排斥する人々は、先づその初子を「總領の甚六」とする理由の根據なきことを主張する。即ち長子にして天才偉人たるものが有る。若し甚六がありとすれば、それはその父母の結婚年齢が餘りに若かゝつたためかその他何かの理由があらうし、又末子に不良性の者も随分少くあるまい。要するに甚六説は當を得ない。従つて舉世平凡者云々の如きは寧ろ杞憂に屬するといふのである。次に人口減少とその軍事及び産業に及ぼす影響、それも決して憂ふべきではない。又近代は戦争であれ産業であれ、昔時の如く單に人間の數に重きを措くといふよりも寧ろ質の方を顧慮する。即ち無智の多數よりも、有智の少數が遙に多くの能率を擧げ得る。一體斯の説を唱へる者は、主として貴族と資本家とであつて、今日までの世の中は平民及び勞働階級が始終彼等のために犠牲に供されてゐたのであるといふのである。

以上の外に、宗教上の教義よりする反對がある。右等の如き反對説に對し産兒制限論者は更に反對説の反對を唱へて結局次の如き理由の下に、積極的に熱心に彼等の主義を、宣傳せんとして只管努力しつゝあるのである。

(四) 産兒制限の理由

産兒制限論者の主張する理由は、大體次のやうに分類されると思ふ。

第一は經濟學上より

第二は社會學上から

第三には優生學の上より

第一の經濟學上の理由としては、人口増加の問題であり、多産の問題である。試みに多産の一例を挙げると、布哇に居住するポルトガル人の一女子は、二十七人の子を産んだとのことである。その人の健康状態の卓越は思ひやらるゝとしても、凡ての女子が斯くも多産されては實際困るといふのが産兒制限論者の立場である。彼等の主張を助成する一大原因は世界人口の増加である。

・マルホールに據れば(『ファイルディング著瀬戸氏譯』「性の社會的考察」二五二頁)

羅馬帝國時代に於ける地球の人口は、

五千四百萬

十五世紀の歐羅巴の人口

略右と同數

千八百八年に於ける歐羅巴の人口

約一億七千萬

千九百年歐羅巴及び米國その他に居住する彼等の子孫

五億以上

と計算されてゐる。最近ともいふべき百年間には、二倍以上の増加であるが、それに対する食物の量は如何。尙世界の主要文化國に於ける人口増加の統計を示せば次の如くである。(千八百年より千九百年まではヒックマン氏の調査千九百二十年は列國國勢要覽による……澤田氏)

國名(殖民地屬領地を除く)	一八〇〇年	一八五〇年	一九〇〇年	一九二〇年	一方里の人口	稠密順序
露 西 亞	千位 三六、八〇〇	千位 六二、二〇〇	千位 一三三、四〇〇	一位 一三六、〇〇〇、〇〇〇	四位	(一)
北米合衆國	五、三三六	三三、六〇〇	七六、四五〇	一五、七二〇、六二〇	二位	(二)
獨 逸	二一、〇〇〇	三五、四〇〇	五六、三七〇	六〇、八九八、五八四	三位	(三)
奧地利匈牙利	三三、〇〇〇	三〇、三七七	四五、四〇〇	—	—	(四)
日 本	二五、五〇〇	二七、八四六	四一、八〇〇	五五、九三六、〇五三	五位	(五)

英	吉	利	一六、二〇〇	二七、三六九	四一、四八四	四七、三三七、五三〇	二、三三三	(三)
佛	蘭	西	一六、九〇〇	三五、二六〇	三八、九六〇	三九、四〇二、七三九	二、一〇三	(六)
伊	太	利	一八、一〇〇	三三、六七七	三三、四五〇	三六、〇九九、六五七	一、九四四	(七)
西	班	牙	一一、五〇〇	一三、七〇〇	一八、一〇〇	二〇、七六三、八四四	六三五	(三)
瑞	典	威	三、三三〇	四、八〇〇	七、四〇〇	五、八四六、〇三七	二〇一	(六)
那	威		三、〇〇〇	四、四五〇	六、八〇〇	七、五七七、〇二七	三、九六九	(一)
白	耳	其	二、七〇〇	四、二〇〇	五、九二〇	一五、四〇〇、〇〇〇	七五〇	(三)
羅	馬	尼	二、九〇〇	三、四〇〇	五、三〇〇	五、九六〇、〇五六	一、〇〇〇	(〇)
葡	萄	牙	二、一〇〇	三、〇〇〇	五、二〇〇	六、八四一、一五五	三、三三九	(二)
和	蘭		一、七〇〇	二、五九〇	三、三三〇	三、八八六、〇九〇	一、四四九	(八)
瑞	西		九〇〇	一、二〇〇	二、五四〇	五、六〇〇、〇〇〇	七九五	(二)
希	臘		八〇〇	一、二〇〇	二、五四〇	—	—	(八)
寒	爾	維	一、〇〇〇	一、四五〇	二、四五〇	三、二六八、八九七	一、二五〇	(九)
丁	抹		—	—	—	—	—	(九)

以上の三列即ち一八〇〇年、一八五〇年及び一九〇〇年を合計して見れば

(一八〇〇年)

(一八五〇年)

(一九〇〇年)

二〇四、三三六

三三四、八〇九

五〇七、九二四

となり、全體に於て一八〇〇年より一九〇〇年に至る百年間に二・四八即ち約二倍半の増加を示してをる。之に對して飲食物の生産量も、確に増加したに相違なからうが、その兩者の割合がマルサスのいふ如く、幾何級數と算術級數との比であるか否かはそれからは判からぬ。マルサスの人口論は、今日も尙非難され、或極論者の如きは人間は多くとも一年に一對の夫婦より一人しか産れないのに、小麥は一粒を蒔いて、何十粒に殖えるではないか。此の點から見ても、該人口論は誤謬を極むるものであるといつて攻撃するが、それは隨分學者の暴論だと思ふ。何せなれば、一人の人間は、一粒の小麥で一年間生きてゐられぬからである。兎に角日本などに於ては毎年五百萬石の米が不足してゐるといはれてゐる。多分全世界殊に前記の文化諸國に於て、直接の必要飲食物に對する生産力不足し剩へ不必要なる贅澤品に浪費さるゝことの多きために、到るところ生存並に生活問題を中心とする爭議の絶えぬのみか年を追うて漸増する傾向が、明かになりて來たことは事實であらう。特にその傾向の著しい國は、日本と獨逸であるかのやうに見られる。勿論一方に於ける人口の密度は、白

耳義が第一で、和蘭がそれに次ぐが、兩者ともに小面積の國で、人口の實數は六七百萬を越えずその上に殖民地を有してゐる。英吉利も密度に於ては世界第三位なるも、殖民地及び屬領地の多いことによりて、充分に緩和されてゐるから、それは餘り問題にはならぬわけであるが、本國に於ける勞資爭議は、なか／＼組織的に猛烈である。而して第四と第五位を占むる日本と獨逸とに至りては、人口實數の多い割合に、殖民地や屬領地なるものが至て少ないのは實に心細いわけである。

要之、世界人口の増加するや、特別な何等かの方法を以て、食物の生産増加を計らざる限り、生活はおろか、生存さへも覺束ない状態に向つて行く。されば斯うした意味に於ける經濟學の上から見ても、自然に放任して出産を無制限にすることは、結局人類共同の幸福のために不利であるといふ理由の下に即ち産兒制限を主張するのである。

第二は社會學上からの主唱である。右の如く人口が過剰になれば勢ひその生存即ち餓死を免れんがために、凡ゆる手段を以て食物を求めらる。食物を得んがためには、戦争も餘儀なくされる。先年の世界大戦争に於ける獨逸の立場は全くさうであつたといふ論者がある。勿論それのみが直接の戰因ではなかつたにしても、人口増加の點は前項に述べた通り全く事實であつたのである。日本も年次増加の人口を處理するため何所かに移住地を見出すべき必要に迫られてをる。然も米國、加奈陀、

濠洲の何れよりも排斥され、獨支那北部にのみその足場があるとしても、元來移住地なるものはいふまでもなく、直接間接の生産地でなければならぬ。單に地積さへあればそれでよいといふ譯のものではない。日本なども今後成行のまゝに人口を増殖させておくと、自然の結果として戦争の止むなき場合ともならう。是に於てか産兒の制限は當に日本人のためのみならず、實に世界人の幸福ともならうといふのである。

又國家の要因である家庭に於ても、家庭の幸福上、次の場合の如きは産兒の制限の必要あり、まさに避妊すべきものだといふのである。

- 一、身體虛弱にして分娩に堪へざる母。
- 二、分娩頻繁にして母體の衰弱甚しきもの。
- 三、強ひて妊娠すれば、母體の生命を損ずる體格又は疾病を有するもの。
- 四、不良性の遺傳形質を有する場合。

次に、社會學上いづれの國に於ても産兒の制限を必要とする當面の問題は、漫性又は先天的とも見らるゝ貧者や犯罪者の増加である。彼等に對しては、宗教上の説教や、道德的教訓、科學上の知識、或は法律上の制裁の如き假令無力とはいはれぬまでも、その能率の少ないことは争はれぬ事實

であらう。之に反して、彼等の出産能率は充分にあがつてゐる（死亡率も相應多いとしても）。實に斯の種の人口増加は、社會の安寧秩序を紊亂し人心を不安ならしめ、毫も人類社會の幸福増進にあるまいといはれてをる。此のことは後項に述べる優性學と握手して考察すべき重要な社會問題である。

第三は優性學即ち人種改良上より見て、惡質性の人間に、避妊或は絶産せしめ、以て善良種の育成を奨励する意味に於て、彼等に對して産兒の制限をなすの合理なることを高調するのである。優性學の問題は、有意義の廣汎なる主題なるを以て、項を改めて後に述べることにする。

以上の三理由により、産兒制限説は極めて有力となり、現に之を應用してゐる國があるのである。斯の問題は最近に於て新道德と稱せらるゝまでに強調せられつゝある。然し前述の如く、之と混同さるゝ墮胎による人口の制限は、古來いづれの國に於ても不道德と意識されつゝ、狭き範囲内に行はれ來つたのである。我が國にありても、「間引き」なる語は、元來野菜作物の場合に於ける常用語なるを、更に範圍を擴げて人類の産兒にまで及ぼしてゐた事實がある。昔時藩によりて強制的に命じたるもあり、又禁じたのもあつた。「間引き」の最も能率を高めたのは、今日の千葉縣であつたと聞いてゐる。又伊賀の城主藤堂氏は、その領地が山間礪角の狭地であつた關係上、三人以後の子供は悉

く或方法で制限した。之に反して日向の飢肥藩では、從來三人以下の子供を、間引く習慣なりしを嚴禁し、その代りに開墾を奨励して人口政策を講じたといふことである。幕末の漢學者安井息軒先生も間引かるゝ範圍内に這入つてゐたのを、幸にも藩の禁令によりて免がれたとのことである。又南洋のカイゼル島や、ワツペラー島の土人は、嚴重に二兒制を實行してゐる。此の點は佛蘭西に似てゐるが、既述の如く墮胎は人口の制限を結果するも、今日の新マルサス主義には這入らない。されば前者の墮胎による人口の制限手段に對し、佛蘭西は受胎前に産兒を制限する新マルサス主義によるの差があると思はれるのである。

以上に述べたる意味の産兒制限の結果、之が國家社會並に人類に及ぼす影響に如何なるものがあるかに就て、斯説を主張する人々は、次の如きことをいうてゐる。

一、國民の健康を増進し、死亡率を減せしめる。一體産兒制限は、思想問題としては英國に起つたものであるが之を最初に實現したのは佛國である。その理由は主として經濟問題を基調としたのであるといはるゝ。英國の遺産相續法は、我が國の如く長子相續であるが、佛國では子供の數に均等分配するのである。それ故に子供の數が少ない程、財産が多くして生活の安全が保證されるといふ關係があるのである。

次に之を實行して、然かも理想に近い結果を見せてゐるのは和蘭である。世界の各國は、漸次和蘭の後に追従するに至るであらうといふのである。和蘭の新マルサス協會は、熱心に之を宣傳せし結果、驚くべき速力を以て普及し、意外なる現像を見るに至つたのである。即ち子供を少くして、それを充分に保護し養育するやうになつて、育児上の國民衛生が非常に改善され、その結果死亡率が減少し、國民の健康が増進して、體重身長共に増したのである。勿論産兒の出生率は減じたが、その代りに死亡率も急減したのである。即ち一八八一年より一八八五年まで、即ち新マルサス協會が設立されるまでの出生率は、アムステルダム市にて三十七人強であつたのが、一九一二年には二十三人強に減じ、之と共に死亡率の方も二十五人強より、十一人強に急下し、幼兒の死亡率は、二百三人より六十三人に激減したのである。同じやうな統計が、同國のヘイグ市にも見られるのである。即ち出生率は三十八人七分より二十三人半となり、死亡率は二十三人より十人九分に減じ、幼兒死亡率は二百十四人より六十六人に急減した。又ロッテルダム市にては幼兒死亡率が二百九人より七十一人に降下したのである。

米國にては、有名なるサンガー夫人等の熱心なる運動はあれども、今日のところ産兒制限は

違法である。然し事實に於ては、中流以上の多くの家庭に能く行はれてゐるといはれる。

二、過重なる妊娠より女子の解放 之は母親の健康を増進し、育児の負擔を軽減するの結果、女性が自己修養の餘裕を得て、育児に將た夫を助くる上に良結果を齎らし、延いて社會の文化的平和事業に盡力するを得るに至るのである。

三、眞の平和と産業の發達 之等は、産兒制限の實行後に期待されることで、人口過剰に失せざれば、既述の獨逸などに於ける戰因をば醸すまいし、又精良なる職工や労働者が、諸般の産業に能率を擧ぐべきことは明かであるといふのである。

四、貧民と犯罪者の減少 之も既述の如く、次項の人種改良と共に、産兒の避妊又は絶産によりて、減少せらるべきものである。

要するに、人類の増殖に關しては他の動物の場合に於ける自然淘汰の範圍を超えて、産兒制限てふ人為淘汰によりて、その生存がより安全に、より幸福に保證され、産兒調節の結果、肉體並に精神的惡質者を一掃して、社會を廓清改善し得るといふのであるが、今日のところでは、實際よりも期待や理想が、勝つてゐるやうであつて、事實は果して那邊まで到來するか、それが専ら注目されてゐるのである。

次には、産兒制限と相待ち協力一致、渾然融和の態度をとりて、眞に人類社會を一大理想化せんとする優性學に就て特にその産兒制限に關する部分の梗概を述べて見よう。

(五) 産兒制限と優性學

今日の人種改良學といへば、主として優性學(Eugenics)を意味する。而して所謂優性學は人類の先天的遺傳性即ち稟性(Nature)を中心として改良を計る科學である。ところが茲に目的は同じであつても、遺傳性中心ではなくして、後天的環境即ち教養(Nurture)を主とする優育學(Euthenics)がある。簡言すれば前者は「氏」で後者は「育ち」といふが如きものであつて密接不離の關係を有してをる。されば兩者の協調し握手するところに即ち人種の改善が期待さるゝであらう。唯如何に環境を善くし教養に努めても、遺傳質そのものを除去することが、絶對不可能であるといふところに、優性學の強味があり、そこに人種改良學といへば専ら優性學を指してゐるやうに見えるのである。

昔プラトーンが、人類は須らく優良人同志の配偶を助成すべく、劣悪者同志の結婚より來る産兒は之を養成すべからずといつたことや、トーマス・モーア Thomas More(1478—1535)がユートピア(Utopia, 1516.)に、結婚すべき男女は、豫め裸體のままにて検査すべしといつたことなどは、全く今

日の農學者が、作物や家畜を改良するに等しい見方であつた。畢竟動植物に對すると同じ科學上の原理を人間に應用したのが即ち人種改良學である。

現代の文化國に於ける人種改良の對象として、三大生理災厄と呼ばれるものは次の疾病である。之等は實に世界の三大厄病である。

- 一、花柳病(梅毒、痲疾、軟性下疳)
- 二、酒精中毒
- 三、肺結核

此の中特に花柳病が、最大災厄といはれてゐる。斯病の結果する所極めて悲惨にして救治頗る困難、その害毒は獨り當人に止まらず、容易に配偶者に感染し、遠く子孫に餘毒を及ぼして、種族を生理的に、又精神的に退化せしめ實に戰慄恐怖すべきものがある。従つてそれだけ今日の人種改良論者は、より多くの勢力を只管斯の方面に集中してゐるのである。第二の酒精中毒たる世間周知の事實なるに拘らず、さほごに顧慮されざるところの漫性の社會病である。されごその被害は、個人の一般健康より延いて子供に影響し天才或は狂者、低能乃至白痴者を出し、性的虛弱又は無力を將來すること、並に癩癧にして喧嘩を好み、妻子を虐待し、極端なる嫉妬に陥り、犯罪將た貧乏の動機

ともなる等家庭と社會とに對し、最も廣汎的に、累多からしむる惡質性のものである。第三の肺結核に至りては更に世人の周知するところ、難療不治の文明病と稱せられ、實に人種改良の強敵である。尙以上の三大災厄以外に於て、吾が日本は更に一厄を有してゐる。それはかの癩病である。明治三十七年の調査によれば、全國の推定患者数は實に三萬七千三百五十九人を算へ、人口一萬に對する八人の割合にして多癩國として事實上世界の第一位を占めてをる。是亦人種改良と産兒制限との握手によりてその輕減を期すべきものであらう。ウィリアム・フィールデングは、結婚の最大悲劇として次條の如く述べてゐる。

『結婚悲劇中の最大悲劇と、多くの離婚との大原因は、恐らく花柳病であらう。之等の禍患即ち痲病乃至微毒多分その双方が大抵夫によつて何等疑心のない妻に傳へられるのである。妻はこれらの病氣の性質及結果の重大なことに就て絶えて豫備知識を有せず、従つて速に有效なる醫療を受くべき必要のあるといふことを知らないものが多いのである』と

更に氏は、プリンス・エイ・モロウ博士の調査に係る紐育病院花柳病婦人患者の七割とバルクレイ氏の調査に係る微毒を有する結婚婦人の八割五分とは、全く夫からの感染であることを述べてゐる。之等の數から見て、彼等米國の男子が、如何に性的不道德の雰圍氣内に、肉的享樂を貪りつゝ、而

してそれより來る災厄を收獲しつゝあるかの程度が推察されるのである。而して彼等結婚者の中に、如何に悲惨なる生別死別が現出するかに就ての實例は、後項の「性教育」に譲る。斯うした出來事が獨米國のみでなく、文化を以て誇りつゝある凡ゆる文化國に普遍共通であるところに、産兒制限論者優性學者が、確實なる論據を掌握してゐるのである。

花柳病と、酒精中毒と、肺結核とは、各自に孤立して存在し得ると同時に、相互に協力して猛威を振ふ場合が少くない。そのいづれにしても、それ等は常に肉體に作用するのみならず、精神的廢疾者を出し、以て子孫に累を及ぼし兼ねて社會に害毒を擴充することを以てその特徴とする。斯うした惡質類例の最も著名なるものは、

米國のジュークス家、

獨逸のマルクス家、

瑞西のチェロ (Zerol) 家、

の三家である。ジュークス一家に就ては、既に第八章に述べたる如く、千七百二年生れのジュークスといふ放縱淫蕩なる大酒家より、約千二百人の子孫が繁殖し、その多數が犯罪者、不具者、夭死者怠惰者、淫賣婦であつたのである。

チエロ家とは今を去ること數代、或惡質退化性の男子が、或退化性の女性と結婚して成れる一家を指してのことである。この一對の夫婦から生れた子孫は急速度を以て繁殖し、千九百〇五年には百九十人に達した。而してそれ等の人々は、大抵浮浪癖を特徴とし、窃盜、大酒、精神的乃至生理的不具者、道德的頹廢者であつた。

翻つて善質と惡質とが兩親よりして、明かに繼承さるゝ如く見ゆる優性學上興味ある實例は少ないが、次の如きはその一例である。

『或優良家系に生れた一青年があつた。彼が亞米利加獨立戰爭後、革命軍から除隊されて歸るや、ニュージャルシイの或精神虛弱の娘と結婚した。しかし彼はその後この娘と離婚して更に一クエーカー教徒の或娘と結婚した。此の娘の一家は、これまで商業上並に學問上に於て、卓れた人を出してゐる優良家系であつた。始めに結婚した精神虛弱の娘は、その後再び他家に縁付いて若干の子供を生んだ。そしてその子孫は甚だしく繁殖して其數四百八十人に上つた。儲クエーカー教徒の娘には、件の青年との間に八人の健全な子供を設けたが、その子孫は三百六十五人を數へられた。而して是れ等兩家系の子孫の性質等に關する、統計は下の通りである。』

	精神虛弱の母親から 生れた子孫	健全な常態的母親から 生れた子孫
常態者	四六	三六二
精神虛弱者	一四三	
私生兒	三六	
性的不道德者	三三	—
微毒患者	三	
犯罪者	三	
癲癇患者	三	
淫賣屋經營者	八	
精神錯亂者	一	—
酒精中毒者	二四	—
嬰兒夭折者	八二	一五

以上は、大體に於て遺傳形質の差を示してゐて所謂優性學上の好材料とも見られる。然し一面優育學からも充分に解釋し得べき部分が少くないのである。

人種の改良に當面して、優性學上避け得らるべき疾病は、第一には遺傳性のもの即ち形質又は素質を遺傳するもの、次に遺傳するや否や不明のもの、更に之に次いで傳染性の惡質病並に漫性的に健康を害する諸病である。それ等は次項の疾病である。

一 遺傳性のもの

血友病、色盲症、夜盲症、近視、視神經萎縮、筋肉萎縮、漸進性筋肉消耗症、鱗皮症、強度の精神的諸症。

二 遺傳不明のもの

萎黄症、不妊症、子宮脱出症、クリプトキズム、ヒポスバディアス、双子産。

三 傳染性の惡質症

微毒症、癩疾、肺結核、癩病。

四 漫性的に健康を害する疾病

酒精中毒、糖尿病、心臟病、鉛中毒等。

優性學は、以上の諸病を出來得べくば撲滅、然らざれば極度に之を輕減せんとするのである。而してこれが手段として考究し且つ實行しつゝあるものは、公衆道德に訴へ、又國家法律の力をかり

て行はるる科學的、即ち生理學的方法の適用である。斯くて根本的方法としては、生理的手術の絶産法を採り、一時的の手段としては、種々なる物理又は化學的の避妊方法を用ひるのである。之等の手段方法によりて産兒を人爲的に制限淘汰して、優良種族を得ようとするのである。而して之等の手段方法の對象者は、申すまでもなく前記諸病を有する患者をはじめ、健康上妊娠に堪へざる夫妻男女である。されども文明の淪落に向ひつゝある現代の文化國に於ては、右に擧げたる家庭の外更に他の範圍にも、少からざる對象を有することは誠に嘆はしいことである。

今次に、それ等の方法の一般に就て、既に公表されたる部分を述べて見よう。

一 生理的手術

(イ) 絶産法 (Sterilization) 又永久的避妊 之は次の如き種類の人々に施す方法であるといはれてゐる。

精神的又は道德的錯亂者、

精神孱弱者

殘忍性退化者、

先天性犯罪者、

先天性淫賣婦、

濟度し難い貧困者、

絶對に産兒を欲せざる者。

此の絶産法に二種四法あるやうである。即ち

- (一) 去勢法 (Castration) 此の方法は、昔から行はれたもので、現今家畜の雄動物に施されてゐる。即ち男子の睪丸を除去するのである。但し近時の動物試験及び人類の實驗によれば、それ等手術の結果は、性的衝動及び性的能力に影響を與へるといふ學説もある。それは睪丸より分泌するホルモンの發生を消失するために、男子の第二次性形質の形態的變化を生ずることは確である。此の方法は、凶悪なる犯罪者や、不治の色情狂者に對する適法と見られ、その手術の結果彼等は温順柔和化するのである。
- (二) 卵巢剔出法 (Oophorectomy) 之は男子の去勢法に相當する女子の卵巢を切り去る手術で、共に受胎すべき生殖細胞を除去する故、絶對に妊娠せぬ方法である。
- (三) 輸精管切斷又結紮法 (Vasectomy) 此の方法は睪丸は、そのままにして、單に精蟲の通路である。輸精管を切斷するか、又は結紮することによりて、精蟲の外出を全く遮斷防遏するるので、絶産の一方法である。此の手術の結果は、性的特徴に變化がないのみならず、却りて「若返り」を見るときいふ説である。
- (四) 輸卵管又喇叭管切斷法 (Salpingectomy) 之は前者に相當する女子側の方法である。共に割合簡單に行はるゝ手術のやうである。性的特徴にも影響がないが、月經はなくならぬといふのである。

- (ロ) 人工早産法 此の方法は、産兒制限の一方法には相違ないが、既述の如く、豫め受胎の防遏を主とする、所謂正當なる産兒制限の範圍内には屬しない。されども次に述べる避妊の方法が全く講せられないか、又は不完全のため偶々受胎せし際に、己むなく産科醫によりて行はるゝ手術である。

二 避妊法 此の方法は、早婚者にして、生活上教育上又は生理上より、殊更に受胎期を遅延せしむるため、或は健康上妊娠に堪へざるの故を以て、その健康の回復するまで妊娠を延期するための方法である。一時的な方法所謂避妊法であつて、今日の産兒制限論者の最も力説、優性學者の大に主張する簡易方法として知らるゝものである。それには四種の方法が提示されてゐる。

(イ) 物理學的方法

(ニ)(ハ)(ロ)
化學的方法
兩者の混用
生理學的方法

之等の方法は、絶對的效果の保證はないやうであるが、歐米に於ては専門家の智識以外に進んで一般の智識階級に常識化されてゐるやうに見える。従つて彼等の中教養の深い人々、富裕なる階級、政治家、法律家、牧師、醫師及び實業家の間には、何れも積極的に應用されて子女の數を二三人に限り、餘はすべて避妊してゐるやうである。之に反し下級貧民の階級にありては絶えてそれ等の智識なく、従て避妊の方法をも知らず、思慮足らずして自然に放任し、その結果自ら多産に苦しみ、以て種々厄介なる社會問題を惹起してゐるのである。そこに即ち産兒制限論者の努力が必要視される所以である。

處が右の方法は、教養の浅い思慮なき階級に於ける夫妻以外の人々によりて容易に誤用され、風紀紊亂の惡風をも助成するのである。産兒制限論者が他より攻撃されるのは全く斯の點である。然し該論者側より之を見れば、それは産兒制限そのもの、或は方法の非なるにあらずして、それ等悪用者の罪惡彼等自身の責任であるといふのである。さればこそ制限論者は一方に於て、

一般社會人に對する性教育の必要を高調するのであらう。現代日本の社會状態に鑑み、我が當局者は悪用弊害を顧慮するの餘り、敢てそれ等の方法を公にすることを禁じてゐるやうである。然し事實に於ては、前項の手術方法が可なり善惡兩方面に適用されてゐるやうにも見えるのである。斯の點は大に注目を要する點であらう。

要するに上述の如く、産兒制限と優性學とは互に呼應提携して、人種の改良を鼓吹高調するのである。従つて之等の高調者は個人的の勸告、限られたる講演、割合に便宜多き文書や書冊等凡ゆる手段によりて之を宣傳し、以てその主義精神を一般人に知悉せしめんとする理想を以て焦心努力しつゝある。斯くて彼等は産兒制限、即ち新マルサス主義により、新道徳を力説し、優性學方面よりして、或程度まで之を法律化せしめつゝあるのである。斯うした點に就ては、何事にも實行の先鞭をつける米國のことゝて久しき以前より、次の如き法律を實行し、違反者を體刑と罰金とによりて取扱ひつゝあるのである。(一九一四年内務省衛生局原氏報告)

コンネティカット州 一八九五年刑法を以て、癲癇及び精神耗弱者の結婚を禁じた。
オハイオ州 一九〇四年に、同じく法律を以て、精神病者白痴及び癲癇者の結婚を禁じた。
アリゾナ州 重罪犯人は出獄後といへども結婚禁止。

ヴァイスコンシン州 右と同様なる外に、精神病患者、精神耗弱者並に癲癇者の結婚禁止。
西ヴァージニア州 精神病患者に對して禁止。

デラウェア州、イリノイス州、メエン州、マサチューセッツ州、ネブラスカ州、ロードアイランド州及びワイオミン州 之等の諸州にては、精神病患者及び痴愚者に對して禁止。

カリフォルニア州 精神病患者、精神耗弱者、飲酒家、阿片嗜好者、並に麻痺作用を有する嗜好品攝取癖ある者に對して、結婚認可の際再調査を行ふことを規定した。

インディアナ州 精神耗弱者、癲癇病患者、常習性飲酒者、並にその他の麻酔性嗜好品攝取者及び傳染性疾患者の外に、最近五ヶ年以内に公設救貧院に在院せしものにも結婚を禁止し、一九一一年には、結婚希望の男子に、健康診断證明書を出させることを規定した。

カンサス州、ミネソタ州にては、精神病患者、精神耗弱者に對して禁止。

ニュージャルシー州、ノルス・ダコタ州 精神病患者、精神耗弱者、並に癲癇病患者に禁止。

ミシガン州 右の三病者の外に花柳病患者及び特に重罪犯人の禁止。

ワシントン州 にては、常習性飲酒者、常習性犯罪者、癲癇病患者、精神耗弱者、白癡、精神病患者、並に遺傳的精神病に罹りしことある者。病症進みたる肺結核患者、その他傳染性花柳病患者

者の結婚禁止。

以上は、十年以前の古い調査であるが、多分今日は更に多くの諸州が、一層病目を増して嚴重なる法律を制定したであらうと推察せられる。何となればかの大戰中に發布せる全國に亘る禁酒令の制定より見ても思ひ半ばに過ぎるであらう。斯うした法規の精神は、假令他に種々ある理由あるにせよ、優性學上の考察がその中に含まれたることは勿論である。

更に米國以外、歐洲の諸國にありても、米國程にこそなければ、これ等法律的制裁は相應に實現してゐるであらう。瑞典などは、既に一七五七年十一月二十五日の國王令によりて、癲癇病患者の結婚を禁じた位である。現時那威にては、花柳病を自覺しつゝ之を他に傳染せしめたる場合に、處刑する法律があるさうである。斯うした諸病と結婚との問題は、日本の社會道德並に法律の内容に、何れほどまで顧慮せられてゐるであらうか。歐米に比し被害程度の相違もあるだらうから、自然寛容の態度を取つてゐるのかも知れないと評する人士もある。

要之、優性學の原理適用を今日如何なる程度に於て、世界の文化國に宣傳普及せしむべきかに就て、當局者の一致すべしと思惟さるゝ點は、凡そ次の如くではなからうか。

一 花柳病（梅毒、麻疹、及び軟性下疳）患者の完全に治癒するまでの結婚禁止。

- 二 強度の精神病者、及び惡質遺傳性の罹病者に對する絶産。
- 三 不健康者又は貧民に對して、健康の回復又は生存の保證に達するまでの避妊(避妊は女子の五十歳位まで)
- 四 結婚希望者より健康診断證明書の提出。

右の中第一項の實行法としては、結婚者以外の性的行爲を絶對に禁遏すべしと唱ふる人々がある。勿論それは道德的教訓と宗教的信念とに依頼するの外はないのである。然るにその教訓及び信念は、崇高なる人格者又は敬虔なる僧侶牧師を通じて之を徹底せしむるか、或は自動的に特別な感激、又は修養悟得によりてのコンヴァルション(回心)のみが可能性を有するので、唯一場の教訓や、單なる説教では、之を現實にすることの極めて困難なる問題である。由來性的本能は、如何なる倫理的教訓も如何なる宗教的訓戒も之を統制し得ない程強烈であるといはれてゐるのである。そこで斯方面の社會學者ともいはるゝ人々は、花柳病の豫防又は驅除法として、衛生上の講話により科學的智識を與へ、一般人をして病毒猛烈の程度を知らしむるとか、斯病の巢窟とも見らるゝ、私娼或は公娼を嚴重に取締るとか、軍隊に對して、強制的に花柳病豫防法を實施するとか凡ゆる手段を講じ、尙それ以外に、一般の世人にも該豫防法を周知せしむるのみならず、産兒制限の知識と共に、早婚を奨勵するなど、種々の方法を唱へ、且つ實行せんとしてゐるのである。若し斯うした諸方法にし

て果して成功し、能率を擧げ得たとすれば、人類は肉體的、精神的將た道德的にも、更に經濟的にも顯著なる改善を見るに至り、社會は天國化淨土化して、そこに神佛の必要なしとやいはん、但しは神佛と同居すとやいはん、誠に望ましい理想郷の實現を來すのであらう。

優性學の骨子とも見るべき遺傳現象に對し、事實以上に之を過信する極論者がある。斯の種の論者は既に癩病や肺結核の非遺傳性なることの闡明された今日、尙依然としてその遺傳すべきを高唱し、又他の實際的遺傳病の害毒に對しても、事實以上に誇張して、非科學的に無智の人々を恐怖せしむるのみならず、喫煙に對しては、凡ゆる不道德、墮落乃至退化の原因を叫び、涓滴の飲酒も尙人類の呪ひの如く、之を以て凡ゆる害惡悲惨或は貧困の源泉と呼び劇場は肉慾の刺戟により、性的關係を誘致し、次で花柳病傳染の機會を與へ、遂に種族の退化滅亡を來す魔窟なりと稱し更に進んで、犯罪者、瘋癲者、微毒患者、退化者は勿論、無政府主義者、無神論者、自由戀愛論者、並に救恤を必要とする貧民に對して、ヴァセクトミー即ち輸精管の切斷、又は結紮の手術を實施すべしと叫ぶのである。之等の所説は、明かに極論の範疇に屬すべきものであらう。然し一面また興味なきにしもあらずである。

(六) 優性學に對する反對說

前述の如き極端論は、勿論眞理を思惟する基準にはならないが、茲に、正常と思はるゝ優性學に對しても尙反對說を唱へる人々がある。今それ等の人々の所說を綜合して見ると、凡そ次の如くである。

一 藝術家よりの反對說

それは特に戀愛主義者より來るものである。その説くところによれば、一體戀愛なるものは、至上至高の本能にして、その成立たる人心の極めてデリケートなる點に於てするのである。從て戀愛の對象者たる男女が、最初にかの優性學の主唱する如き健康診斷證明書を振り翳しつゝ、起ち上るものではないといふのである。否先づ醫師を介して疾病の有無を知り、然る後に戀愛、續いて結婚といふプログラムさへも、彼等の肯定を難んずるところであり場合によりては寧ろ却て病者に同情し爲に戀愛を結果するの稀れでないことを彼等は主張するのである。

斯うした説を、單に優性學のみにて批判し去ることは當を得ないと思ふ。故に後項に於て之を別な基準によりて解釋することにする。

二 絶産反對說

之は絶産の残忍で、且つ刑罰的手段であり、人類の神聖なる生殖作用に干渉するてふ權利の侵害であるといふ説である。優性學者の斯うした説に對するや、生殖作用の神聖は之を肯定するも、眞の人類種族の幸福を思慮し、種族繁榮の權利を尊重するがため、寧ろ目前の残忍を見逃かさんとするのである。況んや絶産法は既述の如く、方法極めて簡單にして、科學智識を有する者にとりては、決して残忍でないといふのである。

茲に絶産に對するもう一つの反對がある。それは、若し犯罪者、精神薄弱者に對して、絶産法を行はんか、性的衝動と性的活力を失はざる彼等は、妊娠受胎の危惧なきを悪用して、一層淫逸放縱に陥り、花柳病傳播の一大勢力を形成するに至るであらうといふのである。之は、至極尤もな有力説のやうであるが、斯道の權威者ロビンソン氏は之に答へて、「斯うした人々は、果して妊娠を恐れて、性的耽溺を慎しむやうなことがあり得ようか」といつてゐる。換言すれば彼等の性的行動は、絶産すると否とに頓着しない。それ故絶産して置けば、種族を絶つだけにも、大なる利益があるではないかといふのであらう。

三 産兒制限及び優性學は、量を主として質を輕視するとの反對說 此の説は、聊か前に述べしところである。抑、最初の産兒二三人を養育して、その後の受胎を避けるといふことは、所謂「總

領の甚六」(Alleged inferiority of the first born) を擇び、「末子の偉人天才」を放擲するもので、生物學上より見るも、身心の劣等者を保存し、種族の標準を低下せしむるものである。又優性學は肉體の完全健康を高調するも、不具者例へば侷僂短體にして稀有の科學的天才家なる英國のロバート・ブラウンの如きあり。神經衰弱者或は狂人に近い人、跛者、聾者、斜視者にして、天才詩人、大哲學者、大數學者がある。それ等の事實を無視して、動植物に對する原理を人類に適用することは不合理でないかといふのである。之に對する産兒制限並に優性學者の立場は次の如くである。即ち「甚六」説の如きは前述の如く、兩親の年少、換言すれば早婚の際に生まるゝ長子に多く見るので、相當なる年齢に達して、身心共に成熟せし兩親の所産ではない。又不具者不健全者の中に、割合天才的の人物を見るのも事實であるが、常態の健康者にも同様に天才的の人物があるのである。而して又優性學が充分注意を拂ふところの遺傳形質は勿論精神的形質をもその内容とするものであつて、身體の健康のみに局限されないが、然し天才や偉人の卓越性が次代に繼承さるゝことの極めて少ないといふことをも、不可思議なる事實として考察するのである。斯の點に就ては優性學が之に代つて説明を試みる場合がある。

右のやうに反對説があり、又その辨解説もある。前者は從來の習慣に捕はるゝ保守的消極的の見解と見做され、後者は新時代を解する進取的積極的の所論と稱せられる。更に又前者は古き倫理道徳に支配され、後者は新らき科學に根柢するとして甄別されてゐるのである。そのいづれをいづれとして是非の批判を下すべきかは改めて次章に述べようが、既述の通り産兒制限及び優性學は、相協力して完成さるべきものとせられ、それは二二が四といふ理智の方面を主とする科學説である。故にかの感情を以て充され往々理智を無視するが如き態度をとらんとする人々にとりてその實現は困難と見なければならぬ。然りとて感情を主とし理智を除外することは、人間として決して肯定し得る筈のものでない。故に之等の兩者を包容して假令人心の根柢とまでは行かないにしても、之をして或程度の深さまで到達せしめ、そこに情緒と理性との協調による兩性真理の或ものを助長完成することに於て、缺くべからざるものは蓋し性の教育ではあるまいか。

二、性 教 育

今日の兩性問題に就て、次の如く述べてゐる専門家がある。即ち「現代の性慾は、新時代の強度の影響を蒙りて、頗る危殆の狀況に瀕せり。恰もペスト菌の如く、頽敗と精神中毒とは全文明界に瀰蔓せり。實際生活と科學的努力の赫々たる成績との間に、不道德の地獄穴が穿たれ、爲すことも

なく眺め居る中に、意氣地なき人間はその中に陥るなり』(柳醫學博士著性慾研究より)と。この言たるやその書中に於ける前後の關係より之を察するに、歐洲大陸就中獨逸の社會を指してゐるやうに見える。然し英といひ、米といひ乃至日本に於ても大同小異であるかも知れない。若し果して然りとすれば、事態は極めて重大で或は之に由りて人類が滅亡するかも知れない。兎に角それは、現代性慾生活の暗黒面を摘發せる文字に相違なからうが、兩性問題の全部でないことは確である。故に吾々は、斯うした暗黒半面の事實に激勵され奮起一番光明の他半面を開拓せずにはゐられないのである。されどもその開拓の精神に、一段の勇氣を添へんがため、右の説を裏書すべき、幾つかの事實を擧げる。而してその開拓の方針を性の教育に取らうとするのである。

その事實の一つは、花柳病より來る家庭の悲劇である。我が國殊に都會生活の家庭に於ける主婦が夫の不品行より傳染する梅毒や、痲疾その他の惡疾によりて、如何に不具廢疾又は廣義の所謂婦人病てふ被害を受けつゝあるか、實に豫想外である。加之それ等が直接間接の動機となり原因となりて不和争闘を生じ果ては離婚となり、子女をして惡模範に直面せしめ、被害者は生涯の廢疾者となり、そこに家庭が完全に破壊されてゐる實例は、枚擧するに遑がないであらう。私の近所に左官やさんがある。その母親は盲目で、日々悲しい生涯を送つてゐる。聞くところによれば自分の夫か

ら傳染した梅毒(痲疾?)より來た盲目であつて、その多分梅毒の所有者なる夫は今、他の女子と何所かに別居してゐるといふことである。之は單に一例に過ぎない。他にも適確なる悲慘の實例を知つてゐるが、姑く避けて置かう。先づ社會の上下を通じて餘りに多い斯うした我が國の例證は、知らぬ顔をして先づ棚の上に存置し、歐米の文化先進國に就てその一二例をとることにする。

米國イリノイス大學のラチャル・エス・ヤロス博士の擧げてゐる一事例がある。それは何れも立派な家庭の出で、早くも高等學校時代から相愛の仲となつた夫婦の話である。彼等は近き將來の幸多き生活を夢み、只管その準備をしてゐたが、突然その婦人が入院することになつた。その際婦人が左の事實をヤロス博士に打明けた。

『私は、いつも元氣で、丈夫で一度も病氣や苦痛を味はつたことはありませんでした。私は殆ど夫と同じやうに、ボートを漕いだり山へ登つたり、遠足をすることができました。(序ながら夫は學校時代には非常な運動家でした)。私はまだ結婚して四ヶ月にしかありません。最初の月經期がすんだ後に、排尿の際何か少し苦しい氣持がしました。そして暫くたつと、下つて骨盤に苦痛を感じました。それから私はだん／＼悪くなつて、今では病人としてこゝへ來ねばならぬことになり、絶え間なき苦痛に普通の距離さへも歩くことができない有様です』

是に於て博士は診察の結果、子宮の兩側に大きな管狀の塊を發見した。彼女は手術を受けて、やがて二つの管狀物は取り去られた。それは著しく化膿してゐた。而して薄命なる彼女は四日後に遂に他界の人となつた。後に遺された哀れな夫は、自分の生命以上に愛してゐた戀妻を失ふて、今や落膽憔悴の極に達した。漸く常態に復したのは數ヶ月の後であつた。彼は嘗て何らの性教育も受けしことなく、十八歳にて始めて専門學校に入るや、たゞ／＼學友晚餐會の夜に、酒を飲み過ごし、大勢の仲間と一緒に、學校附近の淫賣屋に連れ行かれたのである。その時受けた痲毒が遂に彼の愛妻を殺す因をなしたことを彼はヤロス教授の面前で告白した。斯うした悲惨は、彼の性的不道德の結果でもあるが、一は家庭又は學校に於て性教育を施さなかつた缺陷ともいはねばなるまい。

次に、性教育を必要とする所以は世界文化國を擧げて、花柳病が十歳乃至二十歳の青少年男女間に、増加し來たためである。此の事實を非常に悲觀してゐる専門家が、内外少くないやうである。若しもそれが事實なりとすれば、私の年來主張してゐる、世界人類滅亡説が、裏書されてくることになる。兎に角現代の青、少年に、何れ程の斯病者があるかに就ては、後項に述べることとする。更に二十歳を越えた専門學校又は大學學生と、花柳病との關係に至りては、一層具體的に識者をして悲觀せしめるのである。此のことも後項に譲らうと思ふ。

要之、性教育者の主眼とする點は、先づ第一に、青、少年の男女に對して自然に生理的に來る性的知識を與へ、彼等をして恐怖すべき花柳病の害と、又自瀆の害とより免れしめ、圓滿なる結婚生活に至らしむるにある。それには一度斯病に冒されたものを驅除することよりも、寧ろその未だ冒されぬ以前の豫防を重要視するのである。斯うして先づ彼等を生理的に純潔に保つと同時に、家庭並に社會に於ける彼等の徳義を保護し、彼等をして將た精神的にも健全ならしめんがために、適當に之を補導するのである。

從來斯教育は、決して輕視されてはゐないが、然しいつれの國に於ても殆ど實行されてゐなかつたのである。寧ろ重大視されてゐたに拘らず、極めて不完全にその一部分を教へたに過ぎなかつたやうである。斯うした矛盾せる現象が永年繼續したといふことは、人類社會にとりて、誠に奇怪なる現象といはねばならない。然らば何故に斯くありしかとその真相を吟味するときに、その理由として第一に、性交及び生殖に對する根本的誤解、從つて第二には、生殖器に對する誤まれる觀念であつて、之等を單純化すれば、結局「性の存在」に對する眞意義の無理解に起因すると思ふ。(第五章の原及び進化第六章の兩性存在の意義參照)

性の起原及び兩性の進化が、計り知られぬ過去に開始されて、今日に至つたことを知り、又現時

の凡ゆる生物界に遍在する性の現象を見るときに、異性の存在、そこに性慾あり、従つてその性交生殖の、如何に自然にして、生物の生存並に人類生活の中心であるかを通観するとき、それ等の性慾及び性交の眞意義が、聊かなりとも諒解されると思ふ。斯うした深遠嚴肅なる意義を有する、生物界に於ける普遍的な重大現象に對して、人類が之を誤解し、そこに彼等が錯誤せる觀念を有するに至つた原因は、全く之等性的作用を淫樂罪惡視したことに在るのである。その點は野蠻人よりも却つて文明人に於て甚しきを見るのである。何となれば、前者は自然に支配されて、彼等の自然性を失はざるに反し、後者は前述せる如く自然を征服すると稱して、然かも之を征服し得ず、剩へ自然を忘れて、自ら不自然の環境を作り出せしところに、彼等にとりて重要な性的作用を、淫樂罪惡德視するに至つた因縁があるのである。故を以つて性教育の主眼點として先づこゝにスタートを取らねばならない。即ち

- 一 積極的には、性慾及び性的生活は、決して淫樂罪惡にあらずして、眞面目なる生物の自然的及び生理的欲求として必要なることより、
- 二 消極的方面にては自瀆及び花柳病等に對する智識を與へること、
- 三 同時に、それ等を精神的に補導することである。

最も適當なる性の教育者は、兩親殊に母親と、學校教師及び専門家であらう。従つて之を教むべき場所は、家庭と、學校とを最良の場所とし他は講演會や、雜誌著書によりて行はるべきものであると思ふ。

性教育を高調する人々の、殆ど一致是認する被教育者の年齢は、幼兒時代の二三歳より始めて、十五六歳までたるべく、その後の教育は殆ど困難であるといふのである。換言すれば、家庭と小學校、及び中學校に於て、充分に教育すれば、その後は性に關する正しい智識を與へて、自由教育に任かすべきものであるといふ意味である。このことは、次の如き性慾發達の順序から主として打算されるのである。

性慾の發達三期(マックス・テックナー氏)

- 第一、中性期……幼年時代
- 第二、無差別期……幼青年時代
- 第三、差別期……青壯年及び老年時代

第一の中性期は幼少時代で、心理的性慾作用の起らぬ時代であるが。事々物々に對して疑問を發し、質問する時代でもあり、その質問中には必ず植物や動物、乃至人間の性に關するものを包容す

るので之を適當に補導することの困難を感じるそれだけ、性教育の基調を成す重要な時代である。

第三の差別期は、性慾の方向が普通の常態、所謂異性に向けらるゝ差別期である。此の期間は性慾が、漸次減退して、遂に全滅することに至るまで繼續するのである。

以上の中間なる第二期は、性慾の無差別期で、性慾の發動する結果その愛すべき對象は男女を差別しない。同性愛の生ずるのは、此の期に於て極めて普通のことである。或は教師を愛し、或は友人を愛するなど様々である。斯うして後には、常態に復して、茲に第三期の専ら異性愛に移るのである。然し此の第二期にも勿論異性に對しても愛情を起し得るのであつて、その愛たる同性にもせよ異性にもせよ、肉體上の活動を誘發する機会が多い。されどその活動は生殖器官に現はれることは極めて稀で、通常接觸擁抱又は接吻の形式によりて現はれるものと見らるゝのである。

尙又此の第二期には、同性愛即ち性慾倒錯症に陥る傾向あるのみならず、他の惡傾向を有する感情の現はれる場合がある。性的狂崇 (Fetichismus)、殘忍性色情 (Sadismus)、及び被殘忍性色情 (Masochismus) などに類似した亢奮が起り、又對動物性感情の現はれることもあり、その他混亂せる觀念が相連關して、愛する者の唾液、吐寫物乃至排泄物などに對して、種々なる態度をとるものもあるが、奇體なことには、その成人後には殆ど之等のすべてを忘れて了ふということである。

凡そ此の期の重大視さるゝ所以は、上述の如くにして茲に見遁す可らざる尙一つの肝要なる理由がある。それは、此の時期に起る惡癖中に、先天的にして、到序矯正可能の範圍ならずと思はるゝものゝ存在である。然しそれ等の惡癖と思はれたるものも、此の時期の經過すると共にいつしか消失して了ふのである。然るにこれをも知らずして一途に強厭的感化矯正を試みようとするのは、兒童に對して寧ろ酷なやり方で、常に良結果を得られざるのみならず、却て彼等をして猜疑心深き偏屈者たらしめ、種々極端なる状態に陥るところの惡結果を來すものである。されば斯うした兒童の親たり、教師たる者は、宜しく自然にその時期の過ぎ去るを待ちつゝ、穩和なる方法を以て兒童を補導すべきである。

借無差別期の始まる年齢は、必ずしも一定しないが、通常十歳前後で、その終る時期は、大抵十六七歳といはるのである。而して此の期の終りには、男女兒共に著しい變化が、身體の上にも起るのである。男兒なれば髭鬚の發生、喉頭の増大、睪丸その他生殖器の迅速發育など、又女兒なれば胸廓、骨盤の形成が、次第に女性の特徴を現はし、卵熟して月經を開始する。之等は男女の春情

發動期、或は思春期の現象と稱せらるゝのである。斯うした特徴は主として、精巢即ち睪丸、又は卵巢より分泌するホルモンの影響であることは、近代生理學の發見である。生物學上の第二次性形質と稱するものは、それ等の特徴をいふのである。

此の思春期には、精神上的の發達も亦著しいのである。内部に堆積せる活動氣分は、外部に展開して青少年の旅行、冒險、幻想的企圖となり、宗教運動又は文學結社、或は社會運動等に參加するなど、生涯中最も勇氣の充溢せると共に最も危険なる時期である。凡て青少年の憂鬱に陥り、哲學宗教書の耽讀或は家庭出奔となり、又は放浪生活を開始するが如きも皆此の時である。女子の方には、從來不明瞭なりし想像は化して明白となり、羞恥心は極度に達し、第二期に存在せる粗野なる舉動や觀念は全く消滅するに至るのである。

以上の如く、思春期に於ける精神的の變化現象の殆ど大部分は、前述の第二次性形質と共に、生殖腺（即ち睪丸又は卵巢）その他の内分泌、即ちホルモンに由來するものと知らるゝのである。

性教育の最も大切なる時期は、實に此思春期以後よりも寧ろ以前にあり、即ち第一期の初より開始して、適當に補導すれば、此の危険なる思春期を、安全に通過せしむることが可能であり、然かも道德的に、將た生理的に身心の純潔を保持して結婚生活に到達し得ることは、獨り性教育がある

のみであるといふのである。

要するに性教育は、家庭と學校、その中にも特に家庭に於ける重要問題である。その意味に於て家庭は節操道義の養成所であり保護所であり、又健全なる社會國家の建設製圖所である。故に家庭の一興一廢は實に社會國家の安危、人道の盛衰を支配するものである。斯うした意義内容を以て之を見るときに、現代文化國の家庭は、果して如何なる事實の反映を吾人に示してゐるであらうか。これ即ち女性否な母性の責任の重大なる所以であらう。此の點に於て勿論父性も協同の責任ありとはいへ賦性の實質上、到底母性に比すべきではない。

然らば家庭及び學校に於て、如何なる要項を被教育者なる青少年に教ゆべきかといふことは、次に考慮すべき問題である。それに就いて先づ教へらるべき、彼等青少年間の實狀と、その傾向とを知ることが、即ち斯教育者に對し勇氣づける所以なる故に、左に性教育の不完全、又は皆無が齎らした、諸外國青少年の惡徳狀況を示せる數人の統計調査を擧げる。

(一) 自瀆行爲者 (青少年者中の百分比例)

ロシヤ

六〇% (マイロウスキー調)

獨逸ミンヘン

九二% (マルキエー)

同 プレスロウ 九九% (コーン教授)

匈牙利國ブダベスト 九九・七% (ドイッツ博士)

此の内

十一歳の少年 三六・二%

十二歳の少年 二七%

九歳の少年 二%

米國 一〇〇% (尿學者ヤング調)

尙ドクトル・ヘルマン・ローレデルは、彼の調査にかゝる、多くの材料より結論するところによれば、凡ゆる男女學生の九〇%、即ち百人中の九十人までは自瀆行爲者であるといふのである。

(二) 自瀆行爲より性交へ轉換する年齢は、大體十六歳であるとの統計事實がある(マイロウ)。

又以上に次いで、學生間に擴在する事實は、彼等の不道德なる性交より結果する、次項の如き惡質罹病者の多いことである。

(三) 花柳病患者

埃國ブラーグ中學生二千七百九名中の二百九十五名、即ち八%は在校中斯病に感染してゐた。

(ドクトル・ヘヒト調)

同國の、一般花柳病患者總數の半分、即ち五〇%は年少學生である。(ドクトル・レマックス)

同國首府ウインの、高等學校に於ける同患者生徒の六〇—七〇%は、賣淫婦より傳染せし斯病患者である。(同)

尙他の統計調査の諸報告を綜合すれば、年少者の花柳病患者數は、著しく増加する傾向があるといふのである。之等は、青少年學生であるが、大學生に至りては一層その數を増してゐるのである。

獨逸學生の五萬人中の、一萬二千名即ち二五%、換言すれば四人に一人が、花柳病患者であるといふ。(アラシニコフの統計)

實に驚くべき數である。彼等の多くは、飲酒の媒介にて、賣淫婦より傳染するものである。元來飲酒は、成人の生殖器官殊に胚種細胞を害し、且つ受胎後に、卵細胞に於ける核分裂の過程に於て、その活力を弱くするのである。此の點に就て有名なる性學者フォーレルは、「酒類は胚種を破壊する」といつてゐる。尙又ドクトル・ベツォラは、「兩親に於ける一滴の酒は、その子供の一滴の愚に相當する」というて、酒害を専門家の立場から説いてゐる。

そこで、家庭に於ける性教育の要項は、

- 一、教訓……性慾の意義、發現、誘惑、抑制等に關する衛生生理並に道德上の智識を用ひて、親切に教訓すべきである。斯くして男女共に、結婚期までの性慾抑制は可能にして、又斯うした結果は生理上も利こそあれ決して害はない。
- 二、飲食物……酒、珈琲、茶、その他の飲食物中の刺激物は、徒に性慾を増進せしむるの害あるを以て、全然之等を避けしむること。
- 三、服装……成るだけゆるやかなる服装を主とすべく、殊に性器官に接觸する部分に於て然り。
- 四、遊戯及び運動……諸種の遊戯運動を、奨勵するをよしとするも、女子に對して自轉車及び乗馬等は宜しくない。
- 五、健全なる讀書。
- 六、劇場又は活動寫真に充分注意すること。特別有益なるものゝ外は、之を避けしむること。
- 七、野外にての自然教育……之は生理學、動植物學などの智識を消化してゐる兩親にあらざれば、困難なる場合がある。連發する幼兒の質問には科學者といへども閉口する。兎に角動物の性に關する質疑に就ては、學校教育と共にその目的を貫徹すべきである。されども生理

博物學者にあらざる兩親は、知りてゐることゝ、知らぬことゝを明別して、兒女の質問に答へることが極めて肝心のことである。

- 八、交友に注意すること。
- 九、金錢の使用を限定すること。

一〇、意志の養成……之は容易ではなからうか、さりとて至難でもなからう。現代文化國の弊は、情と智とに偏して、實に意志教育の缺陷に在るのである。若し此の缺陷に對して何等の方策を講せずしてこのまゝに放任せんか、文明は恐らく没落の歸結に向つて急轉直下するであらう。

尙十歳前後に於ける自瀆行爲者を見出したるときは、之に對して體罰が有效であるといふ説がある。

以上の諸項を、家庭に於ける兩親、殊に母親が充分に之を諒解して、各子女の個性とその發達の程度に細密の注意を拂ひ、常にその將に起らんとする害の機先を制して、善處實行すべきものである。

次には學校に於ける性教育の要項と教授法である。學校は家庭と違つて、組織だつてゐる機關で

ある。それだけ教育者に、懇篤と熱心とさへあれば、家庭に比して兩親ほどに兒童の個性を知らな
いとしても極めて都合のよいことが多いやうに思はれる。先づその要項としては

一 自然界に於ける性の教育……植物の花粉交配作用動物の生殖作用より、性現象の自然にして
生理的必要なること、並に生物の生活に缺くべからざることを教へる。

二、人間の生理的發育の大體 之は生理教授の際に教授すること。

三、性慾の具體的教育

積極的方面

(イ) 精子及び卵子の形成

(ロ) 受胎現象と生殖

(ハ) 遺精と月經

(ニ) 結婚の意義と戀愛問題

(ホ) 家庭と育児

消極的方面

(イ) 自瀆の本質、その害及び豫防

(ロ) 花柳病(梅毒、麻疹、軟性下疳)の害毒と傳染の徑路

(ハ) 酒精その他の刺激と性慾亢進

(ニ) 性慾を中心とする犯罪

以上は、生理學教授の際、又は學校醫その他専門家の特別講演によりて教育すること。

四 男女の貞操と純潔 之は科學上並に道德の方面より、人格の問題として嚴肅に教授すること。

右に掲げたることを以て、大體學校内に於ける性教育の要項とする。之等を教授するに、學校
は都合よき凡ゆる機會を有するのである。前述の如く、各教師に懇篤と同情と熱心とさへありて一
致の行動を取るならば、性教育の實際は、大部分成功すると思ふ。學校の中にて、殊に斯教育の基
礎的位置を占むるものは勿論小學校である。小學校の生徒が教師の權威を能く認めて之に従順なる
點は、多くの場合家庭のそれに勝るのである。性教育は獨り理科や家政、修身倫理教授の際のみ
ならず、地理歴史は勿論、法制經濟、哲學文學藝術其他種々の學科を教授するときにも、之を施
し得るのである。元來斯うした種類の教育の能率は、單に説明や知識の敷衍に止まらずして、教授
者自身の人格反映を要求するものなれば、此の意味に於て常にそれ等の關係學科に止まらず、數學
又は習字などの凡ゆる教授者によりて、能率の増進さるべき問題であると思ふ。

教授の精神としては、第一に科學的態度をとりて、事實を鮮明にし、次には絶えず人格的權威を背景として之に臨むことが肝要である。斯くするときには教育者と被教育との間に、興味を惹起して共鳴することが、多いと思はるゝのである。

先づ我が國の小學校にては、道徳を背景とし、理科の自然知識によりて、性教育の基礎を養成し、その最上級に進む頃、自瀆を嚴重に訓戒し、卒業の間際には稍具體的に、花柳病を中心とする大體の知識を與へて、人格的に結論する位にし、然もそれ等の教授上別に、男女の區別を要しないと思ふ。更に中等學校となれば、初年級に植物、二年級に動物、三年級に生理科あるを以て、それ等の學科と前述の諸學科との中に、性教育の要項を織り込めば、小學校より一層組織的なるを得。従つて理智と情緒との調和を思惟し、理性をガイドとして理想に近く補導することが出来ると思ふ。斯くて中等學校に於て、自瀆花柳病に對する知識を更に適確に與へると同時に、身心に於ける貞操純潔の觀念を、人格的に打ち込み、一面運動遊戲武術等を奨励するならば、必ず確實なる何らかの良結果を見るに至るであらうと思はれる。

それより更に進んで、専門學校生、大學生となりては、最早性教育者の努力は如何かと思はれる。斯うした程度の學生には、寧ろ彼等をして性教育に關する適確なる知識と、哲學的思索と藝術美の

眞髓と道徳的觀念に直面せしめ以て宗教的に之を回心 (Convert) させ、そこに我等人間としての眞價値を認識せしむる外、恐らくは他に補導の道はなからう。是に於てか歸着するところは補導者の責任、即ち人格問題となるのである。

要之、性教育の目的とするところは、性に對する生物學的自然的解釋と、兩性間に存する社會的任務と、及び男女相互の道徳とを教へて、之を善導し、彼等青少年をして個人的に將た社會的に、性に關する健全なる理想の基準を、案出せしむるやう彼等を補導するにある。下は小學校より上は大學に至るまで、凡ての機關を通じて、補導者が常に學生生徒に對し個人的に自由なる相談の機會を與ふるの極あて、肝要なることは言はずもがなである。

第十一章 總結論

一 兩性の存在は普遍的自然現象(四八〇)……………二 人類の過去を知らんとする生物學(四八一)……………三 兩性存在と戀愛(四八一)……………戀愛と生殖は不可分離(四八一)……………情死否定(四八一)……………四 生殖の本質は新個體を生ずるにあり(四八二)……………雌雄は異なる方面に分化し特化せり(四八二)……………生殖の起原は無性より有性へ(四八二)……………人為單爲生殖の興味(四八二)……………生殖は家庭の眞因(四八二)……………五 兩性の起原は單細胞時代の大小差(四八三)……………兩性差の起原は母性の起原(四八三)……………生殖細胞と體細胞との分化(四八三)……………體細胞は生殖細胞の擁護者(四八三)……………女性は平和の維持者(四八三)……………六 兩性の異同(四八四)……………最下等生物は同等なり(四八四)……………無脊椎動物の低位のものも亦然り(四八四)……………鳥類と哺乳類にては雄が大なり(四八四)……………雌雄の選擇(四八四)……………男女は生物學上根本的に無差別なり(四八四)……………男女の差即ち第二次以下の性形質はホルモンによる(四八四)……………男女は同權であり分業でありて本質の差はない(四八九)……………生殖器の除去試験(四八七)……………七 生殖の本質は受精なり(四八八)……………受精遂行と形態習性(四八八)……………科學と戀愛の盲目(四八八)……………兩性存在の意義は生命の持續と擁護(四八八)……………雌雄と分業的補足(四八九)……………八 性の決定と細胞核質(四八九)……………男女の性はチャンスで定まる(四八九)……………性の決定は卵又は精蟲の内部事情による(四九〇)……………九 遺傳と兩性(四九〇)……………一〇 戀愛と結婚(四九一)……………生物は生理的に人類はそれに心理的(四九一)……………結婚は一夫一婦制度(四九一)……………眞の戀愛は神愛に向する(四九一)……………戀愛は生涯的結婚を要求する(四九一)……………離婚は異常なる結婚生活の岐路(四九二)……………一 科學と藝術より見たる戀愛の容積(四九三)……………文化と自然性の反比例(四九四)……………自覺は人類の一大特徴(四九四)……………良心(四九四)……………神の發見と人生の基調安定(四九四)……………自然主義の性慾觀と罪惡感の發生(四九六)……………戀愛の至上と性慾の神聖(四九八)……………二 左近教授の性慾觀(四九八)……………兩性の由來起原と壯嚴の感(五〇〇)……………三 獨身生活産兒制限人種改良及び性教育の基準(五〇〇)……………凡ゆる中心は神にあり基督と兩性問題解決(五〇二)……………神によりてのみ斯問題は正しく解決せらる(五〇三)……………四 兩性問題と生物學の歸結(五〇三)

以上論述するところ十章四七八頁に亘り「兩性問題と生物學」の題目に、兩性問題を中心としての生物學的考察を試み來りて今茲にその歸結に當面するのである。

第一章に於ては、現代社會の戀愛問題を摘出し、併せて日本歴史に於ける文化の開展と、兩性問題との交渉に就いて述ぶるあり、更に世界文化に於ける斯問題の接觸を簡説して、即ち異性問題の殊に重要にして興味あるものなることを、極めて常識的に指摘し世人の注意を喚起したに過ぎない。

第二章に入つて、生物生活に關する、凡ゆる問題の基調を成す生物進化の梗概を最も簡略に述べ、更に第三章に進んで、漸く説きて生物生活の二大特徴に及び、その一つなる種族の維持に至りて、初めて兩性問題の基準に觸接し、第四章より第六章に至る三章に於て、兩性問題の根本由來に就いて生物學上より之を詳述し、第七章に及んで、常識と科學との兩方面よりして、古來最も人々の注意を惹ける興味深き一大問題なる性の決定を、各種の觀察及び實驗と、學說とによりて多様に縷説したのである。

第八章には、兩性關係の遺傳問題を掲げて、茲に前章までに於ける純正科學ピュアサイエンスの立場を離れ、人類生活の生物學的應用の範圍に入り、それより第九章結婚と戀愛なる主題の下に、人類界に於ける古今文野の異性愛に就き、尤濃厚に論述するところあり、遂に第十章即ち前章に到達して茲に現代社會に於ける、兩性關係の主要問題二三を取扱ひ、以て常識界と科學智識界との交渉を縷説したのである。而して大體に於て、各章毎に個々の結論、又は批判を試みた。斯くて今改めて全部の總勘定即大結論を試みねばならない場合に際會したのである。

依て次の十五項に概括して簡潔に之を結論しよう。

一、兩性の存在は、生物界に於ける普遍的の事實にして、斯うした自然界の現象ありてこそ、そこ

に生物の永續存在を見るのである。人類亦然りである。

二、生物進化の項點に到達せる、人類現下の自然現象は、即ち人類の原始的過去の時代に由來し、更に溯りて動物の時代あり。かく次第に追窮するとき遂に最下等なる生物時代に起原せしことを推定し得るのである。故にその過去に於ける人類の状態を知らんがためには、人類に比して進化速度の遅かりし、現在の高等諸動物並に一層遅かりし下等の動植物、及びその最も遅々たりしもの、即ち人類の生物的起原の當時に髣髴たる、今日の最下等生物之等の凡てに於ける自然現象に據りて之を考察せねばならない。蓋し之は生物學の採るべき主要なる手段である。

三、兩性存在の意義は、即ち生物界に於て種族の維持を結果すべき須要なる生殖の問題である。斯の自然現象が、永き生物進化の開展を過程として人類に至り、更に現代文化人に及んで、最頂點と思惟さるゝ程度にまで到達したのである。而してその生殖動機レの賦彩されたものは、即ち戀愛とふ異性愛である。されば戀愛は如何に藝術家によりて賦彩さるゝにしても、到底性交と沒交渉なることは出来ない。換言すれば戀愛は假令心理化され人格化されて、至上至高とたゞへられ、神聖視さるゝことがあつても、苟くも生理的生殖を超越し之を分離するときは全く異性愛の本質を無視し兩性存在の意義を失ふものである。斯うした意味からも情死を否定する。何となれば情死

は、非生物學的行爲であるからである。即ち種族（人類にては家庭關係）を無視せる當事者のみの利己的狂態であるからである。

四、生殖の本質は、新たな個體を生ずることである。生殖には有性無性の別あるも、共に生理的に密接なる關係を有し、それ等の結果は何れも同様である。生殖の種類を細別すれば、實に多様なりと雖も要するに生物の高等なるに従ひ、雌雄即ち有性生殖に分化し、動物に至るに及んで特に進化して雌雄異體の有性生殖となり、従つてそれ等の兩性器官も亦分化し、生殖細胞の著しく特化せし傾向を見るのである。

抑生殖の起原より之を見れば、無性生殖が原始であつて、有性生殖は寧ろ第二次的のものと思はれる。後者は生物に對して變異を多生し、進化を複雑多様ならしめた事實を見せてゐる。

人工單爲生殖は、受精作用を或程度まで物理化學的に解釋し、精蟲の本質を唯物的に説明せんとする傾向がある。それに關する實驗としては今のところ蛙まで成功してゐる。若し將來の實驗が温血動物にまで及ぶときは、單に科學的のみならず、哲學的宗教的、並に社會的に、極めて大なる注意と興味とを喚起することになるであらう。

要するに、生殖は人類家庭生活成立の眞因と見らるゝのである。

五、兩性の起原は、生物學的に之を見れば單細胞生物の時代であらう。最初の兩性細胞は、獨形態的のみならず生理的作用に於てもその差なく、第二次となりて、始て僅少なる形態的差別を見るに至つたのである。即ち雌細胞は、雄細胞に比して稍々大形である。斯うした大小差は、生物の進化と共に次第にその程度を増加せし傾向を認め得るのである。

形態的兩性差の起原は、そのまゝ母性の起原と見らるゝのである。即ち大形にして、比較的活動性の減じたる雌細胞個體は、即ち小形なる活動性の雄細胞を包容（受精）して、新らしき個體を形成するところの母性の本體である。斯うした生物の不等より高等へと、漸次系統的發生の現象を見るときに、その初單細胞の生物體が、原始的の多細胞生物體に進化し、そこに初めて生殖細胞と體細胞との分化を生じ（群棲原生動物）、體細胞は生殖細胞の擁護者となり、斯くて生物殊に動物の進化すると共に、生物の個體は身體の大部分を構成する體細胞によりて代表され、一方の生殖細胞は、體內深く安全なる小區域を求めてそこに居を占むるに至りしことを明かにし得るのである。而して大形なる生殖細胞の持主は、全生物界を通じて雌性體にして、人類なれば女性即ち母性の特權者である。さうした母性を専有する女性は、生物界を通じて受動的であり、保守的であり靜止性を有し、平和の維持者である。

六、兩性の異同は、最下等生物に於ては認められず、漸次高等に進むに従つて、その差を明かにするものであるが、然らざるものも少くないのである。その形態的差あるものを檢するに、無脊椎動物にありては、概して雌は雄よりも大形である。又脊椎動物の下位にある魚類、兩棲類及び爬虫類の如きも同様に雌の方が大きい。然るに鳥類並に哺乳類に至りては、これに反して雄性が大形である。今その理由を求むるに全く種族の生存上雄動物の奮闘活躍を要すること多きためであらう。斯うした奮闘の中には、雌雄の選擇淘汰も、或程度に於て行はるゝものと見らるゝのである。人類に於ても手近 (Propinquity) な範圍内に於てそれを見るのである。

兩性の異同を吟味するときに、生物の系統的 (Phylogenetic) 並に個體發生的 (Ontogenetic) 起原に於て、その差を見出すことが、生物學上殆ど全く不可能である。換言すれば、男女は根本的に無差別に見ゆるのである。更に詳言すれば、生物の原始時代と、最も進化せる人類の第一次的性形質の差を示すところの卵及び精蟲の原細胞とに於て、兩性が殆ど全く相等しいといふのである。然るに生物が高等に進化するやその兩性殊に人類の男女が、その發育と共に、形態並に習性の上に著しき差を示すに至るのは、第二次 (或は第三、第四次) 性形質の差にして、それは卵巢又は精巢より分泌するホルモンに起因するものである。之を以て觀れば兩性は根本的本質に於

て殆ど全く同等なるものが、生物の生活上進化の過程に於て、分化し特化して二方面に展開し、その結果各自にその特徴を發揮するに至つたのである。そこに生物生活の全體完成は、即ち雌雄兩者の生活の合計に由ることとなつた。換言すれば、人類生活その者は、男女兩性の特徴を自然に自由に、而して公平に合理的に、且理想的に發揮せる總和である。男女は人生に直面しては全く同權である。家庭に於て又國家社會に對して然り。されども男女各そのとる可き道は、猶その身體と精神とに於て、兩者の異なるが如く亦異ならざるを得ない。簡言すれば、男女の生活は分業であつて、その分業の象徴なる量と質とに於てこそ異同はあれ、その本質に於ては毫も差異のあるべき筈はないといふのである。

斯うした意味に於て、男性は何處までも男性、女性は何處までも女性である。女性は、過去の動物進化史殊に人類史に於て、男性ほどその特徴を發揮する機會はなかつた。否な今日よりして之を見れば、男權が過重視され、その結果女權が壓迫されてゐたのである。幸に近時盛んに、女性の解放、女性の覺醒が唱道されて、將に女性形質の眞の發展を見るに至らんとしてゐる。既に歐米の社會に於ては、女權が着々と擴充され特に大戰後に於て然りである。斯くして政治的に社會的にその他各方面に世界の狀態はより美くなるであらう。されども之は女性が社會の凡ゆる方面に、

全然男性と同様なる思慮を以て同様なる作業をなすといふことではない。男性が若し著しく墮落して、人生を無意義にし社會を地獄化する場合はいざ知らず、然らざる限りは、女性が政路に立ちて、一國の首相となるか、又は銃劔をとりて哨兵の任務に當るとか、或は飛行機に乗りて空中より爆彈を投ずるとかいふが如きことは、決して生物學上女性の本質ではない。假りに若しさることありとすれば、それは卵巢を有する男性であらう。英國の一權威者がいつた、「古典的文明の没落は、女性を發展せしむるに失敗したからである」と。それは生物學上からも眞理である。唯生物學の指摘警告するところは、宜しく男女の異同を明別して之を混同せしめない點にある。

(第五章第(三項参照))。即ち生物系統史に於ける最後の頁を飾りつゝある人類の兩性は、その形態方面に於ては、文化人よりも未開人更に野蠻人種に至る程、男性身體の發育が女性に比して偉大なる點は他の哺乳類に等しく(第百三十一圖)、習性殊に精神的方面に於ては敢て文野を問はず、女性は求心性にして男性は遠心性である。女性は平和の維持者なるのみならず凡ゆる愛の擁護者、否その愛そのものの象徴である。それは眞の戀愛に於て然り、夫婦愛母性愛並に人類愛に於て亦さうである。而してそれ等の愛の内容が絶えず溢れて、具體的に表現されては肉體美となり、裝飾美となり、又動作美表情美となりて男女求愛の原動力イシメカス又は中心となる。之等の女性美は、文化の向上に

伴うて進化せる女性の賦性である (第百三十一圖)。(第百三十二圖)。若し女性が斯うした賦性を失うとき最早女性ではないのである。その賦性を具備してゐるこに男性になき女性獨特の情緒を見出すのである。

濠州土人の王と王后



濠州プリンス・ガヴ・ウェールス島の王 (Geodah) と王后 (Gonah)

第百三十一圖

近世生物學上に於ける生殖器官の除去、又は交換移植の動物試験は、能く右の如き説明に唯物科學的考察の基準となるべき好材料を供給しつゝあるのである。

尙人類に於ける兩性異同の進化開展の一面は理智的方面である。男女の理智は、蠻人並に未開人種間にありてその差の著しきを見るも、文化人殊に現代人に於て理智發達の接近

するを認むるのである。それは近代教育の然らしむるところ、又女性に對する他の社會的環境の變化によるのであらう。要するに男女兩性の家庭及び社會に於ける活動機會の均等により、女性

に於ける理智的賦性の自由に展開せられし結果に外ならない。佛國のラディウム權威者キュリー夫妻の如き科學の方面に於ける著例である。けれども女性は如何に解放され男性に等しき機會を與へらるゝも、今日のところ女性の發展が、その最大限度に於て到底男性に及ばざるが如き事實の多きことを見るのである。哲學科學文學藝術等の各方面に於て然り。然れども又女性は道德の實現並に宗教信仰の方面に於て、男性を凌駕するの現象は極めて明瞭なる事實である。之等の事實は、能く男女兩性の異なる又異なるべき筈の賦性あることを裏書するものに外ならない。

七、既述の如く兩性存在の意義は生殖にあつて生殖の本質は受精にある。生物は受精を遂行せんがために、千差萬別の形態と習性とを示現してゐる。卵子が精子を吸引する原動力に就ては、一二の植物（羊齒及び石松）に見らるゝ外、今日の科學は全く盲目である。斯うした盲目不可知の圈内に恐らく戀愛の遠因も存在するであらう。

要するに兩性存在の意義は、受精の結果による左の諸點に歸するのである。

- (一) 生物生命の持續、
- (二) その持續には量よりも質を主とする。
- (三) その意味に於て、兩性存在の意義は、單に生殖にあらずして寧ろ生物生命の擁護である。

圖二十三第



女嫁の鮮朝



人婦(Lendu) - ウテンレの加利弗亞るたひ負を子受



アヒラア
人婦亞比刺亞



ドンライゼーゴニ
(Maori) リカマ人士蘭西新
裝正の人婦

圖三十三第



—エウルフ
子女威那のひ装嫁花



—コルト
装服内屋の人婦共耳土



人美の國英



—ヤシルベ
女淑の斯波

(四) 受精、即ち母性なる保守的遺傳性の卵子と、父性なる變異性の精子との合一によりて生物の進化を展開する。

(五) 斯くて兩性の存在は、雌雄の異同優劣を意味するものにあらずして、全く生物生活の分業的相互補足の意義に外ならない。

八、性の決定即ち受精卵は如何にして、雌性となり又は雄性に發育するかに就ては、第七章に説述せし如く、有力なる一説としては細胞染色體 (Chromosome) の質又は量に於ける差が、その雌雄別の動機を與へるといふもその生理學上の詳細に至ては未可解の作用なりといふのである。例へば人類にありても精蟲に二種あり、一は二十四個の染色體を有し他は二十三個を有するか、又は共に數に於ては二十四個づゝを有するも、その中の一個がXとY染色體の差ありて若し前者が卵に合一すれば、受精卵は女性體に發育し、後者なれば男性體を生ずると説くのである。

斯うした性決定説は、其の事實を多數の生物殊に動物に發見してゐるが、他に未發見のもの多く、又全く發見せられない生物種類もある。兎に角人類に於て右の説が果して事實なりとすれば、男女のいづれが生ずるかは、その二種精蟲のいづれが卵子を受精せしむるかによりて決するので、それは全くチャンスである。故に決して兩親の意志などに支配さるゝことではない。而して雄性

の受精卵が、雌性のよりも一個の染色體を不足せるまゝに或は雌性に比して小形なる一染色體を有して、生長發達せるものが即ち男子である。而して斯の男子が家庭又は國家社會に於て種々なる暴威を見せてゐるといふのは、人格上に於ても染色體の方面から見ても何かそこに缺陷を來したのではなからうか。然らばといふて女性は、完全無缺の女王であるかといふに、是れ亦決してさうであるとはいはれないやうである。

要之、性の決定は、生殖細胞即ち卵又は精蟲の内部そのものに、雌雄性の元素或は單位があるのではなく、唯雌雄となるべき潜在性を有し、雌雄のいづれにもならず平衡を支持してをるのである。その平衡を或未知の内部關係、即ち事情(Conditions)が影響支配して、雌雄の何れかに決定するものであらうといはるのである。而してその事情が、(一)卵に存在して雄蟲に決定さるゝものは、蜜蜂などの受精せざる卵に於て之を見、又雌蟲に決定さるゝものは、蚜蟲の夏期卵に於て之を見るのである。同様なる事情が、(二)精蟲にあるものは、昆蟲の半翅類「かめむし」、その他哺乳類の人類などである。而して又(三)受精によりてその事情の生ずるものは、蜜蜂などの雌蟲が即ちそれである。斯うした事情は生物の種類によりて異なるといふのである。

九、遺傳と變異とは、生物進化の主要なる基準であるが、特にその形質を雌雄のいづれかゞ繼承し

て、次代に遺傳する場合がある。例へば人類に於て知らるゝ、生理的又は病理的形質が女性又は男性によりて遺傳さるゝ如きはそれである(第八章)。

一〇、性的衝動、性慾、生殖、それに次で、異性愛と戀愛及び結婚と離婚、之等は互に連關せる兩性間の現象であつて、生物の大部分は前半の生殖までに終り、人類は更に之に次ぐに異性愛以下の後半を以て終始するのである。前半は生理的であつて、後半は心理的で、且つ社會的と見らるゝのである。動物より人類に至る過程(系統的並に發生的)に於て、兩性關係は單純より次第に複化し、從つて兩性の選擇も、自然より人為淘汰に傾き結婚制度にも幾多の種類を生じ、その制度も亦文化の進むと共に歴史的に變遷し、文化の停滯する野蠻人種間には、今尙文化人の過去を殆どそのまゝ支持するの現状である。

今日の文化人間に普遍的なる結婚制度は、即ち一夫一婦制である。而してその結婚成立の第一要因は單數なる男女間の戀愛である。その戀愛は單なる感情ではなくして、美はしき情緒と合理的理智との合力でなければならぬ。斯うして成立せる結婚生活は、生涯的のものであり、その戀愛は相互の全我的永續的のもので、且つ進化創始性のものでなければならぬ。即ち相思の戀愛は、結婚して夫婦愛となり、出産して家族愛に複化し、次で人類愛となり、神愛に向上すべきも

のである。斯うした意味に於て、離婚は人生に於ける異常なる岐路邪徑である。既にその戀愛の動機及びスタートと内容とが異常であるか、又は結婚を構成する要因に缺陷あるか、或は結婚後に挽回し難き大なる過失(姦淫の如き)あるかに起因すべきものである。眞の戀愛は前述の如く、その動機並にスタートと内容と、及び結婚の要因とに於て正當なるか、又は多少の缺陷ありとするも、之を善化し正常化し得る創造性を有し、神を合目的の唯一對象とするものなるが故に、所謂永續性を缺く短期の、享樂豚情主義(ビグテンパイ)の簡易離婚、或は多角色の姦淫結婚とは、全くその範疇を異にするものである。

戀愛が至上至高であり、最高人格的であるとすれば、その至上最高の頂點は、勿論神を外にして此世に何ものもあるべき道理はない。そこには如何に間違つても情死などあるべき筈はない。眞の戀愛は、神を中心としてそこに他我彼此の人格を美はしく助成こそすれ、決して之を傷づけるわけではない。全く永遠性の眞理そのものでなければならぬ。斯うした宗教的哲學的藝術的及び道德的なる、立體無限性の戀愛を具體的に證明しつゝあるものは、科學就中生物學的考察ではあるまいか。生物學は他の自然科學と共に、沒價值無目的にスタートして、遂に超自然の雰圍氣に屬する有價值合目的に到達し、そこに人生の眞意義と戀愛の根本義とが、神に歸結すべきこと

を暗示しつゝあるではなからうか。さうした意味に於て戀愛は、決して單なる異性の情熱的衝動をスタートとしての遊戯的享樂ではない。神を抜きにした戀愛の高調者は、實に科學を無視して文明を没落に導く先覺者否先盲者である。

一、現代の文化人が、性慾とそれを中心とする、種々なる屬性とを輕視し、蔑視し卑下し又は罪惡視することの正否如何は、前項の説述によりて自ら明瞭なることであらう。蓋し性慾は生物の主要なる本能であり、普遍的自然性である。斯の本能である自然性は、自然法則の下に眞理であり、自然法則を支配する神の前に人格的眞理(Personal truth)でなければならぬ。事實に於て、吾人が自然界に於ける生物の生活現象より受くる反映が、それを證明して餘りあると思ふのである。吾人が自然界に於ける或植物の咲き匂へる花に對するとき、又梢に歌ふ鳥や、叢に鳴く蟲の音に觸れたときに、如何に我等に内在せる美性が感發してそれ等に共鳴するかは言ふも更なりである。然るにそれ等賞美の對象たる花や禽蟲の鳴聲は、生物學上より之を見るとき全く雌雄の配偶を求むる性慾中心の象徴に過ぎないのである。されば之等の自然現象を、生物學的深さにより、將た藝術的廣さによりて感受するとき、如何にその眞理の容積の大なるかが思ひやらるゝのである。

生物界に於ける性慾中心の諸現象は、そのまゝ自然性であり眞理性を有する。故に全體より達觀してその間に自から調和がとれてをる。従て又善性であつて、そこに美性も認められる。然るに吾人人類界に至りては果して如何であるか。今之を野蠻人種の社會に就て見るに、彼等の生活が自然に近いだけ性慾に於ても未だ他の生物界に於けるが如き自然の趣を存してをるが、僭未開人より進んで文化人に至ると、却てその文化の進むに反比例して、彼等の自然性眞理性並に善性を裏切り、頗る不調和の實現を見ることは如何にも奇怪であり、不自然に思はるゝのである。是れ果して何がためであらうか。吾人は何處までも其の理由の存するところを追究して之が歸結點を發見せねばならないと思ふのである。

抑々人類が自然界そのものを向ふに廻はし之を敵視して、彼は自然であり我は人類である。我は自然界に對峙し之を征服すべきものであると自覺し意識したる其處に、人類の長所ありまた短所を暴露したものであらう。その自覺と意識とが即ち人類の一大特徴であるとは生物學の専ら主張するところである。而して聽てその意識上に善惡觀念の意識を生ずるに至つた斯の意識を支配するものは實に良心そのものである。個々の良心には絶えず誤謬あるも、此の良心が内外の自然性と協調して邁進するところに、神の座を發見するのである。その發見と共に人生の基調が安定

するのである。

脱線を之だけに止めて性慾問題の本線に立ち歸らう。斯うした脱線否前提によりて始めて本問題は容易に單純化さるゝのである。

元來文化人が、性慾を輕視乃至罪惡視するに至りし所以は、彼等が自然に對して自己の立場を、否智識を餘りに過重視せし結果である。昔時の印度や埃及の文化人は、自然を恐怖した。而して希臘の文化人は人間の價値を意識し、自然對人間の基礎を据えたといはるゝのである。斯うした徑路を取りて進み來つた今日の歐米文化人は、智慧の實質に於てこそ未だ希臘人に勝り得ないであらうが智識の數量の増加に於ては實に莫大の差を示してをるのである。斯の智識の増加が、聽て人間をして自然征服てふ自負心を生み出さしめたのである。然もその實は自然の法則に従つて自然を利用してをるに過ぎないのである。兎に角自然征服の思想が盛になり、殊に自然科学の方面に露骨に活用されしそれだけ、人間の方が益々偉らくなりて、茲に自然を輕視するに至り従つて僭越にも人爲的に自然の法則を容易に變換し得べしと傲語し、その結果自然法則の支配者を無視するに至つたことは洵に當然の歸結であるといはねばならぬ。

斯様に自然を輕視し、自然の支配者を無視して、人間のみを重視する性慾觀は、全く人間本位

である。故に斯うした性慾觀は、單に人間だけの深き廣さにして、その歸結するところは、享樂を主張し性慾を遊戯化し、淺薄なる自然主義本能主義を唱道して、人間をして豚、犬以下のレベルに向下せしめ、自然の眞意義を知らず、本能の眞價値を解し得ざらしめるのである。而して之等を主張唱道する彼等も幸か不幸か彼等の人格的内容よりして、良心意識を全然排除し得ざること累をなして、彼等自身の主義主張とその行爲が必ずしも眞の自然又は眞の本能でなく、又確に善性でないことを感じるといふ矛盾を來してをる。そこに性慾に對する罪惡感が發芽し而して生長もする。

物質的に見て、生殖細胞なる卵子と精子とが、所謂身體の老廢分なる尿の排泄口(精子)、又はそれに近き部分(卵子)より出づることや、或は月經に於ける排血の事實を以て、性慾又は性交の不淨なる理由とする人々もある。されどそれは實際に於てさまで強力なる理由ではない。性慾を罪惡視する主なる理由は、それ等に加へて、前述の如き人間を基準とする不自然なる性慾觀と、良心意識の自然性の性慾觀との矛盾するところにあると思はれる。人間を基準とするところに、自己中心即ち利己(Egoism)がスタートする。かの性慾を心理化したと稱する斯の種の戀愛には、戀愛對象の二人利己(Dual egoism)あるのみにて社會は固より眼中にない。而して斯うした利己

は、更に複數にならんとする傾向が充分にある。是に於てか彼等の戀愛が多角になつたり、亂婚に變轉することも敢て不思議ではない。斯る際に於て性慾の至高至善などを唱へ得べき餘地が何處にあるであらうか。性慾罪惡觀がそこにも暗黒なる影をひそめてゐると思ふ。

要するに、問題は、同じ性慾に對し何故に或は之を惡魔視し、或は之を神聖視することができるのであらうか。此の疑問に對する解答は蓋し簡單である。

自己を意識せざる、又良心作用を全く缺如せる人類が若しあるとすれば(事實に於てはないのである、勿論白痴を意味しない)、そこに性慾は自然であり、他の生物の如く善性に屬するものであるだらう。然るに既に自己を意識し、又良心意識の作用を有する人類は、エデンの園で食ふべからざる果實を食ひしたため、そこに自然と神とに對する反逆者となつたのである。換言すれば人類は、自然を慕ひ、自然の法則を喜び、その法則の支配者なる神を心から憧憬する眞實なる自然主義者、本能主義者であると共に、一方に於てそれに反逆せんとするところの矛盾性を併有するスフィンクスである。即ち人間は意識せる神性と意識せる動物性(動物は意識せず)とを共有するのである。更に簡言すれば、善惡兩性の混成生物である故に性慾の衝動があれば、それを意識して性交を企圖する。而してその性交の不正常が、良心意識によりて惡性と認められても尙之

を遂行する。そこに善惡兩性の衝突がある。斯くて若し自然とその支配者とを無視せる人間本位者ありとすれば、斯うした人間の凡ゆる企圖は悉く惡性でなければならぬ。その見地からの性慾は罪惡の別名となる。

吾人は、自然及びその法則と、その法則の遂行者なる神とを意識して、それ等を包容するところに眞の戀愛を見出し、理想的結婚を迎へ、愛の正常なる過程を體驗する。斯うした意味の戀愛こそ至上であり、その戀愛の本質たる性慾は神聖であるといひ得るのである。

二、性慾の神聖視さるゝところには、それを中心とする性交の現象も、又は生殖器官も自ら同様に視されねばならない。之等のことに關して、自分の尊敬しつゝある舊約聖書學者左近義弼教授著『根本問題』なる小冊子中より、次項のセンテンスを引證する。同氏は勿論生物學者ではない。聖書研究に於ける造詣の深い碩學である。さうした學者の所産が吾々の如き生物學上よりするもの見方と、主要なる點に於て全然一致符合するといふことは、如何にも有意義であり、自然界の合目的なることを思はせらるゝのである。即ち氏は形而上よりし、自分は形而下よりするところの雙方見解一致の歸結である。同氏は曰く

(一) 生殖器官に對し(『根本問題』五五頁以下)、

『さて聖靈の宮たる身體の中の、奥の最も奥にある、我等の至聖所の構造は、ソロモンの拜殿の至聖所の夫れよりも、更に幾百倍の精美を極め、更に幾億倍の巧妙を盡してゐる。即ち予が「男寶」「女寶」といふものの男の莖は女の核、男の袋は女の子宮、男の二つの丸たまは女の左右の卵巢、かくて男寶は外に出で、女寶は内に入り、この内外の凸凹、生理上にも心理上にも互にあひ調節して、爰に神業にとて心の愛と身の力を全く獻げて、人の行ふ最大最高最美最聖の大事業たる、子を生むに努むることができる。素よりその事業の、最も聖い最も大きいだけに、人生の最大快樂と最大苦痛とが、心と身に伴うてゐる。』云々
又或ところには(五七頁)

『聖い意味に於て昔の性の崇拜に歸らねばならぬ』と。次に氏は、

(二) 寢室に就て(六〇頁)

『……精巧に強大なる器具を作るには、廣き淨き工場を要する。まして神業を手傳ふ夫婦の寢室の大切なるに於てをやである。さうして生むだ健な子は、十億圓の富よりも國の貴い寶、賢い子は……』

『……故にまづ家を建てんとならば、客室などはほんの間に合せにしつらひ、餘は夫婦の寢室を

城の如く宮の如く固く美しくつくり……』

(三) 性交に關して同教授は(六六頁)、

家庭の萬事が妻本位なれば、性交に於ても然るべきことを述べ、

『……妻の月經の初まりより數へて十四日目あたり此の時が妻の性の最も熱せるところ、體質と勢力との望むまま、その前後二三夜互に、全心を込めて、強き性の交りを聖く十分に楽しむがよい』と

随分露骨なひひ現はしで、寧ろ形而下學の生理學者の言ひ分のやうに見えるのである。然しその背景に、蘊蓄の深い聖書智識と共に、氏が敬虔なる基督者として、六十年に近き人生の體驗の存在せることを思ふときに、その由來する興行の深遠さが想像さるゝのである。

吾々が、性慾の由來を尋ねて遠く生物進化の過程に溯り、そこに數千萬年を數へて、然かもその永きタイムと、廣汎に擴充せるスペースとを思ふときに、限りなき崇高の念を生じ、更に兩性の起原を考察するときに、言ひ知らぬ莊嚴の感に打たれ、茲に造物主の至神至妙なる深意義のプランを肯定せずにはをられないのである。

一三、以上の意味に於て性的生活を徹底的に思惟考察せんか、獨身生活又は産兒制限は、言ふまで

もなく異常不自然の現象である。されども現時の如き過渡期にある人類文化は、今や人智の過信と神に對する不信、即ち眞の意味に於ける自然に反する不自然とに陥つてをる。換言すれば極端なる人間本位を基準とし、そこに文化の没落と人類の滅亡とに傾きつゝある異常現象を呈してゐる。そこで現代人が、それ等の異常現象の中において、尙よく生存の奮闘を持續して、眞實なる人生を味ふためには、或は獨身にもなり或は夫妻間の産兒をも制限し、更に人種の改良をも實現し、以て人類全體の眞の幸福を希圖追求すべく全心を捧げなければならぬことになつてゐるのである。而してその所謂眞實なる人生、眞の幸福とは果して何であるか。身心に對する適當なる性の教育を施し、健全なる身體を得て、以て戀愛を基調とする結婚生活に入ること、それは誠に幸福なる人生生活であらう。されども實際それのみにて人間の幸福追求慾は決して満足されるものではない。沉んやさうした生活を裏切るべき内外の出來事が、犇々と脅威し迫害し來るに於てをやである。

然らば、獨身生活者は、如何にその人生を意義づけ、社會生活を全うせんとするか。又夫妻の家庭生活に於て、産兒を制限して優良種の子女を教導すといへるその教導の基準は何に據るか。その所謂社會奉仕とは社會に向ひ、如何なる目的を以て何を奉仕するのであるか。子女教導の基

準は無論善導であらう。然らばその善とは果して何であるか。善惡の標準は何に準據するか。斯くて吾人人生に於ける極めて漠然たる或は浮萍的曖昧なる凡ゆる事項を嚴密に追究し來るとき、そこに全く單純化せる唯一神に歸結するではなからうか。哲學的思索の極、科學研究の終局、藝術美の眞髓、道德の根源及び凡ゆる宗教の根本が、それ等の全然一致せる共通の中心を有することを見出し、そこに萬物の造主であり、その支配者であり、空間と時間を超越せる、生ける人格的實在者にして、愛の唯一代表なる神の存在を發見するではなからうか。

されば神を無視しての性教育は全く挿花的であり、同じく産兒の制限は罪惡であり、人種の改善は却て健全なる惡人養成の改惡となり、戀愛はデカダンスに終ることを、吾人は史實によりて確信するのである。

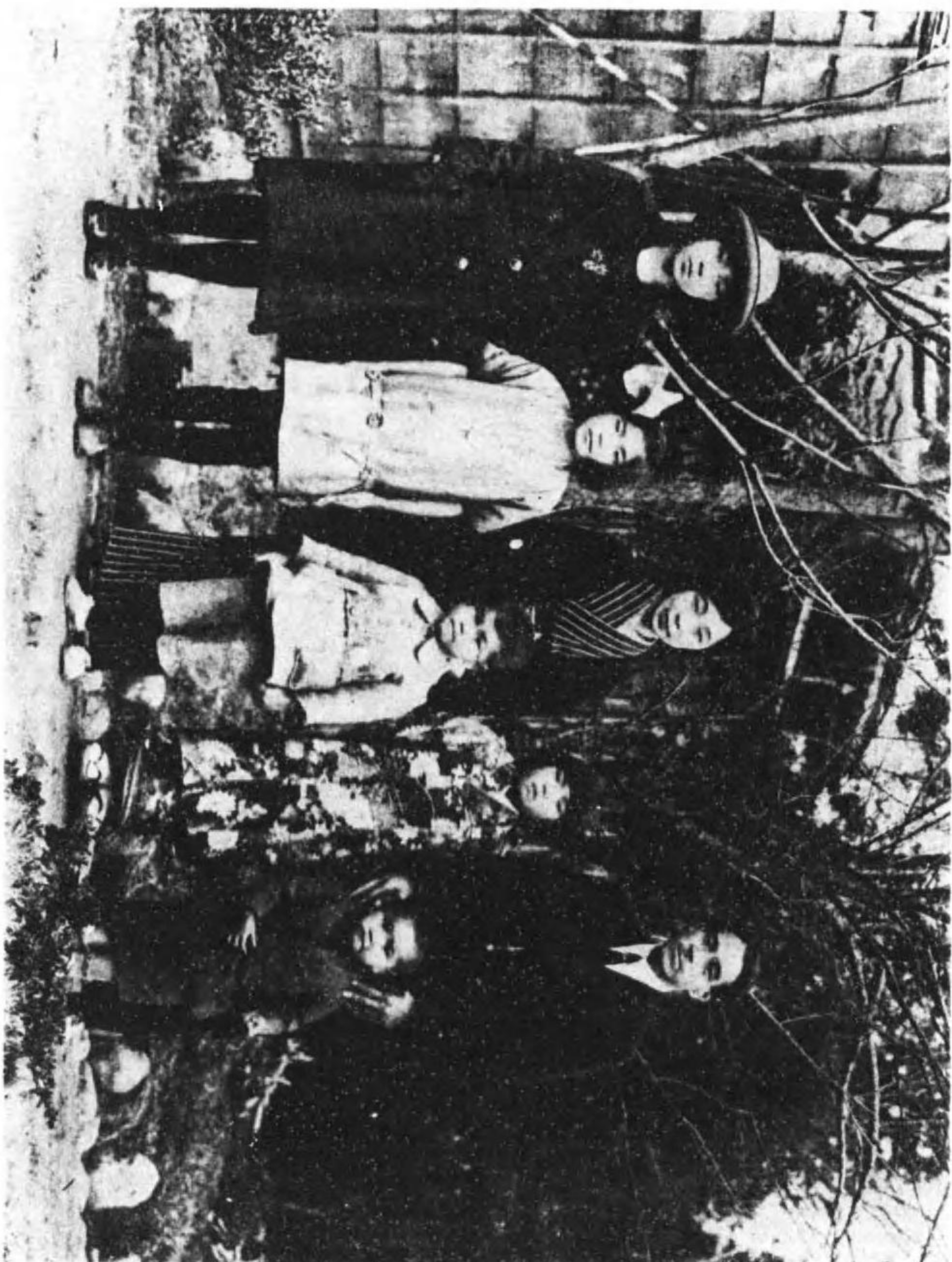
一四、斯うした意味に於て、兩性問題が、如何に生物學によりて精細に研究されても、亦哲學的考察或は藝術的賦彩、又は道德的論議によりて如何に理由づけられても、眞の宗教的本質を缺いては此の問題は決して永久に解決されないであらう。神の獨子、神の化身、又は神そのものであると信せらるる史實のキリストは、二千年の昔時、男尊女卑の猶太に於て既に男女を人として平等に見做し、一夫一婦制を肯定し、結婚と離婚とに就いて諭し、更に人類の眞の幸福は、神を信ず

るにあり、神に服従するにあり、神の愛を體得してその愛に溺るゝにあり、十字架を負うて邁進するにあり、永遠の命を得るにありと、溢るゝ慈愛限りなき熱情を以て諒々と説き、懇々と誠め且つ行ひ絶えず祈り、而して其の身は遂に自國の僞善者によりて殺されたのである。

一五、要するに現代までの生物學が、他の科學及び哲學、藝術、道德並に宗教の嘗て踏み入らぬ荒地を開拓して、そこに種々なる新事實を兩性問題に供給し、て斯題の解決に或具體的光明を投射してゐることだけは確なる事實である。故に吾人は、之等形而下の事實及び、その事實による暗示と、前述せる形而上の事實及び、その事實による暗示と、前述せる形而上の事實及びその暗示とを綜合して茲に一つの合力を見出し、以て人生てふ背景より斯の兩性問題に當面して進むべきである。斯くて今まで夢のやうに思はれ勝ちなる人生、然かもその大部分を占有する兩性生活に對して、迷霧の中にも一道の光明を得、そこにその指導者なる神を體驗し、認識し、信仰し、而して神の眞意義を解し得、唯彼に盲従することに於て初めて人生の眞意義を體得し、兩性生活の眞價値を發見し、以て永遠性の生命に入るべきものなることを堅く信するのである。

要之、兩性問題に對する生物學、即ち自分の唱導する狹義の生物學は、多くの具體的觀察と、實驗の事實と及びその考察並に思惟の方法とを提示して、一般生物界乃至吾人人類界に於ける兩性存

在の解釋に少なからぬ新らしき材料を供給し、以て思索の範圍を廣く且つ深くした。斯くて最下等なる單細胞動物が彼等の單細胞そのものゝ、無性又は兩性兼有性によりて、彼等の個性を完全に表現するが如く、吾々人類が男女に分化したる以上、その求心性なる女性と遠心性なる男性との、二者の合計によりて、初めて完全なる人生の象徴たり得ることを明示し、又その夫妻の融合調和によりて、初めて眞の家庭の基礎が確立し種族維持が完成さるゝことを指摘したのである。而して又廣義の生物學は、更にその羽翼を擴げて、哲學藝術道德及び宗教をも包容し、その最も複化する人類の兩性問題に就て、次の如き結論に到着せしめたのである。即ち兩性の關係は、先づ第一に性慾を本質として心理化する戀愛を基調とし、更に人格の聖化する神性を基準とすることによりて、初めて圓滿無垢の眞善美を發揮し、そこに神人合一の人生觀に歸結すべきものなることである。(完)



著者其の家族

兩性問題と生物學 索引

ア

あかさんこ 四二
 あさ 四四
 遊び人 三八七
 悪質遺傳 四四三
 アダム 五八
 有島氏 二、三九九
 蚜蟲(ありまき) 三七、三八、四一、四七、二〇六
 アルトロイズム 二一九、二二二、二三八、二四二
 アルマテイロ 一七
 二二九(圖)、二七三、二七四(圖)

イ

異型 一七八
 異形接合 一五七
 異常染色體 二五〇
 異性愛 三三九、三四二、三四四

索引

一夫一婦 三六四、三六八、三七九、三八四、四九一
 一夫多妻 一一一、三六九、三七三、三八三
 一妻多夫 三七四、三八三、三八四
 一價染色體 一七七

銀杏 四四
 遺傳 三〇三、四四五(善質)、四四三(惡質)
 圓形細胞 四四六(諸病)、四九〇
 一八〇、二四八

淫賣 三二一
 萎黃病 三七六、三八〇

ウ

ウォーレス 一〇、一三五(圖)
 死 二〇八
 氏と育ち 四四〇

鯉 一九三
 ウロトリックス 三〇、四二、六七、一四〇
 一五一(解説)

エ

永續性(結婚) 三四七

索引

一七

二

エゴイブム
エリス
エレン・カイ

一二六(女性観)、三九五、三九六
三九六、三九八、四〇四

蟹
蝸牛
カメレオン

二九六

オ

岡村氏
小熊木原氏
鱧
おつとせいの両性差

二〇
二八九、二九〇
四二、二〇六
一〇五(圖)

蟬
寒天苔蟲
間接分裂

九九(圖)

一七五、一八九
三六三、三八八、四〇九

カ

神
家庭
蛙
「歸り」
貝殻蟲
海綿類
蠶

四一一、四九二、五〇二、五〇三
五、六、五四、三四二
二〇四、二三七、二七五、二九二、三四三
四三
八五(圖)
四二
二三六(圖)

芽球
芽出
核動分裂
核質合換

キ

球芽
きうり
きりきりす
氣管蟲

二五
二二
一八九
三六
二五
二四八
二〇三
二二
八三(圖)、八四

索引

けんみじんこ 一六九(圖)
原生殖細胞 一七五
減數分裂 一七八、二四一
ゲッテス教授 四一
藝術萬能 四〇三

コ

酵母菌 三三三(圖)
好轉蟲 二〇四、二三九
苔蟲 四三
こみむしだまし 二五一
子守蛙 九六(圖)
子貢蛙 九六(圖)
子持蛙 九七(圖)
ゴニウム 六二
極樂鳥 一〇一(圖)、一四〇
合一 六三
合着兒 二七三、二七五(模型圖)、二七九

サ

交叉遺傳 二八一、三二〇
濠州土人 三七八
コラン 三七二
細胞質 二七六
再婚 四一三、四一五
鮭 一九三、一九四、三四三
左近氏 四九八
猿類の兩性 一〇四
繸蟲 四二
三大厄病 四四一
三角愛 三六六
産兒制限 四一八、四二三、四二六、四二七(反對説)
産婆蛙 四三〇(理由)、四三七(結果)、四四七(方法)、五〇〇
一五、一六(圖)、九五

シ

しいのみがひ 四〇
シリリス 二二
子宮脱出症 三二一
色盲遺傳 二八〇、三二〇
しょうかいだう 二六
宗教 七
視神經萎縮 三二〇
酒精 四四一、四七一
受精 一八一、三〇一
受精卵 一八九
受精現象 一八七(圖)
雌雄淘汰 一五、一三四(淘汰説)、三五四
雌性 二八
雌雄異體 二八、四四
雌雄別 九三
雌雄同體 二九、四二、四四
雌雄合體 二三〇、二三四
四集染色體 一七七

索引

五

出生兒 二〇九
自然淘汰説 一一
自然死 一三
自然主義 四九六
壽命 一三
自由戀愛 五、四一三
自演 四六九
しだ 三三三(圖)、三三三、二〇九
種族維持 一六
處女生殖 四五
處女降誕 四二一
衝動 三四九、三五八
シヨマンハッセル 一〇九(女性觀)、三九六(戀愛觀)
四〇四
一〇九(女性觀)、四一六(再婚)
女性の發源 一五四
猩々類 一一八、一二〇(圖)
じゃがいも 四八
新婚飛翔 一九二

新マルサス主義	四二三、四三七(結果)	七
人工早産	四二六	九
人工單爲生殖	四六	一二
人類の進化	四一四	一九六
人格愛	三八七	二一、四八二
白蟻	九〇(圖)、九一(圖)	一七一
嫉妬心	三八二	四九
シンクレア	三九六	二八、六〇、七五、一五七(起原)、一六六(同上)、一七〇(同上)、一七一(同上)、一七二(體細胞との關係)、一七四(發育)
眞善美	四一一	一九八、二五二(三型)、二六四、二七六、二七八(人間)、二九一、二九三、三〇〇、四八九
社會愛	三四六	二八一、二八二
スカラブ こがれむし	三四二(圖)	二四二、二八三(圖)、二八七、二八八(圖)、二八九(圖)
スタイナハ	一三一、二九二	一七五
スペンサー	一〇	六四
杉森氏	三九八	三四一
すなのみ	九二(圖)	一五五
すこかい	一八〇	

ス

七

性愛説	三九三	二二〇
性慾	三四〇、四六五、四九三	三二、三五、三九、四〇、四一
性慾醇化説	三九七	三七二
性交	三五一、四九八、五〇〇	五
性教育	四五九、四六三、四六四(要項)、四六九、四七二(家庭)、四七三(學校)	九〇
精子	一五九(圖)、一六三(圖)、一六四(圖)、一七五(發育)、一七九(發育圖)、一九三、二四七	四七
精子生産者	六〇	三二一
精細胞	一七七	三九四
精核	一八八	四三六
精星	一八八	
精蟲説	二四六	三三三
精巢	一七四	一八五、三五二
精母細胞	一七六	一五五、一九二
精莢	九三、一八二(圖)	三九八
接合	六三	四二九、四五八
接合生殖	二九、五二	一四
接合子	三三二	ぞうりむし 三〇、三二(圖)、三三、三五、三六、五一
生産兒調		二二〇
世代交番		三二、三五、三九、四〇、四一
正妻		三七二
節操		五
蟬の諺		九〇
織毛幼蟲		四七
漸進性筋肉消耗症		三二一
靜的解釋(戀愛)		三九四
絶産		四三六
そこひ(白内障)		三三三
走化性		一八五、三五二
相引		一五五、一九二
創造擴張説		三九八
總領の甚六		四二九、四五八
象		一四

リ

ソロモン王

三七二

夕

たうちさせんちう

八二(圖)

たうらうさう

二六、二七(圖)

體細胞

二八、六〇、七五

太陽蟲

二三

たこ

九三(圖)

たにし

二四七

だに

二二五

ダーウケン

一〇、一二六、一三四(圖)

田中氏

三九七

諾册二尊

五八

脱腸

三二六

廢胎

四二六、四三七

第一次性形質

一二五

第二次性形質

一二六、一三二、三五九

單數

一七六

チ

中片

一八八

中央體

一八八

中心體

一八七(圖)、一八八

中心質

一八八

彫刻森

三五〇

長壽

三二九

鳥類の兩性別

一〇〇

ツ

角嘴鳥

一〇二(圖)

つゞらふじ

四七

つりがれむし

三二、七三

テ

貞節

五、三八二、四一三、四七五

貞女

四二一

低能

三三〇

ト

癲癩

三二九

テトラピア

一六

アイストマ

三九、四二、四七

アラージ

一〇、一二八(圖)

アフリース

一六

ナ

四二八、四二〇、四二二、五〇〇

ナ

内胚葉

一九〇

内發芽

二五

内縁の妻

二六三、三八八

男女同權

一七一、一九六

男女の差

一〇六

ニ

二價染色體

一七六

二重染色體

二六二

ニートン

四一四

にんにく

二三

人間胎兒

一九一

ネ

ねじればね(燕翅)

八七(圖)

れすみこち

九四

ハンター

一二六

囊胚

一六七、一八九

ひかげのかつら

三五二

二二五、二四〇

ヒドラ

二三、二四(圖)、一七〇

ヒドロ蟲

二三(圖)、二四、一七〇

蛭

四二

ひわ

二三五

ヒバ

一五(圖)、九七

ヒルシエフェルド

三九五

避妊

四二六、四三五、四四九(方法)、四五〇

美の觀念

三六〇

夫婦

一〇一、三六六、三八七

夫婦愛

二四七、二五〇、二五九(變化表)

副染色體

二六一(性状と性決定)、二六四(批判)

囊蛙

九七、九八(圖)、二九一

ハ

ハ

ヒ

フ

れすみこち

九四

ハンター

一二六

囊胚

一六七、一八九

ひかげのかつら

三五二

二二五、二四〇

ヒドラ

二三、二四(圖)、一七〇

ヒドロ蟲

二三(圖)、二四、一七〇

蛭

四二

ひわ

二三五

ヒバ

一五(圖)、九七

ヒルシエフェルド

三九五

避妊

四二六、四三五、四四九(方法)、四五〇

美の觀念

三六〇

夫婦

一〇一、三六六、三八七

夫婦愛

二四七、二五〇、二五九(變化表)

副染色體

二六一(性状と性決定)、二六四(批判)

囊蛙

九七、九八(圖)、二九一

ハ

ハ

ヒ

フ

はつかれづみ

二〇一、二一一

ハックスレー

二四七、二五〇、二五九(變化表)

二六一(性状と性決定)、二六四(批判)

鳩

二〇三

はしげみ

二〇七

ハックスレー

一〇

二四七、二五〇、二五九(變化表)

二六一(性状と性決定)、二六四(批判)

風鳥

一〇一(圖)

フィロキセラ

二二五(圖)、二二六(圖)、二四二

プラナリア

二三

プロトミクサ

二六

プラトーン説

三九三

雙兒

二三〇、二七二、二七九

雙兒産

三二二

不妊症

三二一

癩癩

三二九

舞踏病

三三〇

分葉

二六

分枝生殖

二二

分體生殖

二二

扁平體

三二(圖)、三三、三四(圖)

ペロニア

四四

ペーチャー

四一〇

索引

メツオラ

四七一(酒害)

ベッファア

一八五、三五二

ヘッケル

一〇

ホ

補足

一九六

胞胚

一六六、一八九

胞子生殖

二六

胞子囊

六八

紡錘絲

一八九

ホルモン

一三一、一四〇

本能主義

四九六

ホルネオ

三五九

ホネリ

八四(圖)

ホヴェーリー

一六六(圖)

放散蟲

二三

マ

マッテウス・デル

四

索引

マラリア原蟲
「間引き」

二六
四三六

妾
女寶

三七二
四九九

みつばち

九二(圖)、一八五、二〇六、二四一、二六八

没食子蜂

二一八(圖)、二一九

みじんこ

三八(圖)、四一、四七、二〇八

もみぢがひ

一八〇(圖)

みづくらげ

二二三、二四〇、二四二

もんくまばち

二二三

みどりむし

六一、二二一

モーパ

三六、五一、五二、五三、二〇四

蚯蚓

四二

モルガン

一一二、二〇一、二九四、三二三

ミリアニダ

二五

モルモン

一一一、三六九、三七三(説明)

ム

夢中

一九三

夜光蟲

三〇(圖)

無性芽

二三

山芋

二三

無性世代

三三、三八

矢蟲

一六九、一七〇(圖)

むかごころのを

二三

夜盲症

三二〇

メ

めすあかむらさき

卷首第一圖

ユートピア

四四〇

ユ

ヤ

ヨ

有絲分裂

一八九

有性生殖

二八、三九

有性世代

三三、三八

優性學

四三六、四四〇、四四六、四五二(法禁)

游走子

四五三(要項)、四五六(反對説)
三〇、七八、一四八(圖)
一四九(圖)、一五〇(圖)

卵生産者

六〇

卵子説

二二九

卵巢

一七四

卵巢移植

一三〇

卵母細胞

一七六

卵膜

一八六

卵蜂

二二六

亂婚

三七六、三八一

亂視

三二四

陽氣

一一八

羊齒類

三二

幼胚

一九〇

ヨハンセン

一一

リ

離婚

三七九(ヴェッダ人)、三八七、四九一

リズム

二

リッドル

二〇七

リノアルマ

一五

林檎酸

三五二

理性

四一四

鱗皮症

三二一

ラ

ラスキン

三六二、三六六

癩病

四四二

卵割

一六六

卵子

一五八(圖)、一六〇(圖)、一六一(圖)
一六二(圖)、一六五(精子との比較表)
一七五(發育)、一七九(發育圖)

索引

両性生殖	二八、一五二	戀愛	二、七、一五七、三四〇、三四三、三五一
両性の起原	三〇、五六、五八、一四一	戀愛論	三九〇、三九一、三九九(批判)、四一七
両性の特徴	一四五、一四七、四八三	戀愛観	四八一、四九二
両性の進化	六〇	戀愛歌	
両性の分化表	七〇	戀愛本能	三九四、四〇五
両性の異同	七六	戀愛と他の愛	九八、三四二
両性別	七九、四八四	戀愛の進化	三〇八
両性別表	七九、八一、九三	戀愛と結婚及離婚	四〇二
両性存在の意義	一一〇三、一四四、一四七、一五二	戀愛と道徳	四〇七
両性差の原因	一九五、三五三、四八八	戀愛と死	四〇八
両性愛	一三四	連性遺傳	四二二
両性愛の進化	三五三		二七九、三一〇、三二〇
両性淘汰	三三九、三四四(フォーレル)		
	三五四		
ルツカ	三九八	老衰	一三
		老衰退化	三七
レ		ワイスマン	一〇、一七三(圖)、二四〇
靈肉一致説	三九七		

索引

ワイニンゲル
綿吹貝殻蟲
若返り
中
のみり

三九五
八六(圖)
二〇、五二
尾蟲
男實
九五(圖)

ラ

四七
四九九

A

Accessory chromosome247, 260
 Achondroplasy325
 Aedogonium42
 Agamogenesis21
 Ageniapis226
 Alkaptomuria327
 Alloigenesis40
 Alternation of generations33
 Alytes15, 16(f), 95
 Amatory croaking343
 Amphimixis28
 Amphigomy28
 Anabolism211
 Anasa248, 254(f)
 Andamanese363, 369(f), 384
 Angiostomum40
 Antigeny79
 Aphids (Apis)37, 222, 239
 Arteriosclerosis326
 Ascaris167, 168(f)
 Asexual generation33
 Asexual reproduction21
 Asplanchna241
 Astigmatism324
 Ataxy330
 Attraction340, 353
 Augustine373
 Aurelia33, 34

B

Bateson224
 Beard240, 243
 Birth control423, 426,
 427 (反對說), 430 (理由)
 Bivalent176
 Biophores265
 Blastula166, 189

Blochmann241
 Blumenbach201
 Bonelia84(f)
 Botrydium148(f)
 Boveri166(f), 234
 Brachydactylism326
 Brachystola248
 Bruchmann185, 352
 Bryophyllum26
 Budding23
 Bulblet23
 Büchner184, 353
 Bugnion271
 Bütschli52

C

Calkins51, 53
 Campanula184
 Cancer329
 Canestrini238
 Cankerworm89(f)
 Castle240, 244
 Castration448
 Cataract323
 Centrioplasm188
 Centrosome188
 Centrosphere188
 Cercaria44
 Cestomyia272
 Chamaeleon99(f)
 Chalcid fly270
 Charcot's disease330
 Chemotropism352
 Child19
 Chlorosis321
 Chorea330
 Citric acid352
 Cladophora148(f)
 Clathurina150

Cleavage166
 Clematis44
 Cobra343
 Collozoum150
 Complementary196
 Condition302
 Conjugal fidelity366
 Conjugation29
 Conklin20
 Coulter19
 Courtship341
 Consanguinity332
 Coranz237
 Cretinism328
 Criminality329
 Criss-cross inheritance281, 320
 Cryptorchism321
 Cuénot205
 Culteria72(f)
 Cyclops169(f)
 Cystinuria327

D

Dalla Torre234
 Daphnia38, 39
 Darwin, C.10, 126, 134(f),
 337, 354 (淘汰説)
 Darwin, E.10
 Davenport323, 333
 De Bary48
 Delage128(f)
 Detumescence351
 Digenetic reproduction28
 Dimorphism28
 Dinophilus204, 224(f), 239
 Dioecious28
 Diploid175, 241
 Dominant304
 Doncaster279, 291

Double chromosome262
 Double monster273
 Drelinecourt204
 Drosophila233(f), 310, 311(f),
 315(f), 317(f)
 Dual egoism347
 Duel359
 Duplex242, 282
 Dung-rolling beetle341
 Düsing203, 207, 237
 Dyaks384, 385(f)
 Dyspepsia327
 Dzierzon231

E

Ectocarpus68, 71
 Ectoderm190
 Edwards305
 Egoism347
 Eimer206
 Ellis119
 Elizabeth Turtle305
 Embryo190
 Encyrtus226
 Entoderm190
 Entrance core186
 Epilepsy329
 Epiornis161
 Epistylis73
 Erlanger241
 Ernst48
 Eudorina33, 65(f), 66
 Eugenics440
 Euglena61, 222
 Eutopia440
 Exostoses325

F

Fabre193

Fasciola39
 Family love345
 Fetischismus466
 Fiji372(f)
 Fiske113
 Fol238
 Follicle-cells248
 Forel344, 376, 471
 Friese234
 Fucus72(f)

G

Gametes28, 30
 Gamogenesis28
 Gastrula167, 189
 Gemmae23
 Gemules25, 265
 Geddes211
 Gentry205
 Germ-cells28
 Giard128
 Girou211, 237
 Glaucoma323
 Goethe10
 Goitre328
 Gonad171
 Gonium62
 Gonochorism44
 Gout328
 Grassi193
 Group marriage374
 Gross248
 Gruenberg19
 Guyer238, 284
 Gymnandrophs230, 341

H

Haeckel19, 41, 347
 Hamm159

Handwriting331
 Haploid176, 241
 Hayti378
 Hectocotylus182
 Heliozoa23
 Hematuria327
 Hemophilia318
 Henking247, 251
 Hensen210
 Hermaphrodite29, 240
 Hermaphrodite29
 Hermaphrodism42
 Hernia326
 Hertwig237, 240, 275
 Heterogamy157
 Heterogony33, 39
 Heterogamous71
 Heterotype178
 Heterotropic chromosome247, 260
 Hofacker209
 Holophrya26(f)
 Home-making54
 Hormones131
 Horn-bill102(f)
 Hornet222
 Human embryo191(f)
 Hume10
 Huntington's Chorea330
 Hydatina204
 Hyla96(f)
 Hydrodictyon149(f)
 Hypolimna卷首(f), 88
 Hypospadias321
 Hysteria330

I

Icerya86(f)
 Ichthyosis321
 Idiochromosome205

Indirect cell-division189
 Infatuated193
 Insanity329
 索 Internal budding25
 Iroquoians369, 371(f)
 Islamites369
 Isogamete30
 引 Isogamy157
 Issakowitch268

J

Jehring273
 Jenning53
 Jordan19, 111, 112(f), 286
 Jukes307

K

Kant10
 Karyogamy36
 Karyokinesis189
 Katabolism211
 Kellogg205
 Knight237
 Kustchin378

L

Lamarck10
 Landois205
 Lauterborn241
 Lecanium84(f)
 Lecithin208
 Leeuwenhoek161
 四 Lethrus342
 Letorneau19
 Leucophrys36
 Limnaeus40
 Litomastix226, 227(f)
 Loango372
 Longevity329

Love291, 392
 Love gambols743
 Lucretius10
 Luther373
 Lygaeus255(f)

M

McClung243
 Macrogametes64
 Mantegazza184, 353
 Marchal271
 Masochismus466
 Maupas36
 Meehan183, 208
 Megalophthalmuss324
 Mendel243
 Mérière's disease330
 Metagenesis33
 Meves247
 Meyer208
 Micropyl186
 Microgametes63, 64
 Middlepiece188
 Miracidium47
 Mitosis175
 Mivart137
 Molge95
 Memory331
 Monoecious29
 Monogamy368
 Monogenetic reproduction21
 Monogony21
 Montgomery248, 286
 More440
 Morgan52, 201, 234, 269, 294
 Mormons369
 Mounda-Kols384
 Mutual attraction155, 192
 Myrianiada25

N

Narcotism329
 Nature309
 Natural death13
 Negundo44
 Neo-malthusianism423, 425 (意義)
 Neuroterus218(f)
 Newmann230
 Nezara255(f), 257(f)
 Nototrema97(f), 98(f)
 Nuptial flight192
 Nurture309
 Nussbaum208
 Nystagmus324

O

Oncorhynchus194
 Oneida381
 Ontogeny196
 Onychodromus36
 Oogenesis175, 179(f)
 Oogonia175
 Oophorectomy443
 Oosperm189
 Ophryotrocha180(f)
 Otosclerosis324
 Ova158
 Ovary174
 Oxeye daisy184

P

Painter287
 Pandorina33, 63, 64, 65(f), 140
 Pangens265
 Paranuclear body226
 Parthenogenesis28, 38, 45, 239
 Pectenatella25(f)
 Peronospora49

Pfeffer352
 Pflüger239
 Phallus381
 Phyllobates96(f)
 Phylloxera213, 215(f), 216(f)
 Phylogeny196
 Phytophthora49
 Pipa15, 97(f)
 Pithium48
 Planaria23
 Planula35
 Plate138
 Pleodorina74(f)
 Plural egoism347
 Ploss207
 Plusia226
 Pneumonia327
 Polyandry374
 Polydaetylism326
 Polygamy369
 Polynotus272
 Polyspermy238
 Polytoma222
 Polar body177
 Primary oocyte176
 Primary sexual characters125
 Primary spermatocyte176
 Primordia297
 Primordial germ-cells166, 175
 Prolapsus32
 Promiscuity326
 Propinquity358
 Prostitution376
 Prophase189
 Protococcus70(f), 71
 Protenor253(f)
 Protomyxa26
 Prothallus33(f), 34(f)
 Prziham296

索
引
五

索

引

六

Psoriasis324
 Punnet208
 Pygaera247

R

Recessive304
 Redia47
 Reducing division178
 Reproductive cell28
 Reversion43
 Riley205
 Rheumatism328
 Rhinoderma15, 98
 Rival357
 Robinson, W.336
 Rolph208
 Romanes343
 Rotifer45
 Roux352, 353
 Russo208

S

Saddler209
 Sadismus466
 Salpingectomy449
 Santalese384
 Saprolegniaceae49
 Saprolegnia149(f)
 Sassafras44
 Schopenhauer108(f)
 Schultze205, 211, 240
 Schultz234
 Scoliosis325
 Scyphula35
 Secondary sexual characters...126, 132
 Sellheim19
 Senile degeneration37

Sex-elements43
 Sex-limited310, 313
 Sex-linked310, 313
 Sexual differentiation64
 Sexual dimorphism64
 Sexual generation33
 Sexual reproduction28
 Sexual selection354
 Shearer225
 Siebold230, 246
 Simplex242, 282
 Singhalese (cingalese)374, 375(f)
 Social love345
 Somatic cell28
 Sperm aster188
 Spermatids177
 Spermatogenesis.....175, 179(f)
 Spermatophore sac93, 182(f)
 Spermatozoa159, 175, 193
 Sperm nucleus188
 Spindle189
 Sporangia68, 69(f)
 Sporocyst47
 Sporulation26
 Squash-bug263
 Siatoblast25, 26(f)
 Steinach131, 292
 Sterility321
 Sterilization447
 Stevens250
 Strasburger244
 Stylonychia30, 37, 51
 Sutton248
 Syllis22(f)
 Synapsis175, 285
 Syndactylism326
 Syngamy152
 Syromatis248
 Syngamous83(f), 84

T

Telangiectasis327
 Telapia16
 Temperament331
 Tenebrio251
 Testis174
 Tetrad177
 Thomson19, 123(f), 211
 Thury237
 Tongas377(f)
 Toughtas380
 Tumescence351
 Tumor329
 Twin230

U

Ulothrix30, 42, 67 (三種游走子),
 140, 151
 Univalent177

V

Vallisneria44
 Vasectomy448
 Vaucheria42
 Veddas368, 370(f)
 Vivacity118

Vital units265
 Volvox33, 65(f), 66

W

Wallace135(f), 354, 356
 Weber235
 Weismann172, 173(f)
 Westermarck363, 367, 380
 Wilson248, 250(f), 251, 262
 Winiwarter285
 Wheeler234
 Whitney221
 Woodruff51
 Wyandottes369

X

Xenos87(f)
 X-chromosome260, 282

Y

Yucca183
 Yung206
 Y-chromosome260

Z

Zoospores30, 148, 149, 150
 Zygote32

索

引

七

大正十四年一月十二日印刷
大正十四年一月十五日發行

□定價五圓五拾錢□

不許複製



著者 木村德藏

發行者 東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
福永文之助

印刷者 東京市京橋區瀧山町五番地
渡邊吉郎

發行所

東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
警 醒 社 書 店
振替東京五五三番
電話銀座一五八七番

松村松年著	人間學としての體育	送料 價十二 五錢圓
倉長 巍著	新しき生命の歡び	送料 價十二 五錢圓
元田作之進著	社會病理の研究	送料 價十二圓 三十五錢
松村介石著	男女青年訓	送料 價八 十六錢
有馬純清著	心靈現象研究	送料 價十二圓 五十七錢
別所梅之助著	運命以外の一路	送料 價十二圓 五十七錢
マ 五 來 素 川 譯 著	未だ見ぬ親	送料 價十二圓 八十五錢
留岡幸助著	自然と兒童の教養	送料 價十二圓 七十五錢

發行所

東京・京橋・尾張町
(振替東京五五三番)

警 醒

社 書 店

終